
彼女と陽だまりの中で

黒野晋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と陽だまりの中で

【Nコード】

N4931C

【作者名】

黒野晋

【あらすじ】

高校1年の霧宮秋人には悩みの種が……。学園のアイドル的ポジションにつく一つ年上の幼馴染。その素直じゃない彼女によって振り回されながらも、徐々に近づく二人を描いた学園ラブコメディ！。

1日目『当たらずとも遠からず』

所詮人の一生なんてちっぽけで、大して他人と変わらない人生を送るもんだ。電気を発明した偉大なる発明家トーマス・エジソンも、果敢に敵国と戦い自国の為に己の全てを尽くした英雄ジャンヌ・ダルクも、20世紀以降で最も有名な画家であるパブロ・ピカソも、皆死亡率100パーセント。誕生すると同時に死へと闊歩している。歩んでゆく道のり自体は違えど、スタート地点と終着点は同じなのだ。行き着くところ皆同じだと思うと、俺は途端につまらないと感じてしまう。死んだとき、自分には何が残るのだろう。天国や地獄でもないかぎり、死は生まれたときと同じ「無」に還ると、俺は思う。

それでも、己の人生を全う出来た奴等は幸福なほうだ。若くして命をなくしたツタンカーメンや、目の目も見ること叶わずに流産された子供なんて報われないにもほどがある。前日はあんなに元気だったのに今日にはポツクリ、なんていうのはよくある話で、“死”に対する理解も覚悟も何もできないまま残された遺族も、また哀れで報われない。

そうした何時襲い掛かって来るか分からない死の恐怖に震え脅えながら、希望や夢に縋^{すが}ってヒトは生きてる。

本当は怖いのに笑って誤魔化す。

そんなことをしながら恐怖や苦痛を全部まとめてオブライトに包み込んで、顔を背け無理やり希望や夢に眼を向ける。

それは皆一緒。

とどのつまり、ヒト科である俺にも夢くらいはある。

5割の実力と4割の運、1割の恩恵さえあれば実現できるくだらない夢。

まあ今のところ、実現確率0パーセント、見込みなしだが。

長くてウザッたかった梅雨も明け、季節はいよいよ初夏を迎えていた。

7月に入ると太陽はますます日照り、アスファルトの上は暑さで歪む。日中は早朝から蝉が鳴き、夜は蛙と鈴虫の大合唱。身体を舐めまわすぬるい風を感じると、梅雨が狂おしいほど恋しくなり、温室効果ガスとそれに伴う地球温暖化を本気で恨みたくなる。

地球上の全人類が一日中息を止めていたら、どれだけの二酸化炭素が削減できるのだろう。

そんなとりとめのないことを真剣に考える、平日の朝。

「ふあああー」

自分の机にへばり付き、人目も気にせず大口を開けて欠伸をする。いやはや、学校というものはめんどくさいことこの上ない。

「秋人、お前朝からへばってるな」

倉本司くらもとつかでが呆れを大分に含んだ声で話しかけてきた。

「見えるか？俺の後ろにへばり付く亡霊が」

「ん？亡霊のような秋人がか？」

「何でもいい・・・」

会話のキャッチボールが億劫になり、適当に返事をし、机とキス。

だいたいなんで朝っぱらから「男の敵」としゃべらなければなら
ないのだ。

この男 倉本司は学年一の美形。いや、学校一といっても針小
棒大ではない。

180センチの長身に、長めの前髪から覗かせる切れ長の眼。顔
のパーツ一つ一つが整っていて、基本的に友達になりたくない奴ナ
ンバー1。流し目なんてされた女子なんかは、即フォーリンラヴ。

しかし言い寄って来る女子は星の数ほどいるのに本人には全くそ
の気はないらしい。それがまた波紋を呼び、同学年だけでなく今や
2、3年生のお嬢様方にもモテている。

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群。

才色兼備とはまさにこのことだ。

うぜえ。マジで思っていた。それは男なら誰でも抱く感情であり、自分より優れた人材に嫉妬するのは人間の性だ。

しかし、普段はクールで分かりにくいが意外と情に厚い。そのことを知ってからは一応親友的ポジションについてる。

窓の外を眺め、一人ごちる。

「夏だなあ」

昼休み。

いつもの場所へと向かうため、弁当片手に廊下を歩く。

ここ、東雲高校とうのうは浦浜市うらはまのほぼ中心部に位置する。私立である東雲高校は生徒数一千人を優に超えるマンモス校で、創立十数年というその歴史の浅さとは裏腹に著名人を数多く輩出している。

「自由」が校風のこの高校の最大の特徴は学校行事の豊富さにあり、学校祭や修学旅行、スポーツ大会に加え、クリスマスパーティー

や歩行祭などもある。

更にもう一つの特徴、それは学費の安さであり、俺がこの学校に通う理由でもある。

ここの校長兼理事長は某有名財閥の当主であり、私立東雲高校の創設者なのだ。有り余る金の使い道に困ったのだろうか、十数年前に開校し破格の学費で生徒を通わせている。大物と俺ら一般ピーポーとのスケールの違いをまざまざと見せつけられた思いだ。

俺 きりみやあきと 霧宮秋人はそんな高校の1年3組に所属している。

1年3組の教室は、4棟あるうちの4棟目。つまり校門から一番離れた場所に設置された校舎にある。各棟は3階構成の2階部分に通された渡り廊下で繋がっており、1棟は職員室と特別教室。2棟3棟4棟はそれぞれ順に、3年2年1年の教室である。1年生は移動教室の際にかなりの距離を歩かなければならないので、この配置は1年生への嫌がらせではなからうか。

俺の住居は浦浜市のやや東に位置する住宅街の一戸建て。浦浜駅から二駅ほど行ったところだ。通学時間は40分程。これが多少ネツクである。学校が近場であったならどんなに救われることか。

1年3組の連中は騒がしい奴らばかりだが、大半はいい奴で構成されている。入学して約3ヶ月が経ち、ようやく蟠わたかまりが解けてきた状態で、俺にも友達はできた。その一人が倉本司である。

俺は良き友人たちに囲まれ、学校生活をめい一杯満喫し、青春を謳歌おうかしている最中、だと思いが、果たして青春とは何なのかと疑問を感じるのもまたしかり。

廊下の突き当たりにある非常口を開け、その先にある非常階段を下りて裏庭に出る。

学校の裏庭は雑木林となっており、幾つかのベンチが置いてある。しかし普段この場所に訪れるのは俺くらいで、にんき人気とひとけ人気のないスポットだ。俺がこの場所を知ったのは少し前のこと。

慣れた感じでいつもの木の下で幹に寄りかかり、弁当を開く。

遠くから運動部の掛け声と女子たちの嬌声が聞こえるくらいで、この場所は閑散としている。

蝉の鳴き声が聞こえない、不思議な場所。

弁当をかつ込み終わると、片膝を立てて眼を閉じる。

脇の裏側に映る木漏れ日が心地よい。そよ風が前髪を弄もてあそび、小鳥たちが子守唄を囀うたる。

じわじわと押し寄せるまどろみに意識を預け、俺は暫しの浅い眠りに堕ちた。

ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピピッ

アラームの音と、バイブレーションの振動により眼が覚めた。

昼休み終了5分前。いつもこの時間に携帯のアラームをセットし

ている。

「よつと」

老人のように腰を上げると、両手を拳げ伸びをした。関節がぽきぽきと音を立てる。

「さてと、あと3時間頑張りますか」

俺は弁当を提げ、教室へと引き返した。

「おい秋人」

教室に戻ると司が声を掛けてきた。

「ん？なんかあった？」

「綾崎先輩が探してたぞ」

「あっそう」

「あっそうって・・・」

司が俺を嗜める^{たしな}ような表情をした。

「いいんだよ別に。どうせこき使われるだけだから」

俺はやれやれという風に首を振ると、窓際の席へと向かう。

開け放たれた窓からグラウンドを疾走する女子生徒をぼんやりと眺めつつ、古文担当のハゲ教師の話を聞くとともにしに聞いていた。

ここは2階。景色はいいのだが、夏の暑さが教室全体のやる気をなくさせる。身体にべったりとした汗が纏わりつき気持ち悪い。

ぼ　。

女子生徒数人がグラウンドから離れたこの棟のすぐ近くで体操をしている。

東雲高は現代に屈強として残るブルマ適用校だ。今時代錯誤もいいとこだが、もちろん男子生徒からのブーイングはない。女子生徒の中にちらほらと抗議の声上がるが、男子によってうまく言い包められてきた。

前後屈をしてちょうど前屈みになっている女子生徒の後ろ姿に目が留まる。

ブルマから伸びる長い足がなんとも……ではなく、なかなかスタイルが……こっほんこっほん。

自然と顔の筋肉が弛緩する。たぶん情けない顔をしているのだろう。けどどうしても弛んでしまうのだから仕方がない。

じつと彼女を見つめていると、何かが脳裏を掠めた。

どこか見覚えがあるような……

刹那、眺めていた女子生徒が後ろに反り返る。

これまで見えなかった顔が目飛び込んできたと同時に彼女と目が合った。

途端に俺はパブロフの犬の如くほぼ条件反射と言っていていいほどの勢いでみるみると蒼くなった。脂汗が頬を伝う。1秒ほどして我に返ると、俺は急いで顔を逸らした。

やってしまった。

何故気がつかなかったんだ俺は。

授業を受ける気など毛頭なくなってしまった俺は、へなへなと机に平伏すのだった。

「どうした秋人、いつにも増して生気が感じられないぞ」

放課後の教室で司が声を掛けてきた。

「わかるー？」

「ああ、アホ面してる」

「うつせえ！」

「まったく、司は心配してるのかどうかいまいち分からん、と心の中で毒づく。司の本心理理解できる奴って大物だ、きっと。」

「その様子じゃ、どうせあの人絡みだろ」

「ちっ、分かってるなら傷口広げるようなことするなよ」

「別にそんなつもりはないんだがな」

心底心外だと言うように肩を落としてみせる。

「どーだか」

仏頂面している俺を見て、司は目を細める。

「なんだよ」

俺が問いかけると、

「ご愁傷様」

それだけ言い残して薄情な友人は颯爽と教室を去っていった。腹立つな本当に。

教室で一人時間をつぶして、空が茜色になりかけた頃に下駄箱へと向かった。別に居残りさせられていたわけじゃない。これも“彼女”に会わないため。

スクールバッグを担ぎ、校門へと向かう。

ヒグラシの悲しげな鳴き声がどこからともなく聞こえてくる。まるで俺の未来を暗示するかのように。

校門に近づくにつれて、誰かが門柱に寄りかかって立っていることがわかった。

姿確認。

げっ

極力顔を合わせぬように素通り決定、と脳内会議で瞬時に結論が下される。

俺は俯き、できるだけ他人の風を装って門柱を通過した。

「ねえ」

例の彼女に呼ばれる。

無視。

「どうしたのかな、秋人君」

猫なで声で俺の名前が彼女の口からつむがれる。思わず寒気を催し、冷や汗が背中を伝う。

「……」

ただならぬ殺気を感じ、結局俺は壊れかけのブリキ人形のように振り向いた。

口調が妙に優しいとき、こいつはかなり怒っている。長年に亘る経験の基、培われた知識である。

「なんだよ、瑞穂。いたのか」

そう、こいつの名前は綾崎瑞穂。あやさきみずほ

一つ年上の、俺の天敵にして幼馴染。東雲高校2年6組所属。部活動は俺同様、帰宅部。成績優秀、容姿端麗の我が校のプリンセスで、その人気はファンクラブが立ち上げられるほど。言い寄る男は数知れず、フツた男も数知れず……。

身長160センチ強。スタイルはモデル顔負けであることは彼女のプロポーションから一目瞭然だ。子顔でパツチリ二重、すうっと通った鼻筋、ほっそりとした顎。髪は少し茶色がかかり、背中まで伸びるロングヘア。

「どこをとっても見劣るところなどない。まさに神の申し子と呼べ

る存在！！ ファンクラブ会員No.1さん談」

だがっ！俺は声を大にして叫びたい。外見に騙されるなど！

普段の奴は猫かぶりもいいとこだ。俺はそんな瑞穂の学校生活を垣間見て心底驚いたものだ。俺に対する態度との違いには、もはや閉口するしかない。

「白々しいわね。これだけ待たせといて、その言い草はないんじゃないの？秋人」

なおも優しい口調。だが、目が笑ってないぞ、目が。

「別に待っててなんて言った覚えはない」

瑞穂の眼光が鋭さを増す。

「こんな時間までいったい何してたの」

「瑞穂に教える義理はない」

「お腹空いたな」

「あっそ」

「奢って？」

やっぱりそうくるか。

「生憎と、今俺金欠なんだわ。悪いね」

「ふうーん……………それにしても暑いわね」

瑞穂は制服の首元をパタパタとさせて風を送っている。豊満な胸の谷間も見え隠れする。

「どこ見てんのよ」

「べ、別に」

「6限目。私に色目使ってたでしょ」

「何のことだ？」

声が僅かに上ずる。

「惚けないで。私視力いいの。ああ、秋人にそんな目で見られてたなんて、私心外だわ……」

明らかに演技と分かる落ち込み方。それでも、俺に対する効果は抜群だった。

当たらずとも遠からず、俺だって最初からお前だつてわかってりや、色目なんて使わなかったのに……………。

「誰がお前なんか色目つか」

「秋人」

「……………」

「奢って?」

「・・・・・・ハイ」

俺はがつくりとうな垂れ、真っ白になるのだった。

2日目『天使と悪魔』

「ただいま」

俺は憔悴しきった顔で、瑞穂は満面の笑みで戸口を開ける。くそう、パフェ2つも食いやがって……。なにが、「私を待たせた分と、一緒に帰ってあげてる分」だ。どっちも頼んでねえよ。瑞穂のお腹は膨れたが、俺の財布と心は萎んじまっただろうが。

「おかえり」

パタパタというスリッパの音と共にエプロン姿の明日香さんがこちらへやってきた。綾崎明日香あやさきあすかは瑞穂の母である。とても綺麗な方で、どこことなく瑞穂と似ている。気立てがよく世話好きで、まさに主婦の鑑かがみといえるだろう。

ただいまと言ったが、ここは俺ん家ではない。ここは霧宮家の隣、綾崎家である。二年前に両親をなくしてからは、夕飯など様々な面でお世話になっている。

瑞穂は、父親の篤史あつしさんが単身赴任しているので、明日香さんと二人暮らし。親子離れ離れでも、それなりに楽しくやっているようだ。

「今日はずいぶん遅かったのね」

「いや、まあ……」

靴を脱ぎながら曖昧あいまいに笑う。

「あら、秋ちゃん元気ないじゃない。．．．．辛いことでもあったの？」

俺の心情を的確に読んだ明日香さんは、俺の手をとり心配そうに覗き込んでくる。女性特有の甘い香りが俺の身体を包み込む。明日香さんは本当に瑞穂の母親なのだろうか？どう見ても年の離れた姉妹くらいにしか見えない。それに、瑞穂と違って身体中から優しさが滲み出ている。この胸に飛び込んでゆけたら、どんなに楽だろうか。

ごすっ

「っ！いつつてえ！」

俺は悶えながら弁慶をおさえる。

「何すんだよッ！」

「あらごめんなさい。足が当たっちゃった」

瑞穂は棒読みで台詞をはき終えると、澄ました顔でリビングに消えた。

「何かしたか、俺」

瑞穂の理不尽な攻撃に、怒りを通り越して半ば呆れていると、隣で明日香さんが子供のようにくすつと微笑んでいた。

夕飯の支度が整ったので、三人で席に着く。

「くあああ、腹へった」

「私も」

パフェ2つも平らげといてまだ食うんかい、このお嬢様は。

「ところで、秋ちゃんは友達できたの？」

「明日香さん、その質問もつ三度目ですよ」

明日香さんの手料理に舌鼓を打ちつつ、呆れを含んだ声で答える。

「あら、そうだったけ？」

「そうです。しっかりしてください。それに、友達もちゃんと作り
ましたから」

世話好きなのはいいが、俺に対して明日香さんは世話を焼きすぎる。
そんな信用されてないのだろうか。

「そお？ならいいんだけど。でも、最近疲れてるみたいだから、う
まくいってないんじゃないかと思って」

それは瑞穂のせいです、と言いつつになつて口を慌てて噤む。こんな
ことを口にした日は、俺の命日になりかねない。

「大丈夫よママ。それに、ママは秋人のこと心配しすぎ」

「ご飯を口に運びながら、心底どうでもいいように瑞穂は言う。

フンッ、お前のことなんて、ぜってえ心配してやらねえ。

そう心に誓っていると、明日香さんの目が悪戯に光るのが垣間見えた。

「そういう瑞穂ちゃんだって、いつも心配してるじゃない」

「してないし」

「ホントに？昨日だって、秋ちゃん夕飯に顔出さなかったただけなのに、そわそわと落ち着きなかったじゃない。終いには「秋人呼んでくる」とか言って何度も行きかけてたのは何なのかな？」

「ママっ！！」

瑞穂ががるるると明日香さんにくいかる。

「あれは秋人にチエス負けたまんまだったから気に入らなかつたのっ！それじゃなきゃ、どうして私が秋人なんかのこと心配しなくちゃいけないのよ」

へいへいそーですか。まったく、このお嬢さんはムカつくことばっかり言うな。

「あらあら、素直じゃないんだから」

明日香さんが微笑む。反対に瑞穂はしかめっ面になって食器をダ
ンツ、と机に叩きつけると、

「ごちそーさまっ！」

そう叫んで大股でダイニングから出て行った。

はぁ、と溜息を吐く。

当然の如く空になった瑞穂の食器がどこか誇らしげに見えるのは、
俺の気のせいかな？

コンコン

2度ノックする。

「・・・・・・・・」

10秒待ったが応答がないので「入るぞ」と言っで瑞穂の部屋の
ドアを開けた。

いつ見ても瑞穂には似つかわしくない部屋である。見える範囲で
もぬいぐるみは5個ほど。しかもプーさんやらスヌーピーやらうさ
ぎやらで、まるで統一感なし。カーテンはピンクで、ベッドも淡い
桜色をしている。

そのベッドの上で、パジャマに着替えた瑞穂が俺を睨んできた。

とつさに何かを隠したようだが、はて、何だったのだろうか。

「何よ」

瑞穂が低い声で唸る。

「チェス、やるんじゃないのか？」

そう言っ、瑞穂をまじまじと見る。いやだっ、ヒヨコは
だろっヒヨコは。着ているパジャマの柄はイチゴでも水玉でもなく
て、ヒヨコだった。そんな柄、どこ行けば売ってるんだ。それにお
前は何歳だ。

「・・・いい、もう飽きた」

「あっそ」

「・・・・・・」

俺は嘆息する。

「わかった。んじゃ、俺帰るわ」

踵を返し、部屋を出る。後ろで瑞穂の声が聞こえた気がしたが、
振り向くと瑞穂は布団を頭から被っていたので、何も言わずに扉を
閉めた。

階下に降りると、明日香さんが目を爛々と輝かせて待ち構えてい

た。

「どうだった？」

俺は頭の後ろで手を組む。

「どうもこうもありませんよ。瑞穂ずっと仏頂面でした。チェスもやらないって」

「そう……。あの子も素直じゃないわね。……。それに秋ちゃんも」

？

「あの、それどういう意味ですか？」

「さあ？」

明日香さんは笑って誤魔化す。

「さあって……。それに、何で今更チェスなんか」

「さあ？」

俺は唇を尖らせる。

「分かりました、今日は帰ります。夕飯おいしかったです、ご馳走様でした」

一礼して玄関へと向かおうとして、明日香さんに呼び止められた。

「秋ちゃん、あんまり瑞穂ちゃんをいじめちゃダメよ?」

「……………それ逆です」

明日香さんの目には俺たちの主従関係が逆に見えるのだろうか。
そう思うと肩を落とさずにはいらなかった。

2日目『天使と悪魔』（後書き）

感想・批評等待ってます。

とても励みになるので、投票もどーぞよろしくお願いします。

3日目『男はつらいよ』

朝、やっとの思いで教室に辿り着くと、いま一つ風采が上がらない男子生徒3人に囲まれた。

「なあ、秋人つてさあ、なあ〜んか綾崎先輩と仲いいよなあ」

「昨日だつて一緒に帰つてたの見た奴いるし」

「ぶつちやけどというカンケーかなあつて」

笑いながら徐々に距離を詰めてくる。見事なチームワーク。

「……………何？」

俺が顔を上げると、3人は明らかに顔を引き攣らせた。それもそのはず、俺は朝方までゲームに勤しみ、目の下に盛大な隈を作り、いかにも不機嫌そうなおんちゃんの如き眼光を放っていたのだから。まあ、俺は明日香さんの言葉が気になつて一睡もできなかったのが本音だが……………。

それにしても、おい、何だその引き様は？軽く傷ついたぞ。

バケモノでも見たような面下げて固まっている3人にむかつて繰り返す。

「で、何？」

「……………なんでもございせん……………」

見事なコンビネーションを発揮し1ミリのぶれもなく同時に一礼すると、そそくさとクラスに溶け込んでいった。本当になんなんだあいつらは。

俺は窓際の自分の席に着くと、大きな欠伸を一つした。

眠い。激しく眠い。

震度6強の地震が教室を襲ったって、校庭に未確認飛行物体が降り立って地球侵略の手始めにこの教室を占拠したって、目の前でスカートがはためいたって、それはどこ吹く風。顔を上げようとも思わない。

・・・いや、さすがにスカートには反応するけど。だってねえ？男の性さがだもん。

ふむ、それにしても、だ。瑞穂の人気はやはり凄い。この学校の男子で瑞穂の名前を知らない奴はいないんじゃないかと思えるほど、男子同士で恋バナになったり猥談をしたりすると必ず一度は瑞穂の名前が挙がる。さっきの3人組も目を輝かせていた。揃いも揃って籠絡されているのを目の当たりにすると、同じ雄であることが悲しくもなってくる。

俺はそんな哀れな奴等に教えてやりたい。女はお前らほど純粹で単純じゃないんだって。つか、すでに何度も教えてやったが、俺の話に耳を傾けてくれる奴などいなかった。それどころか「俺たちの瑞穂姉さまを穢すなあー！」とか言って蹴りいれられた。

重症だな、こりゃ。

「よ」

「・・・・・・・・」

司が声をかけてきたが顔を上げる気はない。

「寝てんのか？」

「・・・・・・・・」

寝ようとしたところをお前に邪魔されました。

「お前宛にラブレター届いてるぞ」

「・・・・・・・・マジ？」

「まさか」

司めー・・・。

司は俺の机に腰掛ける。

「乗んじゃねーよ」

司は不機嫌オーラ丸出しの俺の顔を3秒ほどじっと見つめると、

「情けねえ顔」

「うるせえっ！」

そんなのこっちはとうに気付いてんだよ。それにお前に言われると数倍ム力つくわ。

「隈淒いけど」

「知ってる」

「悩み事があって眠れなかったのか？」

「……」

「図星か」

「っ！うるさいうるさいうるさい」

喚きながら両耳を塞ぐ。

そんな俺を見て司は溜息を吐くと、

「今日ゲーセンでも行くか？」

「何で？」

司は視線を逸らし、何か躊躇う表情をする。

「……別に」

？

やっぱりわからない。こいつの考えてることを察せるようになるには、三ヶ月という月日じゃ短すぎるのか？

「行きたいのは山々だけど、生憎とどっかの我侭野郎のせいでマジで金欠なのよ」

悪いなという意味を込めて苦笑いをする。

「そうか、ならいい」

司は少し残念そうな表情を残し、自分の席に戻っていった。

昼休み。

授業中同じ体勢で寝通していたため、体の節々が痛む。軽く伸びをして骨を鳴らしていると、ズボンのポケットがメールの受信を示すように震えた。

携帯を取り出しメールの受信ボックスを開く。

「・・・・・・・・よし、寝るか」

何事もなかったように携帯をしまうと、机に突っ伏した。

ヴ　、　ヴ　、　ヴ

机に突っ伏したままポケットを探る。

待ち受け画面には「メール受信1件」の文字。

「・・・・・・・・」

何も言わずにポケットにしまう。

暫く逡巡し妙な不安を感じたので、安らかに眠れる場所を探そうと立ち上がったとき、

じふっ

右ストレートが俺の鳩尾みぞおちを抉えぐった。暫く悶え、声にならない声を発する。

「・・・よ、吉田っ！いきなり何しやがるっ！」

「うるさいっ！世の男子の怒りだと思えっ！！」

そう涙声で叫んで教室の入り口を指し示すと、辺りに神風を巻き起こしながら脱兎の如く去っていった。

殴られたことも忘れ、暫し呆然としながら吉田の出て行った入り口を見るときなしいと見ていると、

瑞穂が満面の笑みを浮かべてこちらに手を振っていた。

そういうことですか……。

俺は廊下に出る。

「何だよ、4棟まで来て」

瑞穂は俺の言葉に少しむっとした表情を作った。

「放課後買出しに行くから」

「何で？」

訳がわからず聞き返すと、瑞穂は「そんなことも分らないの」と言うようにため息をつく。それだ、その態度がム力つくんだよ。

「今日金曜日よ」

「あ、そうか、明日香さんいないのか」

毎週金・土・日は、明日香さんが夫の篤史さんの単身赴任先に向かうので料理を作ってくれる人がいなくなる。日曜日の夕方頃には明日香さんも帰ってくるので、その日の夕飯の心配はせずともよい。しかし金・土は自炊するか食べに行くかして乗り切らないといけないのだ。まあ、ほとんど自炊しているのが現状だけど。

「わかった、それじゃ放課後、校門で」

「うん」

瑞穂は「待たせたら承知しないからね」と一言付け足すと、踵を返して足早に去っていった。

3日目『男はつらいよ』（後書き）

どもども黒野晋です。

クロノススムって変な名前ですよね？

・・・・・・自分で付けて後悔しました。

投票よろしくお願いします。

感想・批評等随時受け付けてます。

4日目『湯煙殺人事件』

放課後。

校門に行くと、すでに瑞穂が待っていた。

「遅い」

瑞穂は腕を組み、足を肩幅に開いて俺を睨んでくる。

「はあ？それでも授業終わってすぐに飛び出してきたんだぜ？」

絶対に俺のほうが早いと思ってたのに。こいつ「どこでもドア」
持ってるんじゃないのか？

「……………それって、私を待たせないように？」

「そうだけど…………」

「ふう〜ん…………まあいいわ。行きましよ」

あれ？怒らないの？瑞穂の態度に違和感があるが、怒られなかった
ので結果オーライ？瑞穂も自分の理不尽さに少しでも気付いてき
たのか？

「なあ、」

加減を知らない太陽が照り返す中、俺は隣を歩く瑞穂に呼びかけた。

「何？」

さすがに瑞穂もこの暑さに参っている様で、言葉にいつもの覇気が籠っていない。

「わざわざ買出しするほど食材切らしているのか？」

瑞穂はあごに手を当てて考える素振りを見せる。

「そうね・・・、ないわけじゃないけど、ちゃんとしたものは作れないかな」

「別に簡単なものでも俺はいいんだけど・・・」

「秋人がよくても私は嫌」

「そーかい・・・」

近所のスーパーに立ち寄る。自動ドアが開くと共に中のひんやりとした空気に包まれ、遅れてスーパー特有の匂いが鼻を突く。瑞穂は買い物籠を手にとると、生鮮食品売り場に足を進めた。

「瑞穂、荷物持ちくらい俺がするよ」

そう言って買い物籠を分捕る。

「あら？たまには気が利くのね」

「たまには余計だ」

瑞穂がくすつと笑う。

「で、今日は何作るんだ？」

「そうね・・・暑いから冷やし中華にでもしようかと思ったんだけど。それと、野菜炒めにビシソワーズスープでいいかな？」

「夏らしくていんじゃない？」

聞きなれない単語があつたが、食いもんであることには違いなさそうなのでスルー。正直なところ、俺も冷やし中華が食べたいと思っていた。

「じゃあ決まりね」

瑞穂は嬉しそうに微笑むと、胡瓜を籠の中に放り込んだ。

「瑞穂、これ買つて？」

「ダメ。必要ないでしょ」

瑞穂は俺が差し出したポテチを容赦なく棚に戻した。

「ケチ」

俺は唇を突き出す。

「秋人はいつまで経っても子供のままね」

瑞穂は溜息をつき、やれやれと手を振る。

「ポテチくらいいいだろ」

瑞穂は俺の抗議の声を無視し、すたすたと歩いていく。俺の楽しみを奪いやがって……。夏季限定の新作が出たから食ってみたかったのに。俺はカルビーを恨めしそうに睨むと、やがて諦めて瑞穂を追いかけた。

「おい」

俺が後ろから声をかけると、瑞穂が少しびくっとなって固まる。

「なに？」

「さりげなくプリン入れてんじゃねーよ」

籠の中からプリンを取り出し、目の前で振る。

瑞穂はすばやく俺からプリンを奪取すると、

「う、これはいいの」

「どうして？ 必要ないだろ」

「必要なのっ」

瑞穂をじーっと睨む。

「……………ったく」

けっ、自分だって子供じゃねーか。

理不尽だ。ポテチとプリンの必要性の違いが俺には理解できない。まったく、瑞穂は昔から甘いものに目がないよな。普通にケーキ3個もいつきに食うし、昨日だってパフェ2つも……。うえ、考えただけで吐き気がする。日常的にあれだけ食ってたら普通太るだろ、なんなんだよあのボディライン。

その後、プリンの入った買い物籠はそのまま無事にレジに通されたのだった。

夕食も滞りなく終了し、今は夜の11時。綾崎家のリビングで、画面の中のベテランお笑い芸人を虚ろな目で眺めながらまどろむ。さすがに昨日の夜寝てないだけあって瞼が重く押し掛かってくる。

夢の世界へダイブする5秒前、遠くから瑞穂の声が微かに聞こえてきた。

「秋人、私お風呂入るから」

「……ん」

眠い。今朝の数倍眠い。

あー宿題やらなきゃなー、とか、数学担当の山崎ウザいんだよねー、とか思いながらもこっくりこっくり。

も、ダメ……秋人、逝きます……………。

前のめりになり、そして……

ごっん

おもいつきりテーブルに頭をぶつけた。

「……………痛い」

おでこを抑えて辺りを見回す。

「……どこ？」

眉間にしわを寄せて考えること数分……。

綾崎家で飯を食ったことを思い出した。

「瑞穂？」

返事がない。すでに時計の針は11時を3分程過ぎている。

寝たのかな？

昼間かいた汗がべったりと肌を濡らす。ベタベタして気持ち悪い。自分の身体を見て風呂にも入ってないことを思い出し、頭をかきながら脱衣所へ向かう。

明日香さん曰く、水道代とガス代がもったいないとの事で、時々綾崎家の風呂を借りている。今更自宅の風呂を沸かすのも面倒なので、今日は借りさせてもらうことにしよう。

脱衣所のドアを開けると風呂場の電気が点きっぱなしになっていた。

本当はこのあたりで気付くべきだったのだろう。しかし、今の俺のろくにまわらない頭では、消し忘れ程度にしか発想できなかった。

服を脱ぎ、戸を開けた。

もわつとした湯気が俺を包み込む。

「「あ」」

湯煙の先でお湯に浸かっていた人物と台詞が重なる。

火照った身体。僅かに上気した頬。濡れた髪……。

天国？

ありえない光景に半ば呆然としている俺。

口をパクパクと魚みたいに開閉していた瑞穂がやがて正気に返り、胸を押さえた。

「・・・あ、ああ、秋人の・・・すけべ

っ！！」

若い雄に裸を見られた若い雌の悲痛な叫びが、狭い風呂場に反響した。

怒声が俺の眠気を吹き飛ばし、急いで扉を閉める。

正気に戻った俺の顔を冷や汗が伝う。

このとき、本気で思った。

こゝ、殺される・・・！

4日目『湯煙殺人事件』（後書き）

ともども、黒野です。

自己紹介にも書いてありますが、ワタクシ、シンクロ部に所属しています。

あ、どーでもいいですね。

5日目『仲直り大作戦』

教室。

ぶすうー

司が目を丸くする。

「何だ？朝からいきなり・・・」

ぶすうー

「喧嘩でもしたのか？」

ぶすうー

「・・・・・・・・」

ごすっ

司の肘が俺の脳天を直撃し、遅れて鈍痛が走る。

「いつ、いつてえーな！チクシヨウ！」

頭を押さえ、立ち上がる。

「ガキみたいにいっまでもふて腐れてるお前が悪い」

司は腕を組み、俺を睨め付ける。

だつてだつて！仕方ないだろ、俺のせいじゃないんだから。

司の言うとおり、俺は朝から超がつくほど不機嫌だった。そりゃもう、教室の雰囲気沈むほどに。金曜日に寝ぼけて風呂を覗いてしまったばかりに、俺は邪神の怒りに触れてしまったのだ。これでもかといわんばかりの怒りの鉄槌をくらった拳句の果てに足蹴にされ、それでも俺は必死に弁解した。

誤解だと。

しかし戯言だ、などと軽くあしらわれ蔑む眼差しを向けられた。そんな捨て犬のように可哀相な俺だが、飼ってほしいとこびる眼差しを眼鏡の中年男性に向けるチワワの如く、めげずに心から謝罪した。

だがっ！あいつは一度たりとも俺の善意を受け取ろうとはしなかった。そればかりか、この二日間完全に無視され続け、今に至るというわけだ。

その旨を司に力説すると、

「それは全面的にお前が悪い」

妙に納得された。ムカつくぞコノヤロー。

「どうして？俺は無罪だ。それでも善意で謝り続けたんだぞ？」

司は「わかってないな」とでも言いたげに首を振った。

「事故でも故意的にしても、それはこの際どうでもいい。事実霧宮秋人は風呂場に侵入した。違うか？」

「違うけど……」

「お前は裸見られても平気だろうが、女性はお前とは違う。ほら、よく言うだろ、女心は複雑だって」

「なんだよ、悟り開いたみたいに。じゃあ自分は女心が分かるのかよ」

「分かるかバカ」

即答しやがった。しかも堂々と。

「男には一生かかっても分かり得ない事なんじゃねーのか？」

俺は唇を突き出す。

「へーへーそうですか。わかりたくもないね」

「まったく……じゃあこれからどうすんだよ？」

「なにが？」

「仲直り」

「もういい。別に仲が悪かったって死なねーし」

ぷいっとな顔を背ける。

「そうか・・・ま、いいけどな。お前が綾崎家に行きづらくなって自炊するだけだし」

「うつ・・・」

そういえばそうだ。今までのように夕食にのこのこと顔を出せなくなる。そしたら司の言うとおり自炊する羽目に・・・。週二日穂と自炊するだけでも面倒なのに、それを毎日か。考えるだけでも眩暈めまいがする。それ以前に、行きづらくなる理由が不毛すぎる。「穂の風呂覗きました」なんて明日香さんに言っただけ、もし蔑むような視線を向けられたら・・・。

「ダメだっ！それはマズイ！」

机を思いつき叩いて立ち上がる。

「じゃ、決定だな」

何が？

司にしてはテンション高めで告げる。

「仲直り大作戦、開始だ」

司が不敵な笑みを浮かべた。

気付いたんですけど、俺、ハメられてません？

少々気付くのが遅かった秋人であった。

放課後。

司に言われたとおり、校門で瑞穂が来るのを待ち伏せする。

俺に与えられし任務。それは・・・

『一緒に下校』

・・・ちよつと待て。何で一緒に下校なんだ？つか、詳細聞かないでただ頷いてしまった俺はバカか？そもそも、一緒に帰ってくれるのか？あーいやこれには語弊があるな。この後に及んで、俺がなぜ一緒に帰らねばならないのだ！それに司、一緒に帰ったところで結果が出ないのは目に見えてるだろうっ！司めー、嵌めやがったな。

仲直りせざるを得ない理由はあるんだ。あるが、いま一つ腑に落

ちない。すべて俺の責任か？違うだろ。たった一度のミスで俺がこんなにも悩まされるのは瑞穂のせいだ。そう、瑞穂のせい瑞穂のせい……。

腕を組みながら悶々と悩んで、せわしく行ったり来たりを繰り返している、瑞穂が校門に近づいてくる。

「あ」

これは俺の声。瑞穂と目が合った。しかし、瑞穂はすぐに目を逸らし、何事もなかったかのように校門から出て行く。

「ちょ、ちょっと待てよ！」

思わず呼び止めて後悔する。次になんて話せばいいんだ。「一緒に帰ろう？」……なんて言えるかボケエ！

「何？」

瑞穂が立ち止まり、振り向きざまに言う。

「あ、いや、その、えと……」

しどろもどろになりながら、言葉を模索する。その間も瑞穂は冷やかな眼差しで睨んでくる。

俺は、意を決して言った。

「一緒に帰っても……いい、か？」

瑞穂は口元に手を当て、暫く逡巡しているような表情を見せる。

そして何故か頬をほんのり赤く染めて、

「いい」

「「「まてええええい！！！！」」」

瑞穂が口を開きかけたとき、遠くから爆走してくる人たちの叫び声が重なった。

数秒後、俺はムサい取り巻きに囲まれる。

「な、なんなんだお前ら！？」

俺を取り巻いている男ども三名がにやりと口元を引き上げる。

「なんなんだと聞かれたら、答えてあげるが世の情け」

右の前髪の長い男がポーズを取りながらおっしゃる。どつかで聞いたフリーズだな、おい。

「瑞穂ちゃんの安全を守るため、瑞穂ちゃんの貞操を守るため、愛と真実で悪を貫く」

左のオールバックにした男がポーズを取りながらおっしゃる。

「ラブリーチャーミーな敵役、ムサ（以下略）」

「銀河を掛けるロット……ごほっ、ごほっごほ、ファンクラブには、白い明日が待ってるぜ」

ラストに真ん中のちょいデブ男が決めポーズ。

口を開けて啞然とする俺。対して瑞穂は頭に手を当てて、げんなりとした表情をしている。

うわあゝ、ここから離れてえゝ。

いや、瑞穂ファンクラブの方々だってことは十分すぎるほどわかった。だがイタい。イタいぞこの口　ツト団。「ピカ　ユウ！10まんボルトだ！」なんてノリで言ったら明日から学校来れねえよ。つか、こう思った時点で俺もマニア？

「とにかく！抜け駆けは許さん！！」

「へ？」

俺は四肢を抱えられ、そのまま校舎へ連行されてゆく。

「おいまでよつ、おまつ、どこさわつ……………」

必死に抗いながら辺りを見渡すと、部活をしている生徒や、帰宅する先生方の好奇の視線がビシビシと伝わってきた。

「や、やめつ、マジで…………いやあああああああ」

悲痛な叫びが辺りに響くが当然助けるなどという馬鹿げた行動をとるものはいふ訳もない。

一人取り残された瑞穂は、ただただ呆然と立ち尽くしていた。

ああ、マジで死にたい。

5 日目『仲直り大作戦』（後書き）

今回はもうグダグダです・・・・・・。

感想・批評等お待ちしております。

あ、もちろん投票も。

6日目『天邪鬼』(前書き)

今回は瑞穂視点です。

6日目『天邪鬼』

私は教室に着くや否や、わき目も振らず自分の席に座る。そして机の上で腕を組み、顎を乗せて一人悶々としていた。

「みずほお、何朝からぶすつとしてるのよ。それじゃあ、せつかくの容姿も台無しじゃない」

前の席からそう声を掛けてきたのは倉本有紗。くらもとありさ私と同じ2年6組の生徒で、背が高く、髪はショートカット。元女子バスケット部で、いかにもスポーツマンらしいスレンダーな体躯をしている。なんでも成績が良好ではないらしく、親にバスケットをやめさせられたんだとか。彼女とは1年のときも同じクラスで、私の良き相談相手であり、私の親友。少なくとも私はそう思っている。

「べつつに」

「おんやあ？彼と何かあった？」

うつ、相変わらず鋭い。

「あ、秋人とは何もないわよっ」

「別に私は“秋人”なんて一言も言っていないけど？」

「・・・・・・」

有紗といるとどうしても有紗のペースに乗らされてしまう。いつも誘導尋問に引っかかってばかりだ。

「で、なんかあったんでしょ？隠してないで話さないよ」

にやけながら肘でつついてくる。

「はあゝ・・・」

この3日間を思い出し、溜息が漏れた。

秋人が悪いんだから。

お風呂、覗くなんて。

一瞬何が起きたのか解らなかった。いきなり扉が開いたかと思うと、そこには秋人が立っていて。

しかも裸で。

そう、ハダカで・・・・・・・・。

それにしても・・・・・・・・たくま遅しかった。湯気でぼやけていた秋人を思い出す。全体的に引き締まった体躯、厚い胸板、割れた腹筋。幼少時のそれとは比べ物にならないくらい男らしくなっていた。

そういえば秋人も・・・私の、見たんだよね。どう思ったんだろう。

その後は怒りに任せて制裁を加えたけど、恥ずかしくて土日は顔を合わせることもできなかった。それなのに秋人は私に必要以上に近づくし・・・・。実に心臓に悪い休日だった。

「顔赤いぞ」

頬杖を突いて私を覗き込んでいた有紗が指摘する。

「へ？……ああ、えっと、熱でもあるのかしら？」

「小学生染みたこと言っ
てないで早く話す」

「はい……」

私はしぶしぶ事の顛末^{てんまつ}を話して聞かせた。

「なるほどねえ、それは秋人^{あきと}がちが悪い。でも、可哀相じゃない？
今頃秋人^{あきと}がち泣いてるかもよ」

「そ、そんなことは……だって、しょうがないじゃない」

頬を膨らませる私に有紗は助け舟を出す。

「まあ、瑞穂の気持ちもわからないでもないけど」

「でしょう？」

ここぞとばかりに頷く私を見て、有紗はやれやれといった表情を見せる。

「あのねえ、そんな風にいつまでも天邪鬼でいると、秋人^{あきと}ち他の女子に盗られちゃうよ」

「えっ？」

「結構狙ってる女子いるの知ってた？」

「知ってるも何も、わ、私には関係ないじゃない」

有紗はあからさまにげんなりした表情をする。

「それが“天邪鬼”だって言ってるのよ」

むー。

「睨むな睨むな。瑞穂は秋人っちのこと好きなんですよ？」

「だ、だれが」

「だあめ。瑞穂はなにかと秋人っちのことばっか話すから、嫌でも解るって」

私そんな自覚なかったんだけど・・・。

有紗の表情が真剣みを帯びる。

「で、好きなの？」

有紗の問いに対して迷った揚句、こくりと小さめに頷き、一言。

「好き、かな・・・」

「まったく、もう少し早く話してほしかったな」

「じゅめん・・・」

本当は誰にも言う気はなかった。事実、この気持ちを吐露したのは今日が初めて。それでも有紗には薄々感づかれていたみたいだけども。あと、ママも。果たしてこの二人に隠し事ができるのだろうか。

有紗は、うつむく私に「しょうがないわね」と言うような笑みを向ける。

「とにかく、一刻も早く仲直りすること。いいわね？」

有紗の言い聞かせるような口調に、私は頷くしかなかった。

放課後。

有紗に言われたことを頭の中で何度も反芻しながら昇降口を出る。

仲直り、か・・・。

正直言って難しい。秋人の顔を直視することもままならないのに、会話し仲直りまで漕ぎ着けなくてはならないのだ。必ずしも対面して話す必要はないのだが、電話やメールでは相手に失礼だ。それにこんな精神状態で仲直りなどできるのだろうか。そもその原因はあちらにあるにせよ、一方的に暴力で訴え、その揚句無視し続けたのだ。秋人が快く思っているはずがない。

ふと思う。自分はこんなに純情だったっけ？

今日何度目かわからない溜息をつき、うつむいていた顔を上げる。

秋人が門柱に寄りかかって立っていた。

心臓がドクンと音を立てる。風呂場の映像が脳裏にフラッシュバックされ、顔が火照るのがわかった。

ダメ、これ以上耐えられない。

顔を逸らし、校門を通り過ぎる。

そのまま早足で逃げようとしたとき、

「ちょ、ちょっと待てよ！」

彼に呼び止められた。

思わず立ち止まってしまい、ネジがきれかけたブリキのおもちやのようにぎこちなく振り返る。

「何？」

こちらの心情を悟られまいと、つつい低い声を出してしまった。

「あ、いや、その、えと・・・」

彼の言いよどむ姿を見ながらも、内心でビクビクしていた。

もし心の狭い女だと思われていたら？もしも嫌いだと言われたら？
そう思うと、この先にある言葉を聞きたくなかった。

彼の口が開きかけては閉じる。それが何度か繰り返されたのち、

「一緒に帰っても・・・いい、か？」

えっ？

秋人は今なんて言ったのだろう。「一緒に帰る」確かにそう聞こえた気がする。あれだけ私は秋人に辛くあたってしまったのに、それでも一緒にいてくれるのだろうか。

心の奥から嬉しさがこみ上げてくるのを感じた。

「いい」

「「「まてえええええい！！！」」」

口から紡ぎ出されるはずの言葉は誰かの怒声によって掻き消された。

呆然としている私をよそに、次の瞬間秋人は変な集団に囲まれ、滑稽な子供染みたパフォーマンスが繰り広げられる。そして彼らは怒涛の如く秋人を連れ去っていった。

正気に返り、一人地団太を踏む。

「もっつ」

神様っていじわるだと思う。

6日目『天邪鬼』（後書き）

どうも、黒野晋です。

今回からちよくちよく瑞穂視点で物語を構成していくことに決めました。

それはいいとして、二日後に迫ったテスト。のりきれません。

夏休みの課題、終わりません……。。

7日目『心の準備』

今年の梅雨明けはやけに早かった気がする。今は7月の半ばだといふのに、空に浮かぶのは夏の雲。どんよりとした雲に覆われている空を眺めるのも憂鬱な気分になるが、容赦ない太陽と格闘するのも億劫なのだ。やはり季節の変わり目が一番過ぎやすい。そしてこんな日はクーラーが備え付けてある教室で過ごしたい。

そう思うが、それでも習慣というものは侮れない。馬鹿の一つ覚えのように校舎裏に足を運んでいる自分がいる。

いつしか俺の特等席となった少しだけノツポな広葉樹。その樹に腰掛ける。木陰は涼しくて心地よい。自前の弁当で腹を満たすと、目を閉じた。そして近況を整理し始める。

それは俺の日課。

「こんにちは」

柔らかな女性の声によって、浅い眠りは妨げられた。どうやら考え事をしていうちに眠っていたようだ。次第に焦点が合う。その人は屈んで膝に手を当てて、俺を上から覗き込んでいるようだ。短いスカートから伸びている長い足にどうしても目がいつてしまう。いけないと思い、視線を上げるが、相手の顔には影が落ちていてよく見えない。

横になっていた身体を起こし、相手の顔をまじまじと見た。

うん、誰ですか？

「あ、えーと、たしか……………」

眉間に手を当てて考えるが、答えは喉の奥でつかえてなかなか出てこない。

そんな俺を見かねたのか、その人は腰に手を当てて、

「有紗だよ。有紗先輩」

「…………ああ、瑞穂の友達の！」

パチンと指を鳴らす俺を見て、有紗先輩は肩を落とし溜息を吐く。

「人の名前と顔は覚えておくもんだよ。これ、世界の常識」

「すみません…………」

それにしても、先輩が俺のところに来るって事は、やっぱり瑞穂がらみか？

「あの、俺になんか用ですか？」

「うん。とっても大切な用事」

有紗先輩はそう言うと、俺の隣に腰掛けた。スカートの裾を押さえ、体育座りをする。

「瑞穂のことなんだけど」

やっぱりか。

「最近ね、どことなく元気ないんだよ。普段生活しているぶんにはいつもの瑞穂なんだけど、ふとした瞬間表情が陰るって言うか……。この前なんかぼーっとして電柱に頭ぶつけちゃうしさ」

「はぁ……」

「それで秋人たちは原因知ってるかな」って」

あ、秋人っちって俺のこと？

元気がない、ねえ……。たぶん風呂場の件とか関係しているのかも。ロケット団介入以来俺はすっかり戦意喪失し、ここ何日か瑞穂とはしゃべってない。校舎が別なので学校ですれ違うこともないし、結局綾崎家での夕飯も自粛しているからだ。といっても明日香さんが毎日夕飯を届けてくれるので自炊はしていない。明日香さんには悪いことをしているとつくづく思うが、思うだけで行動に表せないでいるのが現状。仲直りを諦めたわけではないが、ほとぼりが冷めた頃合を見計らってから改めて謝ろうというのが、今の俺の考えである。

とにかくここは知らぬ存ぜぬを突き通すしかあるまい。

「さあ？俺はよくわからないです」

「ほんとかなあ？」

有紗は身を乗り出して俺に疑わしげな視線を投げかけてくる。女性特有の甘い香りに少しドキツとする。先輩顔近い。

「・・・はい」

有紗はわざとらしく大きな溜息を吐くと、再び木に寄りかかった。

「まあいいや。それでね、秋人うちに瑞穂を元気付けてもらいたいのよ」

「俺が、ですか？」

元氣喪失させた張本人に元氣付けられるのは、正直どうかと思うが・・・。

「有紗先輩、俺に拒否権ありますか？」

「有紗でいいよ」

「はい？」

「だからあ・り・さ。呼び捨てでいいよって言ってるの」

なんて事を言うのだ、この人は。

「でも先輩ですし・・・」

「先輩命令。隔たり感じるから親しい人には先輩とか付けてほしくないんだよね。私呼び捨てとか気にしないし」

「先輩が気にしなくても俺が気にします」

なおも有紗は食い下がる。

「瑞穂のことは呼び捨てなのに？」

「瑞穂は特別で」

「ふうくん、“特別”なんだあ？」

結局これを言わせたかったのか。

「幼馴染だからって意味です」

多少むつとする。

「あははは、そんなにむきにならなくてもいいって。呼び捨てにしなくていいからその代わり、拒否権は無しってことで」

ハメられた？

この人、侮^{あなご}れん。うまい具合に相手のペースに飲み込まれる。

「仲直りにもつながるし、悪い話じゃないと思うんだけど？」

有紗先輩は俺が風呂覗いたこと知ってるのか。その辛い事実には肩を落とす。

「で、元気付けるって言っても、俺は何をすればいいかわかりませんよ」

「大丈夫。すごく簡単なことだから」

簡単なことって言っても、先輩と俺とで価値観の違いが激しそうです。

「これまでの生活に戻って」

「・・・と、言いますと、プレゼントをあげるとか遊園地に連れて行くとかして機嫌取りをしろってことですか？」

「違う違う。なんでそうなるかな・・・。つまりね、具体的に言うとか、夕飯を綾崎家にとって」

先輩の存外な提言に暫し呆ける。

「そんな簡単なことでいいんですか？」

綾崎家に赴く勇気のない自分は棚に上げる。

「だから簡単だって言ったじゃん」

信用してないな、と半眼で睨まれた。

「でも、そんなことで元気付けられるんですか？」

有紗は「分かってないな」とでも言いたげに首を振った。あ、なんかこの態度にデジャヴを感じる。はて、誰かさんにも同じことをされたような・・・。

「そんなこと、だからだよ」

？

「秋人つちにはまだわからないか」

先輩が優しい眼差しを残して去った後も、俺は首を傾^{かし}げたままだった。

壁に立てかけてある丸い時計を一瞥すると、ちょうど夜の7時を回ったところだった。

そろそろかな。

読んでいた雑誌を畳んでテーブルの上に置く。

ピンポン

ピンゴ。

ソファから立ち上がり、玄関へと赴いた。

「こんばんは」

戸口を開け、明日香さんを招き入れる。

「こんばんは。秋ちゃんおなかすいたでしょう」

明日香さんが持っていたトレイを差し出すと同時に、食欲をそそる香りが鼻腔をくすぐる。

「はいもうペコペコです。おっ、今日はカレーですか」

明日香さんの作るカレーは特別にうまい。いやもう三ツ星シェフもビックリの味で、一度食べたら病み付きになること間違いないだ。

俺はトレイを受け取りながら、「いつもすみません」と付け足す。

「そう思っただったらうちで食べてほしいわね」

明日香さんがゆるく笑って踵を返そうとしたとき、俺は慌てて引き止めた。

「あいつ、そのことで話があるんですけど・・・」

呼び止められた明日香さんは向き直り、小首を傾げる。

「なにかしら？」

「明日から、また、明日香さんの方に食べに行ってもいいですか？」

俺のおずおずとした要求に明日香さんは笑顔になり、手を叩く。

「ほんとうつ？じゃあ瑞穂との蟠^{わたかま}りも解消したのね？」

直接原因を言っていないのに、明日香さんは俺と瑞穂の状態をなんとなく理解していた。瑞穂が愚痴った可能性もあるが、俺への軽蔑の眼差しがないところを見ると杞憂にすぎなかったらしい。まったく、この人の洞察力には舌を巻くばかりだ。また、全てを黙って受け入れてくれる寛大さにも。俺は一生明日香さんに頭が上がらない気がする。

「あ、いえ、それはまだなんですけど……。でも、解消するためにも一緒にメシ食べようかなって」

苦笑いしながらポリポリと顔を掻く。

「秋ちゃんもやっとなんか分かってきたのかな？」

「まあ、そんなところですよ」

有紗先輩の提案なんだけど、と心の中で小さく付けした。

「今日からじゃダメなの？ 私たちも夕飯まだよ？」

「今日は、ちょっと・・・」

今からじゃ、何を話せばいいのかわからない。

「そう、秋ちゃんにも心の準備が必要なものね」

「まあ、そんなところです」

いたずらに微笑む明日香さんにたははと笑い返す。

明日香さんが食器を取りにくる時間を確認して綾崎家に引き返した後も、俺は暫く玄関に立ち尽くしていた。そして真剣にタイムリミットを指を折って計算し、その期限の短さに愕然とする。

小心者だなあ、俺。

7日目『心の準備』（後書き）

ども、黒野晋です。

課題と小説を天秤にかけ、小説を取ってしまう私は愚か者でしょうか。

少なくとも親にはそう見えるでしょうね。

投票よろしくお願いします。また、評価していただけると励みになります故。

8日目『姫君と騎士』

見上げた空は夏の星座が黒を飾っていた。さして都会でもないこの地域では、夜になると幾億もの星が瞬く。耳を澄ませども聞こえてくるのは虫たちの囁きばかり。辺りに人の気配はないが、近隣の家々の窓から漏れ出す温かな光には、なぜか胸をほっとさせられる。

一陣の夏特有の熱気を含んだ生暖かい風が汗腺を刺激し、ぬるりとした汗が頬を伝う。

俺は今、綾崎家の前にいる。

携帯を開く。液晶画面には6時58分の文字。綾崎家の夕食はだいたいいつも7時頃。いいかげん顔を出さねばなるまい。しかし未だに敷居を跨げない俺がいる。

なんて話せばいい？

さつきからそのことばかり考えている。堂々巡りもいいとこだ。つくづく俺の度胸のなさに嫌気が差す。時が経過したらほとぼりが冷める？馬鹿じゃないのか俺は。余計謝りにくくなっただろうが。こういうのはタイミングが大切なんだ。千載一遇の好機はたぶん、一緒に下校するときだったのだろう。その好機を俺はみすみす逃してしまった。くそう、あの忌々しい口ツト団め……。

しかしいくらお邪魔虫を呪っても現実是不変。俺は大きく深呼吸を一つすると、頬を叩き、喝を入れた。

よしっ！

扉を控えめに開く。

「お邪魔しまーす・・・」

前方に人を確認。

なんとも運が悪いことに、ひよこのパジャマを着た瑞穂がいた。

風呂上りなのか、バスタオルで頭を拭いている。が、俺の姿を確認すると固まり、俺もドアから半分身体を覗かせている状態で氷結する。

二人の間に気まずい雰囲気が立ち込め、嫌な沈黙が続いた。

なにも“風呂上り”じゃなくても・・・。。。

「よ、よう、メシ食いにきた」

俺は気まずい空気を払拭するために、わざといつも通りに接してみる。

「あっそ」

しかし彼女の返事はあっけないもので、すたすたと奥に消えていってしまった。

ンノヤロツ・・・！

落ち着け、落ち着け俺。今日は何しに来た？・・・・・・・・謝りにきた。よし、それでいい。

自分に対して「どうどう」と落ち着かせている、傍目には危ない人に見える俺を、出迎えにきた明日香さんに見られた。

・・・なんと間が悪い。

久しぶりに三人で食卓を囲む。しかし口を開く者はなく、黙々と食物を胃に押しやっている。はつきり言って美味しくない。

別に明日香さんの手料理に文句を付けているわけではないが、このようなピリピリとした空気の中では、舌は味を全く感知しようとなしない。

「テレビでもつけようかしら」

明日香さんが苦笑いを浮かべながらリモコンを手にする。

テレビからは淡々としたニュースキャスターの声が聞こえてきた。

それでは次のニュースです。

手を組んで原稿を読み上げている男性が声のトーンを落とす。

7月×日未明、浦浜市に住んでいる20代の女性が、通りを歩いていたところ、何者かに腹部を刺され、近くの病院に運ばれました。

（浦浜市・・・？）

よく知っている単語を耳にし、テレビに集中する。それは瑞穂も同じだったようで、箸を咥えたまま視線がテレビに釘付けになっている。

幸い、命に別状はなかったようですが、腹部に全治六ヶ月の大怪我を負ったことです。犯人は未だに逃走している模様で、×県警は早急に連続通り魔事件の・・・

変わって、やけに司会者が煩いバラエティ番組が画面に映し出された。

明日香さんがチャンネルをテーブルに置く。

「暗いニュースはよしませう」

「そ、そうですね」

場の空気が更に悪化する危険性を感じ、相槌を打つ。

「連続通り魔事件」は、最近学校でも話題になっている。今回で

3人目。いずれも被害者は若い女性のように、我が校の女子たちも何かと不安なようだ。学校側としても全校集会を緊急に開くなど、対応に追われていて忙しい日々を送っている。それに比べて男子生徒はお気楽なもんだ。

俺は息を大きく吸い込み、言葉と共に吐き出した。

「あのさ瑞穂、何度も言うようだけど」

「ごちそうさま」

瑞穂は俺の言葉を遮り、席を立つ。そのまま2階へと上がっていった。

扉が閉まる音がすると、明日香さんが口を開いた。

「秋ちゃん、怒らないでね？あの子も戸惑ってるのよ」

瑞穂の行動に啞然としている俺に、明日香さんは申し訳なさそうに瑞穂のフォローをする。

「・・・そうですかね？ずっと避けられてるし」

「瑞穂ちゃんは恥ずかしがってるだけ。ホントはもう怒ってないんだから。秋ちゃん、あと一歩だよ」

明日香さんが軽く背中を叩いて促す。

どうやら正念場らしい。

ノックをする。当然の如く返事はない。予想していたことなので、一声かけて瑞穂の部屋に入ると、瑞穂はいつかのようにベッドの上でぬいぐるみを抱えていた。

ベッドの近くまで寄る。

「何で逃げんだよ」

ついつい口調が荒くなっていることに気付く。

「逃げてないし」

そう言つて瑞穂は上目遣いで睨んできた。

「俺には謝る権利もないのか？」

「そんなことは……」

俺は頭を掻き、今まで溜まっていた鬱積を口から吐き出した。

「風呂、覗いちまったことは本当に悪かったって思ってる。でも正直なところ、瑞穂になんでここまで避けられてるか分からない。何度も謝ったじゃんか。そんなに俺に見られたのが嫌だったのか？あんな時に殴っただけじゃ気がすまないってんなら、お前の気が晴れるまで殴っていい。それに俺は、瑞穂に会う度気まずくなるのはもう

「ごめんだ。それはお前もだろ？」

一息つく。

「だから、その……もう許してくれないかな？」

俺がいつきにまくし立てると、瑞穂は終始俯いていた顔を上げる。

「許すから」

その一言に胸を撫で下ろす。

しかしその言葉には続きがあつた。

「私の言うこと一つ聞いて」

おいおいおい、展開がヤバイ方向に流れてるぞ。

それでも俺に残された選択肢は一つしかない。

「わかった。……なんでも聞く」

女子生徒の制服を着て一日登校とか、全裸で校庭を全力疾走しろとか、明日香さんに向かって「ブス」って言えばとか、そんな考えるだけで恐ろしいことを命令されるんじゃないかとビクビクしていると、瑞穂がぼそつと呟いた。

「私を守って」

思わず身構えた俺にかけられた言葉は意外なもので、気が抜けて

しまう。

守る？何から？つーかお前は守られなくても大丈夫のような気が・
……とは口が裂けても言えない。

「通り魔、知ってるでしょ？そいつから私を守って」

「えっと、つまり、俺に何をしろと？」

「登下校、毎日一緒にしなさい」

そう言って明後日の方角を向く瑞穂の顔は、ほんのり赤みが差し
ているように見えた。

「わかった。そんなことでいいならやってやる。明日からでいいよ
な？」

「そうね、明日から。朝、寝坊したら承知しないからね」

「肝に銘じておきます」

恭しくお辞儀をすると、自然と口元がほころんだ。瑞穂もつんけ
んしているように見えるが、口元は明らかに笑っている。

一応は、成功したらしい。ようやく蟠りが取れると、今まで悩ん
でいたのが馬鹿馬鹿しく感じた。

事実、俺一人ではこうもいかなかっただろう。司や有紗先輩や明
日香さんがいたからこそ、やっと仲直りできた。しかし何故、周り
の人は瑞穂の気持ち解るのに、俺には解らないのだろう。瑞穂

と過ごしてきた時間は長いはずなんだけど、どうも瑞穂の心が読めない。最近は何かに何考えてるか理解不能だ。

単に鈍感なのか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

途端に悲しくなったから思索をやめる。

才色兼備で何でもこなす東雲校の姫君。
プリンセス

それでいて、わがままで暴虐無人な俺の天敵。

目の前で犬のぬいぐるみを抱えている、そいつを見て思う。

明日から犯人が捕まるまで、自分が期限付きの騎士^{ナイト}なのだ。

8 日目『姫君と騎士』（後書き）

どーもです。クロノです。

この前この後書きについて感想をいただきました。驚きましたけど、嬉しかったです。

なんだかこの欄、日記と化してきました。ごめんなさい。ウザかったらスルーしてください。

ああ、PCから離れられない自分はなんと愚かしいことか・・・。
父さん、ごめん。

あ、投票よろしく願います。

9日目『予感』

微妙な仲直りから一夜明けた早朝。

俺は朝食を済ませ学校に行く準備をしたのち、綾崎家のインターホンを押した。

「おはよう秋ちゃん」

爽やかな笑顔で顔を出したのは瑞穂ではなく明日香さん。いつもの黄色のエプロンをしている。

「明日香さん、おはようございます。・・・あの、ところで瑞穂は？」

「ふふつ、あの子はもう少しかかるかな？」

口元に手を当てて上品に笑う。

「まさか寝坊してるとか？」

人に寝坊するなとか言っておいて、自分が寝坊するなんてことは・・・ありうるな。今もベッドの上で気持ちよさそうに寝てたら、置いてく。確実に置いてってやる。

「違うのよ。女の子は色々と大変なの」

「はぁ・・・」

いま一つ理解できないので曖昧に言葉を濁す。

ドタツ、ドタドタドタドタ……

「おまたせっ」

瑞穂が息を切らしながら玄関から出てきた。朝から騒がしい奴。

すぐに落ち着きを取り戻した瑞穂を、俺は品定めするように眺める。白を基調とした制服をきっちりと着こなし、どこことなく清楚な振る舞いをする様は、流石プリンセスと言うべきか。

無駄だと思いながらもどこかに欠点がないか探していると、彼女と視線が交錯した。瞬きをして呆けた表情を一瞬見せるが、百面相のようにすぐさま表情を変え、睨んでくる。本当に器用だな、おい。

……でも、安心した。前の瑞穂に戻ってる。

「なんでもいいからいくぞ。電車出ちまう」

「あ、うん。ママ、いつてきます」

「はい、いつてらっしゃい」

手を振って俺たちを見送る明日香さんは、いつにも増してにこやかに見えた。

蝉の求愛コールが朝っぱらから鳴り響く通学路を歩きながら、澄み切った空を見上げ伸びをする。見上げた空には輪郭のくつきりとした入道雲が浮いていた。中にラピュタがありそうでおもしろい。

朝からこんなに清々しい気分なのは久しぶりだ。寝坊するという懸念もあったが、どうやら俺は目的があると頑張れる性質らしい。目覚ましが鳴る2分前に起きた。自分を賞賛したいね、心から。

ちらりと隣を歩く瑞穂を一瞥すると、心なしか浮き足立っているように見える。

「瑞穂、今日何かあるのか？」

「何って？」

「満点取れそうなテストが返されるとか」

「別にないけど？何でそんなこと聞くのよ」

「・・・いや、なんでもない」

「？」

瑞穂が不思議そうな顔をして覗き込んでくるが、俺はこれ以上何も言わず、代わって瑞穂が嬉々として話しかけてきた。

「高校に入ってから、こうやって二人で登校するのは初めてよね？」

「ん？確かにそうだな」

いかにも今初めて気がついたというように答えたが、俺はいつも瑞穂と違う時間に登校するよう心がけていた。でないと俺たちが付き合っていると勘違いされかねない。そんな恐ろしいことは御免だからな。

「これから毎日こうなるのよね？」

「バカ、期間限定だ。……って聞いてねえし」

瑞穂は一人呟いてはにやにやし、こっちの話になど微塵も気にかけてはいなかった。思わず俺は嘆息し、晴れ渡った空を仰ぎ見る。スズメが2羽、じゃれ合うように飛んでいた。

込み合って息苦しい電車を浦浜駅で降り、通勤するサラリーマンに混じって改札口を抜ける。芋洗い状態の駅から無事脱出し、しばらく歩くと、いつの間にか登校する生徒の数も増え、前方に校門が見えてきた。

何事もなく校門を抜け、校舎を目指す。

その間、瑞穂と他愛もない話をしているのだが、

？

何か感じる。こう、羨望というかジェラシーというか……
……あ、殺意？

こつそりと目だけで辺りを見回した。明らかに注目を浴びている。さりげなく覗き見る者や、立ち止まってヒソヒソ話をする女子、文庫本が手から落ちるメガネの坊ちゃん刈り等々。三者三様のアクションを起こす。

その中でも男子生徒の視線が身体中に痛いほど突き刺さり悪寒が走るが、あえて何も気付いてないかのように平然と振舞う。

想定範囲内だ。なんせ我が校のプリンセスと登校しているのだ。怪訝な眼差しを向けられて当然だろう。

（誰だよあいつ。なんで綾崎さんと登校してるんだ）

（知らねーよ。それにしても羨まし、もといム力つくな）

（僕たちの瑞穂ちゃんを・・・）

（コロスコロスコロスコロス・・・）

「どうしたの？ 秋人」

「・・・いや、なんでもない」

明らかな身の危険を感じる。俺のシックスセンスが逃げると叫ぶ。

俺は朝から汗だくになっていた。決して夏の暑さからくるものでないことをここに記そう。

やっと昇降口まで辿り着くと、瑞穂に声をかけた。

「じゃあ、俺こっちだから」

「うん。先に帰らないでよ」

「・・・わかってる」

正直一緒に帰るのはご容赦願いたいけど、そうも言えない立場にあるので、俺は静かに祈った。

犯人が早く捕まりますように。

大またで教室まで闊歩する。注意していないと今にも顔がにやけそうだった。秋人と仲直りできたことが嬉しくて昨日はよく眠れなかったが、そんなのは気にしない。

友人にあいさつしながら席に着き、両腕で頬杖を突く。足は空中でブラブラとだらしなく振られている。

「おはよう瑞穂。それにしても・・・あんな分かりやすすぎ」

振り向いた有紗が呆れた声で言う。

「え、なにが？」

「秋人つちと仲直りできたのね？」

「・・・まあね」

そう答えると、有紗は尚も半眼で恨めしそうに見つめてくる。私、寝癖でも立ってる？

「そんなににやけた顔してると男共に怪しまれるぞ。もうちょい顔引き締めろっ」

有紗が急に私の頬を両手で引っ張った。

「やえへっへは、ほっへがおひひやうほ」

必死に抗議するが、つむいだ言葉はうまく具現化されなかった。

有紗は手を離し、「あははは、瑞穂が元気だから別にいいか」と満面の笑みを浮かべた。

涙目でほっぺを押さえる。

いいなら最初からそう言ってよ。

そう思うが、友人の嬉しそうな顔を見ると、文句を言う気も失せてしまった。

昼休み。

秋人を呼びに1年の校舎へと向かう。もちろん昼食に誘うためだ。これまでも適当な理由をつけては一緒に弁当を食べていたので緊張はない。

1年3組の教室を覗く。上級生が1年の教室に来たために怪訝な視線が集まるが、その中に秋人の視線はなかった。

どこ行っちゃったんだろう。

これまでも捕まえられないことがしばしばあった。そんなとき秋人は何処で何をしているのだろう。それとなく探りを入れてみたが、その度にはぐらかされてきた。少々おもしろくない。

諦めて嘆息し、自分の教室に引き返そうとしたとき誰かに呼び止められた。

「綾崎先輩」

振り向くと、秋人の友達が目の前に立っていた。

「倉本司君よね？」

背が高く凛々しい顔つきをしている彼は女子生徒の注目の的なので、一目で誰かわかった。まあそれだけが理由でもないんだけど。

「ええ。あの、どうしました？」

「秋人に用があつたんだけど、いないみたいだからいいわ」

司君は眉根を寄せる。

「おかしいですね……。秋人は綾崎先輩に伝言を頼まれたつていう先輩に、校舎裏に来るよう言われたはずですけど」

「えっ？私そんなこと頼んでないわよ？」

胸がざわつく。

「嫌な予感がするんで俺は行きますけど、先輩はどうしますか？」

「行くに決まってるじゃない！」

私が返答する前に、司君は動き出していた。私の考えは予想済み
って訳ね。可愛くない。

司君に促され、二人で廊下を駆け出した。

9日目『予感』（後書き）

課題とシンクロと執筆とに追われなかなかのハードスケジュールをこなしている今日この頃。

ども、クロノススムです。

文化祭（シンクロ公演）を来月の頭に控え、練習もいよいよラストスパート。俺も結構多忙なんです。

というわけで、執筆のスピード落としますね。どうかご理解のほど。
・・。

10日目『優しい嘘』

「お前さあ、なんなの？」

「綾崎にいつも纏わり付きやがって。ストーカー？」

「正直目障りなんだわ」

微かに話し声が聞こえてきた。声量がやけに大きく、声には剣呑な響きが込められている。たぶん秋人を呼び出した奴らだ。

ここは4棟の校舎裏。雑木林がありなんとなく寂しい感じのする所で、ベンチなどが置いてあるが、生徒はまず訪れない。私と司君は秋人を呼び出した奴らからちょうど死角になった校舎の陰に息を潜めて立っている。

秋人の身の危険を感じ、咄嗟に陰から飛び出そうとして司君に腕を掴まれた。

「先輩、ダメです」

「どうして？秋人が何かされるかもしれないのよ！」

腕を振り払おうとして更に強く掴まれた。

「今先輩が出て行ったらそれで収まるかもしれません。けど、後で秋人がもっと酷い袋叩きにあうのは目に見えてるでしょう？」

一息ついて、「先輩ならわかるはずですよ」と司君が諭すように言

い、手を離した。

「わかるけど、でも・・・」

司君から目を放し、物陰から覗き見ると、秋人がいかにも品行の悪そうな三人に詰め寄られている。

司君の言いたいことはわかる。けど、秋人が殴られるのをここで黙って見ていられない。

「大丈夫」

司君は視線を秋人に注いだまま呟いた。

「・・・そんなことなんて言えるのよ」

司君が根拠のないことを言うので頭にきて、彼の端整な顔を睨んだ。何が「大丈夫」なのだろう。いくら秋人でも男三人に襲われたらただではすまない。それに病院送りになる可能性も捨てきれないし、もしそんなことになったら司君に責任が取れるのか。

私が軽蔑にも似た眼差しで睨んでいると、ふいに彼が振り向いた。

「・・・こういうこと、初めてだと思えますか？」

目の前にある双方の瞳が、なぜか怒っているように見えた。

「先輩たち、どうしたんですか」

「落ち着きましょう」と、手のひらを見せるようにして胸の位置で両手を挙げる。目の前には、髪を染め上げたりピアスを所構わずつけたりしている、いわゆる不良の上級生が三人、俺を取り囲むようにして立っている。はつきり言って暑苦しい。

「俺らの言ってること、まだわかんねえの？」

妙にどすを効かせた声。

「別に俺、みず・・・綾崎先輩とは何もないですって」

「それじゃあ」と言って早々にそろそろと立ち去ろうとすると、腕を捻り上げられた。

「いててて、先輩離してください。真面目に痛いです」

「どんな弱み握ったんだよ」

顔がほんの数センチの距離にある。息臭えぞコノヤロー。

「だから何度も言ってるじゃないですか」

「うるせえよ。んなこと信じられるか」

短気なのか、声を荒げた。

「・・・・・・・・」

だんだんと苛立ってきた。かれこれ10分余。いいかげん開放してほしい。弁当もまだ食べてないのでハラへって死にそうなのに。このままじゃ午後の授業のりきれねーよ。

空腹だったことも手伝い、つつい口が滑る。

「・・・・・・・・あの、綾崎先輩に気があるのか何なのか知りませんが、自分でアタックする勇気がないからって俺に突っかかってくるの、やめてもらえませんか？」

いよいよ鬱陶しくなつて三人を睨み返すと、

「んだと？生意気な口きいてんじゃねーよ！」

自分の感情が抑えきれなくなつたが殴りかかってきた。

凶星突かれて動揺してんの丸見えだつっの。

鼻で笑つてひらりとかわす。

「先輩、力みすぎ。それに大振りになつていて動きが鈍重ですよ」

俺の安い挑発にカチンときたのか、今度は二人で前後から殴りかかってきた。

拳が繰り出される瞬間、右にステップ。そしてそのまま、前から殴りかかってきた奴の後ろに、左足を軸にして回りこみ、背中をポンツと押してやる。バランスを崩した相手は体重を支えきれなくな

って倒れこみ、俺の後ろから迫ってきていた奴と正面衝突。

同時に、頭がぶつかる子気味よい音がして、不良A、不良Bはもつれ合うようにして地面を転がった。

はい、いつちよ上がり。

「テンメエ・・・」

残っている不良Cが俺の背後から拳を振り上げる。

しかしそれよりも速く、相手の首筋に渾身の力を込めた踵がめり込んでいた。骨がミシツという音を立てる。

「ガハツ・・・」

脚を振りぬくと、最後の一人が地面に叩きつけられた。

俺は手をパンパンと払い、溜息をつく。

「誰かさん」に殺されないように毎日毎日鍛えてるんですよ。出直してください」

あんたらより、キレたときの瑞穂のほうがよくばど危険だ。命が幾つあっても足りない。そういえばこの前なんかは三途の川渡りかけたな。

俺の頭の中にその光景がリフレインすると、凄まじい恐怖に打ち震え、鳥肌が立った。

そんなことより、

「ハラへった・・・」

お腹がピーヒャラとガキの吹く下手なりコーダーのような音を立てると、共鳴するように、無情にも授業開始を知らせるチャイムが遠くから聞こえてきた。

放課後。

日も傾き、世界が茜色に染め上げられる頃、私は校門に姿を現した。

校門の傍に今まで待たせていた秋人が立っている。

「遅い」

彼の声に思わず体が強張る。

「う、ごめん・・・」

「ん？今朝のテンションはどこに行ったんだ？」

私の心境をなんとなく感じ取ったのか、秋人が心配した声音で窺う。

「別になんでもない」

言って俯いた。これじゃあ何かあると言っているのと同じではないか。

「ふうーん……まあいいや。あのさ、ファミレスかどっか寄ってっていいか？ハラへっちゃって」

秋人は何か言いたげだったが深く追求せず、自分のお腹を抱えて、たははと笑う。

たぶんあの後、弁当を食べ損なったのだろう。そして、食べ損なったのは私のせい……。

司君の言葉がよみがえる。

こういうこと、初めてだと思えますか？

司君に言われるまで気づかなかった自分が愚かだ。自分の容姿と人気ついて自覚がなかったわけじゃない。迷惑極まりないファンクラブまで創設されたのだから気付かないほうがおかしい。告白も何度もされた。しかしその度に断っていたので、男子と特別な関係をもったことはない。

だけど、秋人は別だった。秋人が同じ高校に入学してきてからは、なにかと執拗に秋人と生活を共にした。一緒にいたかったのもあるし、秋人が違う女の子と話しているのが嫌だったのもある。

しかしそれらは全て私のエゴだ。私は今まで自分のことしか考え

てなかった。また、それがいけなかった。

「……………今日、お昼食べなかったの？」

こんな台詞を吐く自分が疎ましい。

「んー、まあ、色々あつて食べなかった」

秋人は困ったような表情になり、言葉を濁した。

「色々つて？」

「え？…………えーと、先生に呼び出しくらったりとか」

「……………そう」

やっと搾り出せた言葉はそれだけ。それ以上は胸が詰まって言えなかった。

秋人は嘘をついた。私を傷つけないために。

視界が歪み、慌てて下を向く。乾いたコンクリートに染みができた。

「お、おい、どうしたんだよ」

私がいきなり泣き出したので、秋人が狼狽して私の肩を掴む。

私は、やっぱり……………

「なんでもないから」

涙をぬぐい、秋人を見る。でもすぐに秋人の顔はゆがんでしまう。

秋人にとって、メイワク、なのかな・・・？

「なんでもないわけないだろ」

「ホントよ。このまえ見た映画の結末を思い出したら悲しくなったの」

それでも秋人は納得していない表情で、私の瞳をじっと見つめてくる。

「そ、それよりも、お腹減ってるんでしょ？」

真摯な彼の瞳から逃げるように秋人の背中に回りこんだ。そのまま背中を押すと、しぶしぶながらも歩き出してくれたことに内心ほつとする。

「今日は私がおごってあげようかな」

「・・・・・・・・」

「なによ、その沈黙」

「瑞穂・・・・・・・・やっぱり熱でもあんのか？」

「失礼ね！私だっておごることだってあるわよ」

他愛もない話をしながら夕暮れの道を二人で歩く。

笑顔の奥に不安を隠しながら。明るい言葉で弱い心を包み込みながら。

秋人にとって自分は迷惑なだけだとわかっていても、一緒にいたいと願ってしまう。

いつまでも通り魔が捕まらないでいてほしいと、こんな時間が続けばいいと願ってしまう。

そんな私は欲張りだろうか？

隣を歩く彼の無邪気な笑顔に心がきりりと痛む。

でも。今は、今だけは。

彼の優しい嘘に甘えていいよね？

踵から伸びる二人の影は、いよいよ色濃くなっていた。

10日目『優しい嘘』（後書き）

更新遅くなりました。なかなか充実した日々を送っていたもんで、こちらには手が回りませんでした。

悲しいことに、次は期末テスト（俺の学校2期制なんで）が近づいてます。

現実逃避してえ……。

それはさておき、今回の話微妙に長くなりました。しかもちょいシリアスな展開。正直こんなはずではなかったのですが……。いや、書いた本人が言うことじゃないんですけどね（笑

投票よろしく願いします。評価もどーぞよろしく願いします。

11日目『Let It Be』

朝。流れゆく景色を車窓からぼんやりと眺めながら、つり革につかまる。

空は生憎の曇天。腫れぼったいグレーの雲からは、今にも雨が漏れ出してきそうだ。見慣れた町並みも、どこことなく寂しいような、そんな錯覚に

陥る。今日の降水確率は午前中50%午後40%と、ブラウン管の向こう側で天気お姉さんが無駄に輝く笑顔で言っていた。なんとも言いがたい微妙な数値である。おかげで傘持参だ。傘一つでも荷物が増えるのは鬱陶しい。

それはともかく。電車の程よい揺れがなんとも心地よく、寝起きでスッキリしない頭をさつきから再び夢の世界へといざなおうとしてくる。やめれえゝ・・・・・・・・・・

必死に睡魔に抗いながら、同じくつり革につかまって眠そうにしている瑞穂を横目で見やると、いつもより幾分腑抜けた表情で欠伸を必死に噛み殺していた。その無防備な顔がおもしろくて、ついつい頬が緩む。

昨日、瑞穂はどことなく変だった。登校時はニタニタ顔で気持ち悪いくらいにハイだったが、下校時には泣き顔に変わっていた。本人は映画がどうか言っていたが、それにしても不自然すぎるだろう。もうちょいマシな言い訳はできなかったのだろうか。真意を追求する気はないが、なんとなく引っかけを感じずにはいられない。俺の知らないところで何かあったのかな？

そんなことをろくに回りもしない頭で考えていると、電車がガタンと大きく揺れた。

「うおっ！」

「キャッ！」

短い悲鳴と共に、背中に人が当たる衝撃を感じた。俺はつり革につかまっていたため平気だったが、後ろの人は揺れに耐え切れなかったらしい。ぶつかった拍子に落ちたものが俺の足元に滑り込む。

俺は落ちている文庫本を拾い上げ、後ろに向き直った。

「どうぞ」

文庫本を差し出し、相手が同じ高校の制服を着ていることに少し目を丸くする。

「すみません」

その子は、申し訳なさそうに小声で謝る。身長が小さく俯いていることもあって、相手の顔は確認できない。俺が一声かけて回れ右をしようとしたとき、

「・・・それと、」

ショートにした黒髪をさらっと揺らしながら顔を上げ、その子はいつこりと微笑んだ。

「ありがとうございます」

思わずドキリとする。小柄で小首を傾げる姿が小動物を連想させる、なで肩で華奢な感じのする子で、小顔に大きな瞳がなんとも愛らしい。綺麗というより可愛いといった形容詞がしっくりくる。

そう。瑞穂とは違うタイプの美少女が、目の前に立っていた。

数秒呆けて我に返る。

「あ、ああ、いや・・・どういたしまして」

「東雲高の方なんですネ」

俺の服装からそう推察したらしい。

「そうだけど。君もでしょ？」

「はい。正直、怒鳴られなくてホッしました」

「いや、ぶつかったぐらいでそんなことしないって。っていうか、そんな風に見える？」

彼女は焦りながら両手と首を振る。

「そ、そんな風に見えません。私そういうつもりで言ったわけじゃなくて・・・」

蛇に睨まれた蛙みたいに必死に弁解する姿が愛らしい。

「大丈夫だから。別に怒ってないし」

そう答えたところで電車が止まる。「浦浜、浦浜、お降りの際は足元に」車掌の終着を知らせるアナウンスが車内に流れ、ドアが開いた。

「あの・・・」

アナウンスに耳を傾けていた彼女が口を開く。

「ん？」

「えっと、名前」

ぐいっ

左腕を誰かにつかまれ、ドアへと引きずられる。伸びている腕を辿ると瑞穂だった。

「わわっ、おい瑞穂っ！ひっぱんなっ」

そんな抗議の声など無視して彼女は俺をホームへと連れ出す。その間、出会ったばかりの美少女は呆気にとられて固まっていた。

俺はそのまま人の波に揉まれながら早歩きで改札口まで連れてこられ、有無を言わず通過。一息ついていると、瑞穂は無言でとっと歩き出してしまっていた。

「瑞穂、いきなりなんだよ」

先に公道に出た瑞穂を追いかけて、歩調を合わせて隣に並びながら尋ねる。

「私今日日直だったの。すっかり忘れてた」

結構ギリギリで学校に着く電車に乗っているため、今から急ぎ足で学校に向かっても始業まで15分程度だ。

「おいおい、日直がこんな時間に登校するなよ。そもそもお前はマイペース過ぎだ」

何事かと思ったらただの凡ミスかよと肩を落とし、瑞穂に付き合われる俺の身を哀れむ。

そんな俺を瑞穂は般若の形相で睨み、

「うるさい！私だってミスすることくらいあるわよ」

逆ギレした。

なんだってこんなにトゲトゲしいんだ。ついさっきまであんなに眠そうしてたのに。どこかにスイッチでも付いてるんじゃないか？感情&表情切り替えボタンとかさ。

わざと相手に聞こえるように溜息をつく。

「へいへい……。わかったから怒鳴るな」

うんざりしながらもついていく俺って、従順だなあ・・・。

つくづくそんなことを思ってしまう。

「・・・・・・・・・・」

いやいや、従順なだけで“下僕”じゃないぞ？下僕ではない。
決してない。下僕・・・・・・・・。。

将来瑞穂の専属奴隷にされないことを切に祈りながらも、長い一日は始まるのだった。

そう、長い長い一日が、ね。

11日目『Let It Be』（後書き）

いやあ、あつはつはつはつ、はあ……。俺って勉強しないなあ。

ども、黒野です。

「更新楽しみにしてました」的なコメントもらうと、つつい調子乗って執筆に勤しむ俺は単純ですね。このままだとPC没収されちゃいます。そろそろ親の機嫌とらなくては……。何かいい方法教えてください。

さて、今回はちょっと短めでした。すみません。

また、新キャラ登場しました。前々からこのキャラ出す予定だったので、気に入っていただけると光栄です。

投票とか、評価とか、感想とかいただけると“モノ凄く”嬉しいです。テストなのに続き書きたくなります。

注：無理強いはしてません。はい。

12日目『噛み合わせぬ二人』

秋人と昇降口で別れてから、朝の活気と雑踏で混みあつた校内を一人歩いて教室を目指す。すれ違う生徒に挨拶を返しながらも、その愛想笑いを浮かべたプリンススの表情とは裏腹に、腹の中はどうしようもない怒りで煮えたぎっていた。

秋人のバカ！

ばかばかばか。てゆうか何見とれてるのよ！

先ほどの電車での出来事を思い出して、無性に蹴りたい衝動に駆られる。もちろん秋人をだ。

日直などとはもちろん嘘だ。とりあえずあの場からすぐに立ち去りたかった。だって当然じゃない。電車が揺れても私のことなんて気にも留めてくれなかったし、ぶつかってきた子にデレッデレだったし、二人が話している間私は蚊帳の外だったし……。

朝からテンション下がるわ、ほんと。

肩を落としながら3棟の廊下をとぼとぼ歩いていると、

「おはよっ」

と後ろから親友に奇襲をかけられた。バチンと痛々しい音が廊下に木魂する。私は叩かれた背中をさすって涙目で声の主を睨み、

「有紗！思いつきり叩かないでよ！」

眉を吊り上げて怒鳴ると、彼女は能天気にあははと笑い手を合わせる。

「ごめんごめん……痛かった？」

そう言つて上目遣いで舌を出す確信犯に腹が立つて、また怒鳴る。

「痛いに決まつてるでしょ！ まったく、物事には加減というものがあつてね、有紗はいつもそれができて」

「わかつたつてば。以後、気をつけます」

にへへとおどけて笑いながら敬礼する有紗を見て、私は更に深く肩を落とした。

この子は絶対に学習していない。さっきみたいな挨拶は何度目だかわかつたもんじゃないのだ。今日という今日こそは、その捻じ曲がつた愛情表現を絶対に矯正してやるんだから。

「有紗、あなたホントにわかつた」

「わ、私先生に呼ばれてるんだつた。それじゃっ！」

それだけ言い残すと、有紗は廊下を駆けていった。もとい、脱兎の如く逃げていった。

どいつもこいつも……。

握った拳をわなわなと震わせ、やがて落ち着き深い深い溜息をつ

く。窓の外を仰ぎ見ると、私の心の中をそのまま切り取ったかのようなどんよりとした曇り空から、ぽつぽつと雨が滴り落ちてきていた。

「あ、雨・・・」

ん？　そういえば傘持ってたっけ？　朝出るときは確実に持っていたのを記憶しているが、今手元にあるのは鞆だけ。私はおでこに手を当てて記憶の糸を辿る。駅まで秋人と歩つて、秋人と電車に乗つて、秋人にあの子がぶつかつて、秋人をホームに引つ張り出して・・・あ。

「・・・・・・・・電車の中だ」

手すりに引つ掛けておいたのをすっかり忘れていた。お気に入り
の傘を置き忘れたことに落胆し、本日2度目の溜息をつく。

たぶん今日は厄日だろう。

そう思わずにはいらなかった。

『ありがとうございます』

名前も知らない彼女の言葉を反芻する。あるとき俺に見せてくれた笑顔は、儚げに揺れる一輪花のようだった。なんて詩人じみたことを考えてみたりもする。

今朝出会った美少女は確かこの学校の生徒だと言っていた。ならば近いうちに会えるかもしれない。もしかして彼女の方から俺を探してくれてたり？・・・まさかなあ。ただ文庫本拾って渡しただけの男を探すわけないか。

それにしてもいい子だったなあ。世の男性全てがあの子のことを守ってあげたくなるような、なんとも形容しがたいオーラを放っていた。優しい、おしとやか、清楚。・・・どっかの誰かさんに見習わせたいくらいだ。

「ちゃん、秋ちゃんっ」

。　　つたく、瑞穂の奴、名前尋ねる時間くらいくれてもいいだろ・・・。

「はあゝ・・・・・・・・霧宮っ！！」

「は、はいっ！」

突然俺の名前が呼ばれたので動揺してしまい、ガタツと音を立てて起立する。

「今は授業中、わかってるの？」

男性教師が呆れたように注意する。こいつはいい年したオヤジのくせに女口調のため、生徒中でオカマだと噂されている一歩置きた教師だ。つか、「秋ちゃん」はやめる。キモチ悪い。俺を「秋ちゃん」って呼んでいいのは明日香さんだけだっつーの。

「もうバツチリわかってます！」

「そうお？じゃ、問4の答えは？」

「ああ、えと、問4ですね……………」

慌てて教科書を開き、ページをめくる。問4問4問4……………文字の羅列に視線を這わすが、いかんせん、どのページかもわからないので見つかる気配もない。

嫌な沈黙が教室を包み込む。

「……………」

その長い沈黙の後、俺は息苦しい空気に耐え切れず、おずおずと口を開いた。

「…………あの、」

「なに？」

「問4って、どこですか？」

しばらくして、クラスのおちこちからくすくすと笑う声が聞こえてくる。司に至っては腹抱えて必死に笑いを噛み殺していた。コ、クロス…………。

「秋ちゃんは放課後、職員室にいらつしやい」

呆れ声ででの悪い教え子を諭すように命令する。

「はい……………」

俺は恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら、周りの視線から逃れるように着席するのだった。

やっぱりウソはつくもんじゃないな。これ、教訓。

昼休み。

俺たちは飲み物を買うため、3棟と4棟との間にある自販機へと向かっていった。廊下の窓から屋外に隣接してあるプールを見やる。水面は幾つもの波紋が重なり合って大きく揺れ、風雨の激しさを物語っていた。ほんとに傘持ってきて良かったわ。

視線を窓の外から隣に移すと、司が俺を見ては含み笑いをしていた。

「何だよ」

司を睨みつける。

「いや、別に」

そう言ってまた口の端を上げる仕草が妙にイラっとくる。たぶん

化学の授業のアレを思い出しては、俺を見て嫌がらせのように嘲笑しているのだろう。あー、腹立つ。

「答えられなかったくらいで笑うこたないだろ？」

司を半眼で睨み、口を尖らせる。すると意に反して友人はまた笑い出した。

「くくく、お前、まだ気付いてないのか」

「何が」

俺は答えを催促する。

「“問4”なんてどこにもないぞ」

どこにも、ない・・・？

「・・・・・・は？」

言葉の意味がうまく飲み込めないのですが・・・？

「お前教科書見てなかっただろ？嵌められたんだよ、あいつに。つかお前、まだ気付いてなかったのか」

「バ、バカ、そんなのとづくに気付いてるっつーの。だからムカついてるんだよ」

俺は腕を組みそっぽを向く。そんな俺を見て司が笑っているが、無視することにした。

はあく、どうりでいくら探しても見つからなかったわけだ。つか、俺って嵌められてたのね。相手の思惑通りにしてやられたんだと思うと、なんだかもの凄い敗北感。

「あ、あのさ」

俺はこれ以上墓穴を掘って司に弄られないようにするために、話題を変えることにした。

「んー？」

司もこれ以上いたぶるつもりはないらしく、軽く聞き返す。

「この女子生徒で、思わず守ってあげたくなるような可愛い女の子の名前知らないか？」

司は特に考えようともしせず口を開く。

「お前の幼馴染」

俺は手を振り司の言葉をすぐさま否定する。

「いや、あいつは守ってやりたいと思わない」

瑞穂が可愛い女の子？俺が知りたいのはナイトの助けを待っているお姫様で、荊の城に住んでいる陰険魔女などではない。つか司に聞いた俺がバカだったよ。こいつ色恋沙汰に興味ないこと頭から抜けてた。司は俺の考えを肯定するかのように、

「知らん。興味ない」

「うん。聞いてから思った」

司は俺にそう言われて、少しむっとする。

「・・・つか、何でそんなこと聞くんだよ」

「な、なんとなく・・・」

言葉を濁し、視線を外す。ふと、自販機の前に人だかりができているのが目に留まった。それも男ばかりで、見ているだけで暑苦しい。時々、「今日もお綺麗ですねえ」だとか「お前ら！お触り禁止だぞ」などといった会話が喧騒に混じって聞こえてくる。

まるで天啓のように、それだけで全てを悟った俺は、

「司ストップ」

司のワイシャツの裾を掴み、引き止める。

「なんだよ」

司は怪訝な顔つきで振り向いた。俺は人差し指を立てて上を指す。

「今日お天気お姉さんが言っていた。人ごみに注意しましょう、特に男の群れには警戒しましょう、と。だから俺たちは違う自販機で飲み物を買おうじゃないか」

うんうんと頷きながら親友の肩を叩く。司よ、理解してくれ。あ

の集団の真ん中には絶対魔女がいる。男をかどわかす恐ろしい魔女が。見つかって俺が酷い目にあわされないうちに引き返そうじゃないか。

「面倒だ」

司はそう言っただけで暴風域に向かって歩き出した。俺は慌てて腕を掴み引き止める。

「このアホっ！巻き込まれる俺の身にもなれ！」

司は上を向いて少し考える素振りを見せる。そしてしばらくの後、

「問題ない」

「大ありだっ！！」

叫んだ後で、その声がやけに渡り廊下に響いたことにはっとする。冷や汗を掻きながら前方の集団に目をやると、

魔女と目が合ってしまった。

彼女の顔が獲物を見つけた喜びで嬉しそうに歪んでいる。こ、怖い。きっと次の瞬間には俺の名前を呼ぶに違いない。そうならばたちまち四面楚歌だ。

「っ、司っ、ほらっ引き返すぞ」

そう言って司の首根っこを掴んだ。

「は？ちよ、おい秋人」

俺は司の声には耳を傾けず、嫌がる友人をずるずると引き摺ってこの場を慌てて去った。

喧騒と雨音に混じって、後ろから司の溜息が聞こえたような・・・
・・・まあ、気にしないでおう。

12日目『噛み合わせ二人』（後書き）

や、やっとテストが終わりました……。解答はボロボロ。涙もボロボロ。でもこれでしばらくは小説のほうにも力を入れることができます。

投票よろしくお願いします。評価・感想等もどうぞよろしくお願いします。

「あなたの一票が世界を変える」……。なんて宣伝文句あったなあ。あ、独り言です（笑

13日目『助けてください』

「やべっ、もうこんな時間か」

携帯を開いて時刻を確認すると、すでに5時半を回っていた。サイレントにしていたため携帯を開くまでわからなかったが、待ち受け画面の上部にはメール受信を知らせるアイコンが表示されていた。

受信箱を開くと、瑞穂からのメールだった。しかも5件。俺はその場であつくりとうな垂れる。

今日授業が終了したのが4時なので、かれこれ1時間半の遅刻となる。俺は4時から言いつけ通り職員室へと赴き、こつてりと絞られていた。それも至近距離でネチネチと永遠しゃべるから、堪ったもんじゃない。しかもだ！それだけでは終わらず、書類の整理まで手伝わされた。これはいわゆる職権濫用ではないか。絶対後で抗議してやる。

そんな不満を頭の中で叫び散らしながら、誰もいない教室で鞆に急いで荷物を詰め、帰り支度をする。そして支度が整うと鞆を肩に担ぎ、廊下に飛び出した。

瑞穂、怒ってんだろぅなあ・・・。

本当は逃げ出したい。が、逃げ出したが後の祭り、まだ三途の川の船頭さんにお会いしたくないので、非常に不本意ながらも昇降口へ向かって廊下を駆けてゆくのだった。

下駄箱で靴に履き替え昇降口から出ると、途端にむわつとした外気に包まれ、日本の夏の湿度の高さを改めて実感する。しかも今日は雨。今はだいぶ小降りになったが、おかげで気持ち悪さに拍車がかかっている。

辺りを見回し、軒下に瑞穂を発見。鞆を後ろ手に持ち、つまらなさそうに突っ立っている。

俺は生唾を嚥下し、覚悟を決めて話しかけた。

「み、瑞穂さん？今日遅くなったのには深い深い、そりゃ日本海よりも深い事情がありまして。えと、その、なんと言うか・・・すまんっ」

顔の前で手を合わせる。薄目を開けて上目遣いで覗き見ると、瑞穂がにっこりと笑っていた。それも満天の笑顔で。

「秋人？」

「は、はい！」

思わず背筋を伸ばす。

「私別に怒ってないわよ？遅くなるんだったらメールの一つくらい返してくれてもいいよねとか、1時間半も待たされて足が痛いとか、帰りに何かおごってもらわないと気が済まないとか、そんなことぜんぜん思っていないから」

そう言うてにっこり微笑む。

妙に優しい口調、そしてこの薄気味悪い猫なで声……。

完璧怒ってる。

数週間ぶりに現れた泣く子も黙る裏モードの瑞穂さんは、やっぱり怖かった。この状態の瑞穂久しぶりだなあ、おい……。

「ははははは、死んだかも」

船頭さん、いま会いに逝きます。

乾いた笑いを口から漏らしていると、

「秋人？」

瑞穂が微笑んで小首を傾げる。

「は、はい！」

垂れ下がった肩を引き締め、再び背筋を伸ばす。

「早く帰りましょう？」

「イエッサー大佐！」

瑞穂の威圧に押され、思わず変なことを口走ってしまった。大佐って誰だよ……と、自分で自分にツツコミを入れる。

君たちには解るまい。優しい口調の下に隠れた轟々とした怒気が。

君たちには解るまい。この身の毛も弥立つようなおぞましさだ。

俺は先ほどの発言を繕うようにいそいそと傘を広げる。ん？隣から威圧感が。

「私、傘忘れたの。もちろん入れてくれるよね？」

右隣を見ると、肩が接するほど近くに瑞穂がいた。いわゆる相合傘だ。俺はもちろん断れる訳もなく、

「仰せのままに！」

半泣き状態で快諾する。

「ありがとう」

俺はなるべく隣を見ないようにして歩き出した。

今日の瑞穂怖い。いつもより数割増しで怖い。隣からビシビシと伝わってくるどす黒いオーラを肌で感じながら、自分の将来の危険性を危ぶむ。もしかしたら本当に下僕というおぞましい職に就くかも知れない。

・・・いや、それだけは絶対に阻止せねば！人類の存亡と尊厳、俺の幸福と人並みの生活を賭けてでも！

「あー、ゴホン。み、瑞穂？」

校門を出てしばらく歩いた頃、俺は咳払いをし、隣を歩く彼女に呼びかけた。

「何？」

その彼女は振り向くことなく、前だけを見据えて答える。

「その……き、今日も一段とお美しいようで……。あは、あははは……」

瑞穂は一瞬こちらを睨み、また前を見て口を開く。

「そうね。そのおかげで昼休みは大変だったわ。まったく、ファンクラブなんて鬱陶しいもの誰が作ったのかしら」

「まったくです」

俺はうんうんと頷く。

「どっかの誰かさんにも見捨てられたし、最悪」

うっ、言葉に棘が。

「ま、まったくです……」

「私を守るっていう約束はどこに行ったのかしら。ほんと役立たずよね」

「ま、まったく、です……」

瑞穂を守るのは通り魔からだけじゃないか、なんてことは口が裂けても言えない。

このままだと状況は悪化する一方だと悟った俺は、この不利な戦況を打開するために一手打つことにした。

「で、でも、これだけモテるんだから、男なんて選り取り見取りだろ？その代償だと思えばなんてこと」

瑞穂が急に立ち止まったので、言葉を切る。訝しく思い、俺は声をかけた。

「みず」

「雨、止んだ」

言葉を遮り、瑞穂が唐突に切り出す。

「あ、ああ、そうだな」

空を仰ぎ見ると、雲と雲との隙間から光が漏れ出している。天使の梯子と呼ばれるそれは、なんとも形容し難い美しさを放っていた。

俺は傘を畳む。

「瑞穂、行くぞ？」

俺がずっと立ち止まって動かない彼女を促すと、

「・・・いっぺん死んでみたら？」

怖いことを笑顔で言われた。

「・・・・・・・・・・は？」

なんかしたか俺？

何か瑞穂の癢に障ること言ったのだろうか。しかし、俺は精一杯褒めていたつもりなのだが・・・。

困り果てている俺をよそに、瑞穂は再び歩き出す。

すれ違いざまに、「・・・・・・・・バカ」と小さく聞こえた。

13日目『助けてください』（後書き）

ども、くろのすすむです。

主人公がだんだんと可哀想になってきました。設定上仕方のないことですが・・・。

でも、羨ましくもあります。

14日目『非常事態発生』

浦浜駅から二駅目で下車。勉強に勤しみ疲れきった学生や、上司に散々振り回されたのだろうかと同じく疲れきった表情をしているのに混じって改札口を抜ける。

駅を出ると、軒下でカップルがイチャついていた。見るからに遊びで付き合っているような感じた。俺は軽薄そうな男女に怪訝な、しかしやや羨望の混じった視線を投げかけ、何事もなかったように横を通り過ぎる。

空を仰ぎ見ると、西方が少し茜色に染まっているのが窺い知れるほど、雲も薄く少なくなっていた。

そして、やや前方を憤然たる面持ちで歩く彼女に目を向け、嘆息。

遡ること数十分前。我が身愛おしさに姫君のご機嫌取りを敢行したが、何を間違ったかそれが仇となり、今や取り付く島もない。浦浜駅に着くまで無視。電車に乗っているときも無視。

そして今もなお・・・。

これが溜息をつかずにやってられるかってんだ。だいたいなんで俺がバカ呼ばわりされなくちゃいけないんだ。確かに成績は思わしくないが・・・いや、それは兎も角として、これだけ尽くしてやっているのに謝辞の一つもなしかよ。揚句の果て「いっぺん死んでみたら」なんて言われたら、寛容たるこの俺でさえも堪忍袋の尾が切れる。はいもう、プッチンと子気味好い音を立てて！

そもそも、瑞穂は我が強すぎる。世界が自分中心に回っていると思っているなら、それは大きな勘違いだ。俺にだって所用があるし、やりたいことだってある。決して瑞穂専属の執事などではないのだ。そのくらいお前の頭でも理解できるだろ。

などと、頭の中で瑞穂を非難し、黙って帰路につく。

長い沈黙を保ったままどのくらい歩いただろうか。やがて落葉樹と生垣に囲まれた公園へと差し掛かった。

通学路の途中にあるこの「日向公園」には、小さい頃からずいぶんとお世話になっている。とにかくバカでかいこの公園は、その名前に反して日向は少ない。なぜなら、遊歩道の脇にイチヨウの木が数百と植えられているからである。中心部には噴水があり、そのスケールのデカさを除けば普通の公園だ。遊具も大抵のものはそろっている。普段から学校帰りの子供たちや買い物帰りの世間話を主とする奥様方に親しまれているのだが、今日は雨上がりで遊具が濡れていて、かつ時間が時間なためか、辺りに人の気配はなかった。

ふいに瑞穂が立ち止まる。そして、「こっち」と言うなり日向公園へと足を進めた。

俺は瑞穂の突然の行動を訝いぶかしがりながらも、黙って従うことにした。

瑞穂は屋根付きの休憩スペースにあるベンチに腰を落ち着ける。俺もつられて座ろうとすると、

「座ったら？」

「あ、ああ・・・」

つか、もうすでに座ろうとしてるじゃん。

微妙に不可解な瑞穂の隣に腰を下ろす。

一息ついて瑞穂が話し出すのを待つ・・・・・・・・のだが。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

十秒経過。手持ち無沙汰になり頬をかく。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

三十秒経過。なおも沈黙が続いている。アレか？最初にしゃべった方が負けとかいうゲームか？

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

俺の忍耐力もそろそろ限界に達しようかというその時、

「・・・・・・・・ごめん」

瑞穂の唇が小さく動いた。そして、その唇から紡がれた言葉に内心驚きながらも、しかし表情には出さずその先にある言葉を促す。

「何が？」

「だから、ごめんって言ったの」

「いや、そうじゃなくて。なんで謝ったのかって聞いてるんだよ」

瑞穂は結構いっぱいっぽいらしい。言語理解能力が著しく乏しくなっている。瑞穂は俺の指摘に虚を衝かれた感じで、

「え、あ、うん。えっと、その・・・」

なんとまあ。完璧人間である我が校のプリンス、同時に俺の不倶戴天ぐたいてんの敵である、“あの”瑞穂が動揺を隠せないでいる。

いつもの瑞穂らしからぬ挙動不審ぶりに啞然としつつも、なんとなく瑞穂の言いたい事が解ってきた。たぶん瑞穂は、さっきの俺への悪態を謝りたいんだ。でも俺に対して謝りなれてないから、何の前触れもなしに「ごめん」の一言しか出てこなかったんだろう。

「その・・・」

瑞穂がもしもじと言いよどむ姿を見てくくと笑う。瑞穂が謝っただけでももの凄い進歩だし、今の瑞穂をいじめるのは酷か。

「わかったから」

これ以上言わせまいと口をはさむ。

「えっ？」

「瑞穂が言いたい事わかったから言わなくていい。こっちも悪いんだし、今度から遅くなるときは絶対メールするから。その、だから俺も、ごめん」

少しつつけんどんな口調になってしまったが、照れるのだから仕方がない。隣のやつこさんも「そ、そう、わかればいいのよ」なんて明後日の方向を向いて照れ隠しを口に行っているのだから、同じようなものだろう。

瑞穂もいつもこのぐらい素直なら可愛いのに。

瑞穂を眺め、頬を緩めている自分にはっとして首を振る。何を考えているんだ俺は。どうも今日の俺は少しばかり狂っているらしい。この傍若無人女が可愛いなんて、頭のネジが飛んだのかな。これでは瑞穂のことをどうこう言ってられないじゃないか。

「どうしたの？」

不意に、瑞穂が覗き込んできた。

「えっ？ ああ、いや、別に、なんでも……。あ、そうだ！ 喉渴いてないか？ 確か近くに自販機があったはずだから何か買ってくる。瑞穂は何がいい？」

不覚。めちゃくちゃ動揺してしまった。その動揺を悟られまいとして余計に奇天烈な言動を……。きてれつ

瑞穂は首を傾げながらも言及はせず、

「秋人と同じものでいい」

「そ、そう、じゃあコーラでも・・・」

立ち上がりながら呟き、いざ買いに行こうとしてストップをかけられる。

「炭酸はイヤ」

「え？でもお前同じものでいいって・・・」

「体に悪いじゃない。私にそんなもの飲ませないでよ。秋人も秋人よ。コーラなんて止めなさい」

「わかったわかった。じゃあお茶買ってくる」

適当にあしらい手をひらひらと振り、いざ買いに行こうとしてまともやストップ。

「お茶もイヤ」

「なんでだよ・・・」

「今はそんな気分じゃないの。ミルクティーにして」

我がまま娘を前にして眉間をつまんだ。

「最初からそう言え」

「ったく、瑞穂の奴は俺がミルクティーを絶対に選ぶとも思ってたのかよ」

と、一人ばやきながら自販機からミルクティーが入っている缶を2本取り出す。

踵を返し、我がまま娘の待つベンチへ帰るべく来た道を戻っていると、どこからか女性のものと思しき甲高い声が聞こえてきた。何かと思い、立ち止まり耳を澄ませる。

「……いやっ……ないで………キヤー!!」

「ってこれ悲鳴じゃねーか！」

周囲をさっと見渡した。

いない。

しかしそんなに遠くではなかったはずだ。俺は悲鳴の上がった方へ注意を傾ける。

と、道から外れた林の方に僅かに蠢く人影が見えた。

気付かれないように慎重に近づいていくと、追い詰められた女性と手に包丁を持った男が。

おいおいおいっ！これって例の通り魔！？

男のほうはサングラスやマスクで顔を隠していて誰だか特定できない。

女性ハ．．．．ん？あれってウチの制服じゃねーか。

目を凝らして女子生徒の顔をよく見る。

っ！！

今にも殺されそうなその子は、今朝の電車の中でぶつかってきた美少女だった。

14日目『非常事態発生』（後書き）

常々、もっと早く更新しようと思うのですが、この手が怠けるんです。それに瞼が重くて・・・。

はい、言い訳終了。

今後はもっと頑張ります。

15日目『ヒーロー?』

俺は物陰に隠れて、バクバクと慌ただしく波打つ心臓を押さえつけながら状況把握に努める。

よし、こういう時こそ落ち着け。落ち着け秋人……。

ここから10メートルばかり離れた場所で起きている、極めて悪質な非常事態。

未だ信じ難い光景であるが、通り魔がか弱い女の子を今まさに手につけようとしているのは紛れもない事実。

そしてその女の子とは、今朝出会ったばかりの名も知らぬ美少女。

俺は今現在の状況を整理、冷静な判断を下すべく、脳細胞を総動員させて自分の執るべき最善の行動を模索する。

と、とりあえず警察だ! こういう場合「警察に通報しなさい」と、あれほど口を酸っぱくして小学校の先生が教えていたではないか。そうだよ、警察に通報するんだ。大丈夫、信じる。小学校の先生を……。

しかしその考えをすぐに否定する。

馬鹿か俺は! 通報してから警察が現場に到着するまで何分かかるんだよ。その前にあの子は天に召されちまうだろ。

まったくもって正論である。俺は急ぎ次の手段を模索。

じゃ、じゃあ瑞穂に連絡を。そうだ、あいつなら絶対何とかしてくれるはずだ。少々気に食わないが、ずべこべ言ってる暇は無い。そうだよ、瑞穂に連絡するんだ。大丈夫、信じる。瑞穂を……

「……………」

いや、ダメだ。そもそもこんな近くで電話していたら会話が漏れて気付かれてしまう。それに瑞穂がこの危機的状況を打開してくれるとは思えない。

ここまで考えるのに数秒。しかしその間にもカウントダウンは刻一刻と刻まれているわけで、凶悪な通り魔が脅え腰を抜かして動けない少女にジリジリと近づいている。

俺は頭^{かぶり}を振った。

秋人、冷静になれ。冷静になればわかることじゃないか。今彼女を助けられるのは俺しかない。俺が、俺自身が彼女を助ける他に道はない。

だが、心では分かっている、臆病風に吹かれて手が震える。

臆するな、恐れるな。得物がなんだ。そんなの切られる前に奪^{さいな}つちまえ。ここで黙って見ていて後悔するより、一生罪悪感に苛^{さいな}まれながら生きる人生を選ぶより、今自分にしかできないことをしろ！

目を閉じ、深い深呼吸を二度繰り返す。

よしっ!!

「いやっ……こないでっ……」

少女が恐怖に打ち震え、なす術もなく首を振る。黒服に身を包みサングラスとマスクで顔を覆っている男は、マスクだけを外し、あたかも殺戮^{さつりく}を愉しんでいるかのような笑みを口元に浮かべた。

「ヒッ、ヒヒッ……」

僅かに漏れた笑い声には正気の沙汰とは思えない響きが込められている。

男が得物を逆手に持ち、大きく振りかざす。

少女が目を閉じる。そして鋭利な刃が彼女めがけて振り下ろされる刹那

ヒュッ

「　　っっ!!」

通り魔が小さな悲鳴を上げた後、手を押さえ数歩よろける。

地面にはさつきまで男が手にしていた包丁と、中身が入ったスチール缶。

その缶が飛んできた方向には、

「あつぶねえ〜」

投擲なうてきを終え、手を振り下ろした体勢のまま安堵の溜息をつく秋人。

もしも相手に向かって走って行き止めようとしていたら、完全に間に合わなかっただろう。俺は一か八か持っていたスチール缶を投げた。“相手の顔めがけて”だが……。しかし汗で僅かに手元が狂った。一瞬ヒヤツとしたが、運よく相手の手に当たってくれたようである。

とどのつまり神様が手助けしてくれたのだ。

俺は自分の強運にしばし感嘆し、やがて我に返ると、眉間にしわを寄せ通り魔を睨んだ。

通り魔は身の危険を察知したのか、公園の奥へと逃げだした。

「あつ、待てっ!」

このとき、慌てて追ったのがいけなかったのだろう。足元への注意を怠ったために、足元に転がっている“物”に気付かなかった。

自分の投げたミルクティ - を運悪く踏んづけてしまう。

「えっ・・・？」

クルッと回転し、俺の身体は空中へ。

一瞬の浮遊感。

このままでは尻餅を搗いてしまう。咄嗟の判断で地面に向けて右手を伸ばし、そして・・・

ゴキッ

耳障りな音が辺りに虚しく響いた。

「遅い」

いくらなんでも遅すぎる。飲み物一つにどんだけ時間をかければ気が済むのだ。

秋人が自販機に飲み物を買に行ってからずいぶんと時間が経っている。まさか私を置いて先に帰ってしまったのではなかるうか。

嫌な予感がして携帯を取り出す。

「何やってんのかしら。あのバカ」

秋人に電話をかけると、何度目かの呼び出し音のち「もしもし瑞穂か」と秋人の声が聞こえてきた。

「秋人！いつまで待たせる気よ！」

『悪いっ、ちよつとこつちも色々あつて。お前先に帰ってていいから。それじゃっ プツッ』

「あつ、ちよつと待ちなさいっ………もうつ！」

一方的に電話を切られてしまった。憤^{いきどお}りを禁じ得ず、ベンチを叩く。

「っ！」

案外な痛さに涙目になって手を押さえる。

しばらく悶えた後、私は居ても立っても居られなくなり、秋人を探しに歩き出した。

眩しい夕日に照らされているのは柳眉^{りゅうめい}を逆立て公園内を歩く瑞穂。

「どこいったのよ秋人のやつ……」

不安げに辺りを見回す。先ほどの憤慨はどこかに消え失せ、瞳に浮かぶのは不安ばかり。

せつかくイイ感じだったのに・・・。

私は溜息を吐く。

あれほど苦勞して絞り出した謝罪の言葉だったのに。少しは進展があつてもいいはずなのに。

しかし現実には厳しい。天はいつだって私を見放す。

何気なくイチヨウの林を見遣った時だった。林の中で何かが動いた。

「秋人？」

何と無くそんな気がして、遊歩道から外れ薄暗い芝生の上を歩く。

近づくにつれ、それが確かに秋人であることがわかった。

だが、様子がおかしい。一本の木に向かって何かやっている。

逸る^{はや}気持ちを抑えてゆつくりと近づくと、そこには一人の少女が目を瞑った状態で木に寄りかかっていた。

その少女の肩には秋人の手。

一瞬にして頭に血が上る。両手を震わせ、顔が引き攣る。

「ああきいとお・・・」

「げっ！瑞穂！お前なんでここにいるんだよ!?」

振り向いた秋人の顔が私よりも引き攣っていた。

「心配になって探しに来たんじゃない！それなのに・・・。」
「よつとこつちも色々あって」ってそういうことお・・・。」

私はゆらゆらと秋人に近づく。

「は？違うつ！お前の考えてるようなことじゃない！」

「じゃあその手は何よ！」

私は少女の肩に置かれた秋人の手を指差す。

「え?・・・あつ！ああつ！いや、ち、違うつ！これは・・・、と、とにかく俺の話を聞けつ!!」

動揺し慌てて手を離すところがまた怪しい。

「問答無用っ!!」

逢う魔が時。真の悪魔、ここに降臨。

15日目『ヒーロー?』(後書き)

眠いです……。しかし今は読書の秋!

そして、読み始めると止まらない今日この頃。

まあ、今に始まったことじゃないんですけど。

16日目『母親の愛情』

「ふうん、それで秋人がこの子を助けたと・・・」

「おおっ、やっとわかってくれたか瑞穂よ！」

思わず詠嘆の声を上げる。彼女にこの状況に陥った訳をやっと理解してもらえたようだ。その理解を得るために、実に3度の説明を要したが・・・。

「で？どうするのよ、この子」

俺はその問に対して即答できなかった。

俺の眼前には規則正しい寝息を立てている美少女。たぶん、刺されそうになったときに気絶したのだろう。あれだけの恐怖の中に身を置けばそれも当然かもしれない。ましてや女の子だ。トラウマにならなければいいが・・・。

未だ目覚める兆候が見られない眠り姫から自身に目を移し、溜息をつく。

今日の天気进行を思い出してほしい。つい先ほどまで雨が降り続いていた。当然、辺り一面はぬかるみ、所々水溜りができている箇所も見受けられる。この芝生の上もそれに同じであり、踏みこめばピチャピチャと音を立てるほどだ。

とどのつまり何を言いたいのかというと、

俺と木にもたれかかって眠っている彼女は泥だらけになっているのだ。俺は尻餅を搗いただけなので被害状況は比較的小規模であるが、彼女の場合スカートから制服の上着までたつぷりと湿り気を帯び、白い生地についた汚れも仰々しく自己主張している。これは憶測にすぎないが、仄暗い公園で逃げ惑う中、ちょうど雨のせいで滑りやすくなっている草の上で転んでしまうこともあったのだと思う。それは彼女の制服に付いた緑色の染みからも窺い知れる。

彼女を横目で一瞥し、あごに手を当てて思考を巡らす。

彼女をこのまま置いて帰ることなどできないし、かと言って彼女の家がわかるわけでもないし……。

俺はしばらく逡巡した後、口火を切った。

「瑞穂、この子を綾崎家に連れて行ってもいいか？泥だらけだし、あれだけの怖い経験の後だ。一人にはさせられない。頼む」

「それは、別に構わないけど……」

いまひとつ煮え切らない口調で瑞穂は答える。

「けど？」

瑞穂はこっちをチラッとだけ覗き見てから、

「秋人、ずいぶんとこの子に肩入れするのね？」

どこか不満交じりの声音で、俺の真意を推し量ろうとするように尋ねてきた。

「はあ？お前この状況見てから言えよ。普通の人間だったらほっとけるわけねーだろ。・・・まあ、鬼畜はどうだか知らねーけど」

瑞穂の言いたい事は何と無くわかったが、あえてそれには触れないことにする。

「だっ、誰が鬼畜よっ！私だってほっとけないわよ！」

「そーですか。どうかご無礼お許しを」

恭しく頭を下げると、瑞穂はもの凄い形相で俺をキツと睨み、「ふんっ」と顔を背けた。

おい、ついさっきまでの素直な瑞穂さんはどこに行ったんですか？

この場に来てからずっと不機嫌オーラを放出し続けている瑞穂に向かってそう言った。もちろん心の中で、だが。

辺りにはもう闇が落ち、この鬱蒼うつそうと茂るイチヨウの葉が風に合わせさらさらと揺れる。

瑞穂に付き合っていたらいつまでも無限ループに嵌ったままで、永遠に綾崎家に着けないような気さえしてきた。それに、いくら夏とはいえ濡れた服のままでは風邪をひいてしまう。

「瑞穂、お前の話なら後でいくらでも聞くから、とりあえず帰ろう。もうだいぶ暗くなってきてる。ほら、この子担ぐから手伝って」

「はいはいそうですね。仰せのままにっ」

瑞穂はわざとらしく言うのと、しびしびといった感じで作業に取り掛かった。

「・・・・・・・・」

瑞穂がショートヘアーの美少女を俺に背負わせようとして、ピクリと動きを止める。

「どうした？早く乗せろよ」

「・・・・・・・・」

反応なし。再度呼びかける。

「おい、みず」

「少しでもヘンなところ触ったら、ブツ叩くからね？」

そう言うてにつこり微笑む。笑顔の下で見え隠れする殺気。それが彼女の口から紡がれた言葉に剣呑な響きを与えていた。

「お、おう・・・」

気迫に押されながらも答えると、ほどなくして背中に重みを感じる。同時に、やわらかい感触が制服越しに背中に伝わってきた。

うわぁ、やわらけ・・・

煩惱に支配されかけた俺に追い討ちをかけるように、女性特有の甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「痛っ
」

そんな不謹慎な俺に天誅が下ったのか、彼女の身体を支えようと
して力を入れたとき右手に鋭い痛みが走った。背中
の甘い感覚はい
つきに熱を下げる。

「どうしたの？」

異変に感づいた瑞穂が、俺の顔色を伺うようにして尋ねてきた。

「なんでもない・・・」

やっべ、家までもつか・・・

俺は顔を背け、できるだけ平常を装う。唇を噛み締めて情けない
自分に喝を入れると、少女を背負い直して歩き出した。

綾崎家の玄関では明日香さんが出迎えてくれた。

「お帰りなさい。ずいぶん遅かったのね。・・・あら？そちらの
子は？」

俺の背負っている少女に気付くと、明日香さんは少し驚いたような表情をした。

「あ、話すと長くなるんで、とりあえずその前にこの子の服を取り替えてもらいたいんですけど。彼女、泥だらけなんです」

「わかったわ。じゃあこっちの部屋に運んでもらえる？」

明日香さんは嫌な顔一つせず、快く了承してくれた。さすが娘とは違う。

少女の着替えは瑞穂に一任し、俺はリビングで明日香さんにこれまでの経緯を説明することにした。俺のズボンも汚れていたので、篤史さんのジーンズを貸してもらっている。

「・・・・・・・・と、いうわけなんですよ」

瑞穂とのいざごさは抜かして一通り説明し終わると、何故だかドツと疲れが押し掛かってきた。それなりに緊張しっぱなしだったから、我が家とも呼べる綾崎家に無事帰還して無意識に安心したのかもしれない。

「そう……。でも本当に無事でよかったわ。秋ちゃん大活躍じゃない。さすが私の子ね」

終始真剣に話を聞いていた明日香さんが、重苦しい空気を払拭するかのようにおどけてみせる。

「あははは、俺はいつから明日香さんの子供になったんですか？」

「うふふ、冗談よ。それより、秋ちゃんケガはない？」

「あ、ああ、大丈夫です。犯人とも接触してないし・・・」

そう言つて、さりげなく右手を後ろに回す。

しかし明日香さんの千里眼とも言つべき観察力からは逃れられなかった。

「秋ちゃん、お手」

笑顔の奥に般若の形相を隠した明日香さんがそう言つて手を差し出す。

「うつ・・・」

俺は瑞穂顔負けの恐ろしさに戦々恐々として、しかたなく隠した右手を明日香さんのそれに重ねた。

「凄く腫れてるじゃない！どうして何も言わなかったの！」

俺の手を見るなり、明日香さんは声を荒げた。

「別に大したことじゃないかな、って思つて・・・」

たははと笑う俺をひと睨みして、明日香さんが真剣な表情で俺の右手を調べる。

「いつ　　！！」

明日香さんが手首に触れたとき、ビクンと身体が震えた。存外な痛さに顔が歪む。よく見ると、俺の右手は先ほどよりも腫れ上がっているようだ。血液の流動に合わせてジンジンと痛む。

「今日はもう病院閉まっているだろうから、明日学校休んで病院に行きましょう。・・・まったく、秋ちゃんも変なところで我慢強いんだから。男の子だからって無理しちゃダメよ？痛いときは痛いつて言うこと。いいわね？」

明日香さんはわが子を慈しむように優しく微笑むと、救急箱を取りにリビングを離れた。

俺はそんな明日香さんの背中に久しぶりに母親の愛情を感じて、ふっと微笑んだ。

16日目『母親の愛情』（後書き）

一日がもの凄く長くなってしまいました。
やっと次回で明日になる予定です。

17日目『ヒナドリ』

「・・・ん」

身じろぎをし、少女が薄っすらと目を開く。

「気がついた？」

私は、眩しそうに目を細めながらも焦点の合わない目でこちらを見つめる少女に呼びかけた。

ようやくお姫様のお目覚めか・・・。

数十分前。意識のない人間を着替えさせるという意外に過酷な至上命題を仰せつかった私は、四苦八苦しながらも彼女を泥だらけの制服から解放し、私のワンピースに着替えさせることに成功した。その後暫くの間、彼女が横たわっているベッドに腰掛け一息つきながら、不運な、しかしちよつと羨ましくもある少女の寝顔をぼんやりと眺めていたのだ。

「あの、ここは・・・？」

身体を起こした少女は辺りをキョロキョロと見回し、戸惑い気味に尋ねてきた。

私はそんな彼女の不安を和らげるように優しく微笑みかける。

「私の家よ。あなたを助けた秋人が、ここまであなたを運んだの」

「あきと・・・?」

いま一つ状況が飲み込めないというように、困惑の表情を浮かべる少女。

「別に怪しいところじゃないから心配しないで。ちなみにその服は私のね。あなたの服泥だらけだったから、勝手に取り替えさせてもらったわよ」

「すみません・・・」

彼女は自分の身を包んでいる白のワンピースを見て、申し訳なさそうな表情をする。

「いいのいいの、気にしないで。それより、名前を覚えてくれない?」

「は、はい。片瀬^{かたせひな}緋那です」

そう言ってぺこりとお辞儀した。

「そう、緋那ちゃんね。よろしく。私は」

「あ、綾崎先輩、ですよね?」

控えめに彼女が口をはさんだ。

「あら、知ってたの?」

「はい。先輩は有名人ですから・・・」

はにかむ少女に私は苦笑いしか返すことができない。

有名人、ねえ……。

なんとも複雑な心境だ。意図してそうなったわけではないし、はや嘸し立てられるのはどうも好きになれない。それに、全く知らない人が私のことを知っているというのも少し嫌な感じがする。芸能人もこういう心境になったりするのだろうか。

何と無く返す言葉が見つからずあやふやな笑みを浮かべていると、控えめにドアがノックされた。

コンコン

「瑞穂、俺だ。開けてもいいか」

くぐもった小さな声がドア越しに聞こえてきた。

「どうぞ」

私が了承の言葉を口にすると、静かに扉が開き、秋人が足音を忍ばせて部屋に入ってきた。

「あっ……」

緋那ちゃんが秋人の姿を確認すると、小さく声を漏らし、大きい目を更に大きくさせる。

「なんだ、起きてたのか」

声量を抑えていた秋人の声音が普段の大きさに戻る。

「ついさっきね」

「そう。じゃあちょうどよかった。明日香さんが夕飯の支度出来るから呼んできてっ。えっと・・・あー、君。夕飯食べてくでしよ？」

「ふふっ、君って何？片瀬緋那ちゃんよ」

秋人がまだ彼女の名前を知らないことを思い出し、私は自分もついさっき知ったばかりの彼女の名前を教えてあげた。秋人が「君」って二人称使うのは全く似合ってたし。

「え？ああ、片瀬さんね。霧宮秋人です。よろしく」

緋那ちゃんに笑いかけ自己紹介する秋人。

そんな秋人を見て、緋那ちゃんは慌ててベッドから降りて秋人に向かい合った。

「片瀬緋那です。こちらこそよろしくお願いします」

そして私にしたときと同じように律儀にもお辞儀をする。

む・・・。

ぎこちない二人を傍観していると、まるでお見合いみたいだ、と思う。秋人の笑顔が無性に癪に障るのはなぜだろう。

半眼でじとーつとした視線を二人に投げかけている私を他所に、二人の会話は続く。

「えっと、私・・・き、霧宮くんに助けてもらったんですね？・・・あの、ごめんなさい。助けてもらったのによく覚えて無くて・・・」。霧宮くんが私を助けてくれたって綾崎先輩に教えてもらいました」

本当に申し訳なさそうに顔を俯かせる。

「いや、気にしないで。それより、怪我は？」

「あ、私はほんとなんともないです。・・・霧宮くんこそ、その包帯・・・」

緋那ちゃんが指摘して私は秋人が怪我をしていることに初めて気がついた。秋人の右手には包帯が巻かれている。しっかりと巻いてあるところを見ると、ママにしてもらったのだとわかった。

秋人の怪我に気付いてやれなかった自分に嫌悪する。さきほど誤解して秋人をドツいたことも思い出し、更に落胆。

なんで私はこういつも・・・。

気付かれないように溜息をついた。

秋人は罰の悪そうな苦笑いを浮かべて手をぷらぷらと振る。

「これは、その、別に通り魔がどうかじゃなくて、単にドジった

というか、なんというか……。とにかく、大したことじゃないから気にしないで。まあ、大事をとって明日は病院に行ってみるけど」

秋人は緋那ちゃんを励ますように明るく笑った。

「ほんとにすみません……」

それでも緋那ちゃんはまるで自分が元凶とでも言うように謝る。

「片瀬さんが謝ることじゃないから、マジで。悪いのは片瀬さんを襲った男だし。それに」

そこまで言って一拍置き、

「片瀬さんが無事ならそれでいいって」

そう言ってから秋人は恥ずかしそうに頬を掻く。

「あ、はい……」

それが伝染したのか、向かい合っている緋那ちゃんの頬もほんのり朱に染まる。

そして二人押し黙った。

ん？何なのよ、この空気。

甘酸っぱい空気が部屋に充満している……。気がする。

なによ、秋人のやつ。私にそんな優しい言葉かけてくれないくせ

に。

さっきよりも秋人のはにかんだ笑顔が心の奥をささくれ立たせた。

そもそも二人は私のことなど忘れているのではないだろうか。そんな錯覚に陥り、倉皇として言葉を紡いだ。

「秋人、ゴハンは？」

「ん・・・？あ、ああ、そうだった」

私には秋人の様子がいつもと違うように思えて、胸の中が微かにざわつくのを感じた。

「でも、送ってもらうなんてやっぱり悪いです」

「何言ってるの。危ない目にあっただけなのに。それに、途中でまだ道わかんないだろ？」

優しい月明かりに照らされた仄かに明るい夜道を、俺たちは肩を並べて歩く。

生暖かい夏の夜風に乗って、虫たちの心地よい羽音が聴こえてくる。ここは住宅街のため車の通りも少なく、虫たちの囁きの他には俺たち二人の足音が聞こえるだけで、辺りはひっそりと静まり返っ

ていた。

昼間は“閑静な”という表現もしっくりくるが、夜間はただ不気味なだけである。こんな夜道を女の子一人で歩かせるのはやはり忍びない。

ということで、

夕食を済ませた後はさすがに時間帯も遅くなったため、片瀬を俺が送ることになったのだ。

「霧宮くんって、あの綾崎先輩と幼馴染だったんですね」

「言つとくけど、全然これっぽっちもいいことなんてないぞ？片瀬さんが抱いている綾崎瑞穂先輩像は虚像だ。その実体はもつと凶悪で残忍な」

「そんなことないんじゃないですか？」

「むー……。どうして？」

片瀬は少し考えるようにして夜空を見上げる。

「うーん、どうしてでしょう？・・・でも、優しい人だと思います。ほら、この服だって貸してくれたし」

「うーん……」

優しい人、ねえ……。服貸したぐらいでか？

肯定できない。思い出されるのは辛かったあの日々と、口では言えないような拷問の数々。そして悪魔のような冷笑……というのはいささか針小棒大に語り過ぎだが、俺に対して優しくしたことなど一度もないのだから、頷けるわけがない。

俺は瑞穂に対する自他の見解の違いについて考え、押し黙る。

俺に合わせるように片瀬も口を噤み、そしてそのまま二人とも黙って歩き続けた。

しばらく歩いてふと思う。

「あれ？そっぴや片瀬さんの家ってどこ？」

眼前には、数時間前に肝が潰れるほどの思いをした日向公園が迫ってきている。そもそも片瀬がこの公園に訳もなく来るはずがないそれに、夕食のときに帰り道だと言っていたから、片瀬宅はここからそう遠くないはずだ。

「もうすぐです」

片瀬はあやふやに答えて、夜の公園に何の躊躇もなく足を踏み入れる。

片瀬って、意外と度胸あるんだな。

妙に感心してしまう。しかし、襲われたばかりの公園に簡単に足を踏み入れることなどできるのだろうか。いや、普通無理だろ。

もしかしてこの公園に住んでたりして。だから怖くないとか？
思わず片瀬が公園のベンチで寝起きしている姿を想像してしまっ
た。

はっとなつて頭を左右に振り、その妄想を掻き消す。

俺の阿呆……。普通に考えてありえねーつつの。片瀬、す
まん……。

俺の少し前を歩く片瀬の後姿にむかつて手を合わせた。

ふむ、それにしても……。

結構おかしい話だと思う。近所に住居を構えているのなら、俺は
片瀬のことを何らかしら知っているはずだ。小学校の学区だって一
緒だったろうし。けれども、俺は今朝電車でぶつかるとまで彼女の存
在を知らなかった。

最近引越してきたのか？それなら辻褄が合う。

俺はゆつたりとしたペースで歩く片瀬に疑問を投じてみた。

「片瀬さんは最近引越してきたのか？」

彼女は振り向き、

「え？私は一度も引越したことはありませんよ？」

どうしてそんなことを尋ねられるのか分からないという風に首を

傾げる。

「あ、そうなんだ・・・」

ますます謎だ。

俺が一人思案に耽っていると、いつの間にか公園の反対側まで来ていた。そのまま片瀬に付いて歩道を歩く。

中学に入ってからというもの、日向公園の反対側の地域を訪れる機会はめっきり減ってしまった。まあ、これと言って用も無かつたしな。それでも、幼少の頃はここの辺にある友達の家によく遊びに行ったものだ。だからこの地区もよく知っているはずなんだが・・・。

やっぱり、単に今まで出会わなかっただけなのか？

数年前に見た景色と何ら変わらない今の夜景を見て、そんな結論に辿り着いた。

時々、俺たちの横を車が追い抜き遠ざかる。それと同時に、ライトに照らし出されてできた二つの影も、伸びては消え、そんなことを繰り返していた。

俺は懐かしくなって辺りを見回す。古びた文具店、看板、垣根、その向こう側にある民家……。見える範囲でも郷愁を覚えるものばかりだ。

本当に変わってねえよなあ……。あ、もしかしてアレもまだあるのかな？

昔よく、悪友2、3人と一緒に忍び込んで遊んでいた秘密基地を思い浮かべる。とっておきの場所で、かなり気に入っていた。

あれはマジでスリルあつて楽しかったなあ。あ、そういや一回だけ見つかったこともあったっけ。ちえつ、俺一人だけ置いて皆そそくさと逃げやがって。ショックだったんだぞコノヤロー。

その場面を思い出し、思わず笑みが零れた。今となつてはいい思い出だ。まあ、実際悪いことばかりじゃなかったしな。

俺が一人でくつくつと笑っていると、片瀬が歩くスピードを落とし俺の隣に並んだ。

「あの、今日は本当にありがとうございました。おかげで命拾いました」

片瀬が何の脈絡もなしにいきなりそう切り出し、微笑む。

「あ、うん。どういたしまして。ほんと大事に至らなくてよかった」

「そう・・・ですね」

一瞬だが、片瀬が思案顔になった。

「どうかした？」

「いえ、なんでもないです」

そう言つて笑う片瀬は、少し様子がおかしいように思えた。自分

が襲われている場面を思い出したのだろうか？トラウマになっていないか少し心配だ。

隣を歩いていた片瀬がある門の前で立ち止まる。

「あの、私の家ここなので・・・」

「へー、片瀬さん家って結構近い、んだ・・・・・・・・な」

前景を見て、思わず目が点になる。信じられず瞬きを数回繰り返した。

「どうかしました？」

片瀬が開いた口が塞がらないでいる俺を覗き込んできた。しかし俺の視線は目の前の景觀に釘付けで、片瀬を視界に入れる余裕などなかった。

ゴクリと音を立てて生唾を嚥下する。

家、そう、家・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・って、マジ!？」

今日一日で一番驚いた瞬間だった。

どうやら今日は眠れそうにないな・・・。

17日目『ヒナドリ』（後書き）

更新遅くなつてすみません・・・。

諸事情によりPCが使えず、更新できませんでした。

“諸事情”については、えー、ご想像にお任せします。はい。

また、テストが近いので更新が今までよりも遅れがちになるやもしれません。学生の身分ゆえ、ご了承ください。

多くの評価・感想等いつもありがとうございます。

18日目『余計な気遣い』

「どう？驚いた？」

「別に」

頬杖を付いたまま、司はまるで興味がないとでも言うかのようにそう応える。友人の素っ気無い返事なんだかおもしろくなく、俺はふんつ、とそつぽを向いた。

出会い、動揺、非常事態、そして驚愕と、色々ありすぎて凄まじく疲れた一日から二日経過した今日。騒がしい教室の一角にある司の席の脇で、俺は司に大まかにその日の出来事を話していた。

俺は司の驚き^{おのの}く様が拝めることを期待していたが……。なんだよ司め、少しは反応しろよ。あまりにも淡泊な司の態度に少々苛立つ。

鼻を鳴らし、司を見下ろした。司の表情は相変わらず読めない。

「で？お前の怪我は？」

「んー・・・アハッ、アハハハハ」

「誤魔化すな。キモい」

テンメエ・・・

握った拳を下ろし、溜息を一つつく。

「レントゲン撮ったけど、ヒビは入ってなかった。しかしな、結構“酷い”捻挫だって言ってたぞ？」

それを聞いて司は押し黙った。ん？ちょっとは心配になったのか？

俺がニヤニヤしていると、

「・・・“ただの”捻挫かよ」

「う、うるせえー!!」

司は「大仰だ」とでも言いたげに露骨な表情をする。腹立つなマジで。もしかして、さっきの間はわざとか!?

「医者は一週間もあれば治るだろうって」

「ふーん・・・」

「けっ、お前はほんとに人をムカつかせることに長けてるよな」

俺は司をひと睨みした後、自分の右手に恨めしい視線を送り、肩を落とした。

副木によって固定された人差し指には包帯が何十にも巻かれており、それは異様な太さになっている。それにしても、人差し指は勘弁してほしい。右手の人差し指が使えない状況は生活にかなり支障をきたすだろう。もうこれには溜息しか出ない。

俺がこれからどうやって日常を過ごすか思案していると、司が急

に手を差し出してきた。

「何この手。飴玉ならぬぞ？ゴメンねえ坊や」

「いらん。チツ・・・人がせつかくノートお前の分も取ってやろうかと・・・・・・・・」

司はブツブツ呟いて、手を引っ込める。俺はすかさずその手にしがみ付き、

「スイマセンしたお釈迦様！！不肖霧宮秋人、ありがたく恩恵を授かる次第であります」

「離せっ！テメエでとれ！」

「いやーだー」

俺はそう言いながら司によよ泣きつく真似をする。

司は俺の押しに観念したのか、それとも餓鬼っぽい俺がウザくなつたのか知らないが、

「わかったから早くノート持って来い」

そう言つて俺を手で追い払つた。

ふふん。なんだかんだ言つてあいつ友達思いなんだよな。

かわゆい司の優しさに機嫌を良くした俺は、嬉々としてノートを取りに戻つた。

昼休み。

パンとコーヒー牛乳の入ったコンビニ袋を片手に、今日も今日とて校舎裏へと向かうべく教室を出る。

「あ、霧宮君っ」

呼ばれて振り返ると、廊下の先に見知れる人物を発見。その少女はショート黒髪を揺らしながらこちらに小走りで向かって来た。

「や、片瀬さん。1日ぶり」

こっちが微笑むと、片瀬もあどけない笑顔を返してくる。

うん、元気そうだなにより。

片瀬の笑顔を見てほつとする。実は、あの事件がきっかけで不登校になっていやいなかと朝から心配だったりした。まあでも、今の笑顔を見ている限りそれもどうやら杞憂に過ぎないようだ。

「こんにちは。えっと、先日はすみませんでした」

「片瀬さんが謝ることじゃないって言ったよね？」

「そうですけど、でもやっぱり……」

片瀬としてはどうしても納得がいかないようだ。だけど、それは筋違いも甚だしいだろう。これでは俺のほうに納得いかない。

「謝るより、ありがとって言うてくれたほうが、俺は嬉しいんだけど？」

「すみませ……じゃなくて、えっと、そうですね。ありがとございました」

「ま、二日前にお礼言われたから、わざわざ言ってもらうこともなかったんだけどね」

ふふんと嘲笑うかのように振舞うと、片瀬は少し唇を尖らせた。

「そうやってからかう人、嫌いです」

「悪い悪い」

右手を上げて謝ると、片瀬の視線が包帯の巻かれた指に注がれた。

「……あの、お怪我のほうは？」

そう言って上目遣いで覗き込んでくる。

「ん、かるゝい捻挫だって。やっぱりそんな大した怪我じゃなかったよ。全然痛くないし、医者も今日明日中には治るって言ってたから、片瀬さんは気にすることないぞ？」

俺が言い終わらないうちに、片瀬は俺との距離を縮めて来る。

そして徐に俺の手をとり、小さい二つの手で包み込んだ。
おもむろ

え、ちょ、なに？

いきなりの大胆な行動に心拍数が上昇する。包まれた右手は熱を帯び、しっとりと汗ばんできた。

俺は訳が分からず、片瀬の顔と包まれた右手とを視線が行ったり来たり。片瀬は何も言わずに、じっと俺の指に視線を送っている。

「あゝ、片瀬さ　ん　っっ！！」

ぎゅううう

「いだだだだだだ」

人差し指を握られた。俺は咄嗟に右手を引つ込め、涙目で片瀬を睨む。

「何すんだよっ」

「そうやってウソつく人、嫌いです」

片瀬はふんつとそっぽを向いた。

「・・・は？」

「やっぱり痛いんですね？綾崎先輩のお母さんに電話したので、治

るには一週間くらいかかることも知っています。腫れが治まらないことも。そもそも添え木がしてある時点で酷い捻挫だってわかります。私が原因のようなもののに……。それなのにどうして、霧宮君は本当のことを言ってくれないんですか！」

片瀬は一気にまくし立てたあと、俺の答えを待つようにじっと睨んだまま。

俺は一瞬にして嘘がばれたのと片瀬が怪我の詳細を知っていることに驚き、暫し呆然と立ち尽くす。

焦点の合わない瞳を片瀬の瞳から放せないまま考える。

片瀬はなんでこんなに詳しく知ってるんだ？

あー、明日香さんに聞いたんだっけ。

片瀬はなんでこんなに怒ってるんだ？

知らん。

そもそもなんでいきなりこんなことに……。

解る奴がいたら俺に教えてくれ……。

しっかり間を取って、押し悩んだ末に出た答えは、

「あ、あー、えーと……………ここ廊下。とりあえず、落ち着こう」

片瀬に注意を促すものだった。実に情けない。

「あう……」

片瀬は自分たちが注目を浴びていることに気付くと、案の定、顔を真っ赤にして俯いた。

「つ、ついてきてください。ここだと、人が……」

片瀬はぼそぼそと呟くと廊下を歩き出た。

「片瀬さん、今の話……」

「な、なんでもないですっ！」

俺は背後で安堵の溜息を漏らした。

薄暗い階段を上ると、小さな踊り場に出た。目の前にある鉄の扉の小窓から差し込む光が眩しい。

「なあ、ここって屋上に通じる扉だろ？」

「はい、そうですけど？」

「ここ、鍵閉まってるよ」

瑞穂に邪魔されずに安息できる憩いの場所を求めて、俺も試しにここへ来た。しかしあの時は鍵がかかっていて開かなかったはずだ。たぶん今も鍵がかかったままだ。じゃあ片瀬は何でこんな所に・・・？

「ふふっ」

片瀬はいたずらっ子のような笑みを浮かべて、なにやらガチャガチャと・・・

ガチャ・・・・・・・・・・キー

「行きましょうか」

片瀬に促され、屋上に出る。

開け放たれたドアの先にはコンクリートのタイルと、それと対照的で突き抜けるような青天。鬱陶しい夏の日差しさえもが清々しく感じる。

テニスコート5面分は優に取れるであろうこの場所は、四方を3メートル位のフェンスで囲まれているので、安全でもあるようだ。

「うっわあ、すげえ・・・」

思わず感嘆の声を漏らす。

やはり「屋上」にはなんとも言い難い魅力を感じる。初めてこの場所に立ったのなら感慨も一入^{ひとしお}だ。

片瀬が数歩前に躍り出て、くるっと振り返った。

「さあ、ネタばらしの始まりです」

18日目『余計な気遣い』（後書き）

更新遅くなって申し訳ありません。

テストも終わっていざ書き始めるぞって意気込んだら、逆に書けなくなっていましたorz

といいますか、片瀬緋那のキャラ設定が曖昧なままで……。はい、完璧自爆です。

なかなか甘い展開に持ち込めません……。。

19日目『巧妙の罠』

ジ

斜め上からこちらを見つめて放さない真っ黒なレンズを負けじと見つめ返す。

防犯カメラ・・・

これぐらいの豪邸であれば備え付けてあるのは至極当然のことだし、監視されるといいのはいい感じがしないのも至極当然。現代の日本では、至る所に監視カメラが設置してあるが、これではプライバシーも自由もあつたもんじゃない。まあ、カメラはガミガミ文句を言つてこないし、ましてや命令などしてこないの、誰かさんより数倍マシなのだが・・・。

どちら様でしょうか

ふいに、近くから女性らしき抑揚の感じられない声が聞こえてきた。俺は真っ黒なレンズとの睨めっこを止め、そちらに顔を向ける。

堀に設置されたインターホンを通して聞こえてきた声のようだ。

俺はそれに近づき、「片瀬緋那さんの友達の霧宮ですが」とインターホンに向かって応える。

少々お待ちください

やはり抑揚のない声が返ってきた。

俺は額から伝う汗を肩で拭った。容赦なく照りつける太陽が鬱陶しい。

今日は休日。普段の俺なら今頃ベッドの中で惰眠を貪っているのだが、今日は片瀬に呼び出されてしまったので、こうして再び片瀬邸へと赴いているのである。

くいくいと、Ｔシャツの袖が引つ張られる。

「ねえ、まさかドツキリじゃないわよね？」

瑞穂が目の前の浮世離れた光景に啞然としつつも、驚愕と不安の入り混じった声音でおずおずと尋ねてくる。

「ドツキリでも夢でもないぞ？」

俺が含み笑いをしながらそう答えた瞬間、鉄柵でできた門がゆっくりと開き始めた。ギイッと軋む門は陽光に照らされ黒光りしている。いかにも頑丈そうだ。

「ほら、行くぞ」

「う、うん・・・」

俺はどことなく緊張した面持ちの瑞穂を促し、遙か遠くに見える洋館に向かって歩を進めた。

玄関では私服姿の片瀬と、執事服を身に纏った初老の男性が出迎えてくれていた。

「こんにちは。綾崎先輩に霧宮くん」

「や、片瀬さん」

片手を上げて挨拶すると、片瀬はにっこりと微笑んだ。

へえ、やっぱりお嬢様なんだな。

膝まである白のシフォンワンピースの上に、淡いピンクのカーデイガンを羽織っている。そんな片瀬の私服姿はどことなく気品が感じられる。この豪邸とも呼べる洋館を前にしても違和感がない。

それに比べてＴシャツにジーパンと完全に場違いな格好の自分・・。もう少し余所行きの服装にすればよかった。

「緋那ちゃん久しぶり。元気してた？」

「はい、最近はすごく元気です。あ、紹介しますね。こちらは執事の狩谷さん」

紹介された男性が深々と頭を下げる。

「狩谷と申します。本日はわざわざご足労いただきありがとうございます。お暑いでしょうから、どうぞ中へ」

狩谷という絵に描いたような執事は、俺たちを邸の中へと促した。

こいつが、ねえ……。

白髪に白髭、顔に刻み込まれた皺は柔和な表情を形作っている。

背筋は常に正しており、端正な身のこなしであるのだが……。

どう見てもジイさんだ。

片瀬の言っていたことが本当なら、この老人はいったい何者なのだろう。

俺はオールバックにして整えられた白髪を凝視しながら、邸へと足を踏み入れた。

「うわぁ、すごい……」

瑞穂が感嘆したように辺りを見渡す。

俺たちの正面にはヨーロッパの宮殿を彷彿させる大理石でできた階段。壁には著名な画家のものとされる絵画や、いかにも高級感が漂う壺、磨き抜かれた銀色の甲冑などが洋館に溶け込むように存在している。俺たちの足元は思わず寝そべりたくなるような絨毯で覆われていた。

「確かにこれはすごい・・・」

外観も威風堂々たる風貌をしているが、内装もやはり引けをとらないほどに情趣がある。

「ふふつ、二人とも口が開いたままですよ」

片瀬が口元に手を当てて微笑んだ。そんな些細な仕草もお嬢様っぽい。一度意識してしまうと、なんでも気品に溢れて見えるのだから不思議だ。

思わず瑞穂と顔を見合わせた。たぶん瑞穂も同じことを思っているだろう。

すごい娘と知り合ってしまったと。

コンコン

扉がノックされる。

「どうぞ」

「失礼します」

片瀬が応えると執事の狩谷さんがティーセットを持って部屋に入ってきた。

俺たちは1階の応接室に通されたのだが、どうも落ち着かない。瑞穂も隣で所在無げにそわそわしている。

片瀬は俺たちと机を挟んで対面にあるソファに腰掛けている。しかし、片瀬も片瀬で先ほどとは違い、どこか浮かない顔をしているのが見て取れる。

紅茶が狩谷さんを含めた4人全員に行渡ると、片瀬が口火を切った。

「あの、霧宮くんにはこの前話したんですけど・・・」

片瀬が少し言いよどむ。

「・・・・・・・・私を襲ったのは、連続通り魔事件の犯人ではないんです・・・・・・・・」

「・・・・え？・・・・ええっと、話が見えないんだけど」

瑞穂が当惑した表情を浮かべる。当然だ。俺だって最初は耳を疑った。

俺は腕を組んでそのまま静観する。

「私を襲ったのは、その、狩谷さんだったんです・・・」

片瀬はそう言って自分の斜め後ろに屹立する狩谷さんを見上げる。

執事はご主人様からのSOSと受け取ったのか、片瀬に代わって話し始めた。

「ここからは私からご説明いたします。先日、緋那お嬢様を襲ったのは私目にてございます。しかし、本当に襲おうと思っていたわけでは断じてございません」

「じゃあどうして緋那ちゃんにわざわざ怖い思いをさせたんですか」

瑞穂が堪え切れずというふうに関口走る。狩谷さんは瑞穂を落ち着かせるように目じりを下げて微笑んだ。

「私は日ごろから、緋那お嬢様お一人で登下校なさるのが心苦しゅうございました。緋那お嬢様は生まれつきお身体が弱く、入退院を繰り返しておいででしたので」

片瀬が自分の太ももの上に置かれた手をぎゅっと握る。

「だからってそんなの」

「瑞穂、最後まで話を聞こう」

立ち上がりそうになった瑞穂をソファへ落ち着ける。

今まで片瀬の存在に気付かなかったのは、深窓の令嬢って理由だけじゃなかったんだな。

屋上で片瀬に説明してもらったときは、身体が弱いなんて一言も

しやべらなかつた。たぶん片瀬のことだ、氣を使わせると思ったの
だろう。

狩谷さんは続けた。

「緋那お嬢様は中学まで一年の大半を病院とこのお屋敷とで過ごす
生活をお送りでした。しかし、去年の冬にお医者様からの許可も下
りて、今春から普通の高校生として学校に通えることになったので
す。高校は予てからの決定で、御当主様の経営なされる東雲高校に入
学なされました。そちらのほうが一に備えて素早く対処できると、
御当主様はお考えになられました。また、あの高校は緋那お嬢様の
ために開校されたものですから」

ほう、うちの校長は片瀬のじいさんだったのか。どうりで片瀬が
屋上の鍵を持っているわけだ。

それにしても狩谷さんの話には逐一驚かされる。常識的に考えて
まずありえないようなことばかりだ。少女一人のために高校一つ建
てるなんて馬鹿げたこと、並大抵の金持ちじゃできないだろうに。
瑞穂もこれには驚いたのか、目を見開いている。

「当然、登下校の送迎をさせていただくはずだったのですが、緋那
お嬢様は頑なにこれを断りまして」

「だって私、普通的女子高生のように過ごしたかったんだもの・・・」

片瀬がぼつりと呟く。

「はい。緋那お嬢様のお気持ちは痛いほどよくわかります。しかし、

緋那お嬢様を襲っていたのがもし本物の通り魔だったなら、殺されていたのかもしれませんが。もしそうなら、旦那様や奥様、たくさんの方が悲しまれます」

狩谷さんは片瀬に微笑む。

「私は、そのことを緋那お嬢様に身をもって知ってほしかったのでございます」

自分の主人としてではなく、自分の孫の身の上を心から案じるよ
うな、そんな慈しみが込められた瞳がそこにあった。

片瀬は狩谷さんの瞳を何秒か見つめた後、ふいと顔を逸らした。

「爺はずるい……。そんなふうに言われたら私、私のわがまま通
せなくなる……。…」

「ほほほ、爺はずるいのでございますよ、緋那お嬢様」

ご主人様を襲うなんてどんな気違いジジイかと思っていたが、ど
うやらそうでもないらしいな。ちゃんと片瀬のこと大切に思ってる
のが伝わってくる。

まあ、だからと言ってトラウマ級の迫真の演技をする爺さんの行
動全てが解^げせるわけではないが……。通り魔事件に便乗するなん
て、なかなかズル賢いことしやる。

俺が一人で狩谷さんの忠誠ぶりと策士ぶりに感心していると、そ
の策士によって、事態は思わぬ方向に転がりだした。

「しかし、爺とて緋那お嬢様には普通の高校生としてお過ごしただきたい」

狩谷さんが一拍置き、俺を見る。

「そこで一つ、私目から霧宮様にお願いがございます」

嫌な予感がする。

片瀬は頭の上にクエスチョンマークを浮かべながらも、少し期待の籠った眼差しで狩谷さんを見つめた。瑞穂は明らかに怪訝な眼差しを狩谷さんに向けて、彼が何を言い出すのかじっと持っている。

「な、なんですか・・・？」

俺は恐る恐る尋ねる。さっきまで仏のように見えた彼の微笑が、今は怖い。

狩谷さんの唇がゆっくりと動いた。

「霧宮様、緋那お嬢様とご一緒に登下校なさっていただけませんか？」

ほうら、俺の感は当たるんだ。

19日目『巧妙の罖』（後書き）

本格的に勉強がマズくなってきましたorz
最近、瑞穂活躍しませんね。

狩谷さんは何と無く好きですw

20日目『姫君と騎士の解約』

頭を抱えたい気持ちを抑えて狩谷さんの目を直視する。

「あの、聞き間違いかもしれませんがもう一度お願いします」

「はい、霧宮様。緋那お嬢様と登下校なさっていただけませんか、と申しました」

ふむ。実質、狩谷さんは俺に片瀬のボディガードをしろと言っているのか。瑞穂からも頼まれたばかりなのに、なんでこうも面倒なことが次々と・・・。

ふと、本当に何と無く隣が気になった。そつと瑞穂を覗き見る。

思わず寒気がした。

微笑んではいるが、時々口元がピクピクと痙攣している。何故か分からないがたぶんキレル寸前じゃないのか、これ。なんとしてでも断らなければ。

「狩谷さん、質問してもいいですか？」

俺はにこやかに微笑む執事に向かって尋ねる。

「どうぞ。それと、私のことは狩谷で結構です」

頭の中だけで呼び捨てにさせてもらうことにして、ずっと気になっていたことを尋ねた。

「なぜ俺なんでしょう?」

「先日の一件で霧宮様は緋那お嬢様をお助けになりました。私の鬼気迫る演技にも動じることなく、です。私の演技は中々に迫力があつたと自負していました故、少々驚きました」

ほほほと何だか嬉しそうに笑う。

「また、霧宮様は緋那お嬢様のご友人であられますし、果敢な行動力も然ることながら頭も切れる。これほどの適任者は他には存じ上げません」

狩谷は俺のことなど調査済みなのだろう。

「ははは、過大評価すぎですよ。俺は・・・正直言って自分で助けるという判断を下すまで、凄く悩みました。そんな男に大事なご主人様を任せてもいいんですか?それに、俺の方が通り魔なんかより先に片瀬さんをおそ　　っ!」

瑞穂が無言で脇腹を抓ってきた。

「・・・うことはないと思いますが・・・。。片瀬さんのボディーガードを兼ねて頼まれているのであれば、万が一の事態に俺には守りきる自信はありません」

抓られてジンジンと痛むところをさり気なくさすりながら、精一杯の反論を試みる。

白髪 of 執事は一層笑みを深めた。

「霧宮様、あなたはその時緋那お嬢様を見捨てる、という選択肢はお浮かびになられましたか？」

「いや、それは・・・浮かばなかったですけど・・・」

そんなの当然だろ。目の前で弱い少女が襲われているを目撃しとして逃げるなんて、腰抜けのすることだ。

「最初から“お助けになる”という前提でお悩みでしたのなら、私には何も問題が見当たりません」

「・・・・・・・・」

まずい。この老人は初めから「了承」以外の言葉を俺に言わせない気だ。さつき片瀬が病気がちであることを俺たちに告白したのも、もし俺が断れば片瀬の自由が少なからず失われるであろうことを仄めかしたのも、俺が断れない状況を作るためだったのか。

「片瀬さんはどうなんだ？」

話を片瀬に振る。

「私は、その・・・霧宮君の迷惑になるだろうし・・・・・・・・」

片瀬は口ごもり、俯いてもじもじと指を絡めている。

「えっと、あの、やっぱり・・・・・・・・迷惑、ですか？」

ああ、お願いだからそんな目で見つめないでくれ。

俺だっで一緒に登下校するのが嫌なわけじゃない。もちろん迷惑なんかじゃない。できることなら力になりたい。

ただ、ここで断っていないと後悔するような気がするのだ。

右手の人差し指がズキリと痛んだ。

しばらく目をして思い悩んだ後、

「全然迷惑じゃないよ。わかった。俺なんかでいいなら、謹んで片瀬さんのお供をさせてもらう」

言い終わって、隣から息を呑む音が聞こえた気がした。

俺の目には、片瀬の嬉しそうな笑顔と狩谷の憎たらしい微笑が対照的に映って見えたのだった。

あの談議の後、片瀬の計らいで俺たちは昼食を頂き、洋館を見学し、さらには夕食までご馳走になった。わざわざ俺たちを呼びつけたのもお礼と俺の指の怪我のお詫びを兼ねてもてなしたいがためだったらしい。所々で本物のメイドさんを目視したときは少し感動してしまった。片瀬も終始楽しそうであつたし、瑞穂も普段と変わらない様子だった。

そう、「だった」のだ。

「なあ、瑞穂」

いつかの日のように、満天の星空の下、虫の演奏をBGMに二人で歩く。あの日俺の前を歩いていたのは片瀬だったが。

「何」

1メートル前を歩く瑞穂がこちらに振り向かずに応える。表情は読み取れないが、雰囲気では瑞穂が不機嫌なのが分かる。だてに長年苦労しているわけではない。

「お前やっぱり怒ってるだろ」

「怒ってない」

「怒ってる」

「怒ってない」

イライラしていることが言葉に乗って伝わってくる。

「なんで怒ってるんだ？」

「怒ってないって言うてるでしょ！ー」

静かな夜道にその怒声は嫌なほど響いた。突然の剣幕に少し気圧される。

一陣の生暖かい風が頬を掠めた。

「……………すまん」

「なんで謝るのよ」

「片瀬さんとも登下校することになった」

「そんなの知ってるわよ」

「瑞穂との約束もあつたけど、断れなくて。週明けからは三人で登校することになるんだよな」

急に瑞穂が立ち止まり、こちらに振り返る。

俺の物言いはやはりふてぶてしかったのだろうか？もう少し言葉を選ぶべきだったな。

「そのことだけど、私もういいから。明日からは二人で仲良く登校して」

“仲良く”にアクセントが置かれたことに嫌味を感じる。

「は？何言ってるんだよ。瑞穂も一緒なんだろう？さっきだってそういうふうに話が進んだんじゃないのか？」

「秋人だけよ。私は関係ない」

「もしかして、お前片瀬さん嫌いなのか？」

「・・・違うわよ。緋那ちゃんが嫌いなわけではないじゃない。秋人も私がいけないほうがいいでしょ」

いないほうが良いに決まっているが、これでは俺が片瀬を狙っていて瑞穂を邪険にしていると、そう聞こえる。こちらにそんなつもりはないのだから、いい加減癢に障った。

言い返そうと口を開く。が、「それに」という言葉で出鼻を挫かれた。

「秋人といると、疲れるの」

「なんだよそれ・・・」

瑞穂の声も小さかったが俺もしゃがれた老婆のような声しか出なかった。

疲れる？それはこっちの台詞だ。お前といえるだけで俺がどんだけ神経すり減らしていると思ってるんだよ。

こともなげに侮辱してくる瑞穂にキレそうになるのを必死に抑える。ここでキレてしまうと後々面倒なことこの上ない。明日香さんの手料理がしばらく味わえなくなるのはさげたいからな。それに、よくよく考えてみると瑞穂の言っていることはこちらにとって願ってもないことではないか。それを棒に振るほど、俺も落ちぶれていない。

俺は老獺ろつかいな政治家のようにたつぷりと間を置いてから確認を取った。

「じゃあ、明日からは朝迎えに行かないし、放課後も待たない。俺は片瀬さんと登校して彼女と帰る。それでいいんだな？」

相手に決定権を譲渡しているように見えて、実際にはYesとか相手は答えられない。そもそもNoと返ってくるはずもないが、あえて言わせることで自分は決定に従っただけの立場になる。これは弁解の際に有利だ。どこかの執事ではないが、俺も相当に狡猾らしい。

瑞穂はそれを聞いて苦虫を噛み潰したような顔をするが、すぐにきつと睨み返してきて、「ええ」とだけ答えた。両手は白くなるほどに固く握られている。

相当頭にきているようだが、こっちにだって意地がある。下手に出る気は毛頭ない。

ハブとマングースのように数秒睨み合った後、瑞穂はさつと身を^{ひるがえ}返し、足早に歩き去ってしまった。

俺はどうも帰る気にはなれず、その場に立ち尽くした。傍^{はた}から見れば彼女に振られて茫然自失としている憐れな男のようであったが、なぜか動く気にはなれなかった。

瑞穂の背中が完全に見えなくなって考える。

自分は何か間違ったことをしたのだろうか。何が彼女の気に障ったのだろうか。

自問を繰り返すが、答えは決まって闇の中だった。

何かあるとすぐにこうだ。あいつは普通に過ぐす俺に喧嘩を吹っかけてくる。喧嘩を買う俺も子供だが、彼女は俺にとって不倶戴天ふぐたいてんの敵も同じなのだ。決して共存できない敵同士。ハブとマンガースのようにいがみ合い、牙を向ける。不毛なことで笑われるかもしれないが、それでも俺にもちっけなプライドがある。俺が悪くもないのに謝るなんて不条理すぎるじゃないか。

「ああああーっ！クソッ！！」

乱暴に頭を掻き毟る。それでも、別れ際に一瞬だけ見えた瑞穂の哀しげな瞳の色が、頭にこびり付いて離れなかった。

翌日。

ここ数年、誰にも見送られることのなくなった玄関で靴に足を通す。いつてきますと一人呟き、ドアノブを握った。

朝のまだひんやりとした空気をめい一杯肺に押し込む。ちょっとばかり二酸化炭素の量が増えたそれをいつきに吐き出し、空を見上げた。梅雨明けの夏の晴天が広がっていたが、それが俺の心をますます陰鬱にさせた。スカイブルーとは似ても似つかないブルーな気持ち
持ちが充満する。

玄関の鍵を閉めて歩き出す。と、学校とは反対方向に自然と向きかけた足を慌てて踏みとどめた。つま先が向いた先は綾崎家の玄関。

朝、綾崎家のインターホンを押す。そんなことここ最近になって、しかも片手で数えられる程度でしかないのに、知らず知らずのうちに習慣づいていたのか。そのことに内心驚く。

瑞穂の部屋の窓を見上げると、カーテンがかけられていて、残念ながら中の様子を窺うことは叶わなかった。たぶんまだ夢の中なのだろう。

ケータイを開き、今から向うことを片瀬にメールで告げる。

「行くか」

誰に言うでもなく、ただ独り言をポツリと呟くと、踵を返して待ち合わせ場所の日向公園に急いだ。

20日目『姫君と騎士の解約』（後書き）

本つつつ当に遅れてすみませんでした。約一月ぶりの更新です。はつきり言って行き詰っていました、はい。プロットは当然白紙。そもそもこの「陽だまり」自体、勢いだけで書いていた作品なんです！・・・最悪ですね。

勢いを失った今、グダグダ長引かせるか佳境に入るか、それが問題です。

また、申し訳なくて頭が上げられないのですが、2月中の更新はできないかもしれません。

最後に、いつもいつも読んでくださってありがとうございます。今後とも感想頂けると嬉しいです。

21日目『憂鬱と弁当』

鬱だ。

自分の腕の中に顔を埋める。しかし、まぶた瞼を閉じても頭の中でリフレインされる映像は消えることはなかった。

秋人といると、疲れるの

何故あんなことを言ってしまったのだろう。

心とは裏腹に口をついて出た言葉は酷いものだった。高鳴る心音を抑え付けるのに必死だし、服装や髪形に気をつけるもの一苦労なので、“疲れる”というのはあながち間違いでもないが、それは幸福感の端っこにある心地よい疲労感だ。そのような気苦労は、決して秋人と一緒にいたくないために生じるものではない。

でも、秋人は少なからず不愉快な思いをしただろう。

あのとときの彼の顔が鮮明に浮かび上がる。雷を浴びたような衝撃を受けて驚愕した表情。

そして、その中にほんの少しだけ垣間見えた淋しそうな顔。

瞼の裏側に刻み込まれたそれを反芻するたび、後悔と自責の念とが一緒くたになって押し寄せる。

いまさら後悔しても仕方のないことなのだが、嘆かずにはいられない。後の祭りとはよく言ったものだ。

「ぐはあゝ・・・・・・・・・・」

堪え性もなく、声とも溜息ともつかない音がだらしく漏れた。

「・・・・・・・・ずほ・・・・・・・・瑞穂ってば！」

突然、ぺちつとおでこを指で弾かれた。

「あいたつ・・・・・・・・・・なによ」

自分がへばり付いている机の前に立つノッポの友人は、腰に手を当てて私を見下ろしている。

額を押さえて批難がましい視線を送るが、それは相手の睨みによつて相殺された。

「なによ、じゃないわよっ！あんた今何時だと思ってるのよ」

教室の時計をちらりと覗く。

「・・・・・・・・一時ちよつと前」

今度はおでこを押さえている手の甲を指で弾かれた。

「痛っ！」

手の甲をさする。

「私はそんなこと聞いてるんじゃないの！な、ん、で、お昼過ぎて

からあんたが登校してきたか聞いているの」

親友はまるで自分が担任だというように般若の形相で私をねめつけてくる。胸中で思わず震え上がるが、そんなことは臆面にも出さず身体を起こして椅子に座りなおした。

「体調が悪かったんだもの」

さも歯牙にも掛けていないというフリをして切り返したが、親友はなおも疑わしげに顔を覗き込んでくる。

「ふ〜ん・・・ああそう。瑞穂は体調が悪くてそれで遅刻したのね」
私はこくこくと何度もうなずく。

「どこが悪いの？頭？」

「おなかよ」

友人の軽口が癪に障ったが、それが有紗なのだと割り切ってさらに受け流す。

有紗はそんな私をじっと見つめていたが不意に視線を教室の入り口に移し、一言。

「あ、秋人っち」

ガタッ！

跳ね上がった膝が机に勢いよくぶつかった。痛みに顔が歪む。

どうして秋人がここに？謝りに来たのだろうか。いや、そんなことは絶対にあるはずがない。理不尽な振る舞いをしたのは私だ。では何故ここに？

急激に上昇を始めた心拍数は跳ね上がったままだ。ドクドクと忙しなく音を立てている。

恐る恐る有紗の視線の先を辿る。

いない

ほっとしたような、少し残念のような何とも言いがたい気持ちになる。そこでこれが嘘だとううやく気付き、上目遣いに有紗を睨んだ。

「・・・と、思ったら別の人だった」

人の心を弄ぶ友人は、嫌いな友達の悪戯現場を偶然目撃した子供のような嗜虐的な笑みを口元に浮かべている。

やられた

私は思わず苦虫を噛み潰したような顔になってしまった。

「瑞穂は嘘がつけないんだから、最初から無駄な努力はしないほうがいいよ。あんたの心は古今東西、どーせ秋人うちに専有されてるんだから」

「そんなことないわよ」

明らかに不機嫌な声音で答えると、有紗は口元をにやりと引き上げる。

「あゝら、じゃあ今何にお悩みになっているの？」

「それは・・・」

言葉が出てこない。どうやら防戦一方だったこのやり取りは、有紗の完全勝利に終わったようだ。

「わかったわよ！わかったからこの話は後にして」

有紗は言質を取ると、満足したようにうんうんと頷いた。

どの道私はこの友人に相談していたらうし、結局は今認めるのも後になって打ち明けるのも同じことなのだが、なぜか今認めるのは悔しい気がした。

いつか覚えてろ。

私は胸中で静かに闘志を燃やすのだった。

「霧宮君」

正面には肩を落とし不安そうな顔をした同級生。

「ん？」

どうしたんだという気遣いを込めて聞き返す。

「あの、さっきからぼーっとしているようですが・・・その、つまりませんか」

指摘されて、初めて自分が呆けていたことに気付く。慌ててそんなことないと手を振り取り繕うと、気弱そうな少女はほっとしたような笑顔を浮かべた。

今は昼休み。俺と片瀬は屋上で弁当を広げている。片瀬と一緒に弁当を食べる約束をしていたのだ。

それが何故屋上なのかというと、今まで接点がなかった二人が教室や食堂で弁当を広げた場合、好奇の視線を浴びる恰好的になるだろうからだ。そうなってみる、次の瞬間わんさかと群がってきた無遠慮なクラスメイトの質問攻めに合う。俺の受け答えいかによっては、我が校のプリンセスとのあらぬ噂が立っている俺の立場はあつという間に消え失せ、俺は行き場を失う。それだけは絶対に避けたかったのだ。

だからこそ必然的に、人気がない、それも片瀬しか入ることのできない屋上を選んだわけだ。

日ごろの行いが良いのか、本日の天候は晴れ。入道雲がゆったりと真っ青で広大なプールを泳いでいる。

俺たちは夏の日差しを避け日陰に腰を下ろしているが、日本の夏はそれでも少し暑すぎる。

額を伝う汗をワイシャツの裾で拭う。

「やっぱり、少し暑いな」

まいったと笑みを浮かべ、傍らに置いたペットボトルをあおる。

「そうですね。ちょっと暑いですね」

幾分か気のない返事が返ってきた。視線もやや下がり気味だ。気にかかったが、あえて尋ねるようなことはしなかった。

件の事故により右手が使えないので、左手にフォークを持ち卵焼きを刺す。それを口元に運び口に入れようというところで、ぴたりと行動を止めた。

「ど、どうした？」

「気にしないでください」

そう言われても……。

気になるのだから仕様がなない。片瀬の瞳は弁当箱から俺の口に運ばれる卵焼きを一心に追っていた。おまけに彼女の表情は鬼気迫るものがあるのだ。これで気にするなというほづが無理な注文だ。

「さあ早く食べてください」

まごつく俺に痺れをきたしたように片瀬が催促する。

俺は片瀬から目を逸らし、口に入れた。

もぐもぐと顎あごを動かす。効き過ぎた塩つけが口に広がる。それに少し焦げているようだ。食べれなくもないが、美味しいというわけでもない。

つまり、まあ、あれだ。微妙、ってやつだ。

「・・・お味はどうですか？」

片瀬は俺の表情を窺いながら恐々と尋ねてくる。ここで片瀬の気にしていることがやっと分かった。

今日は一緒に昼飯を食べると言ったが、二つの弁当を用意したのは片瀬だ。普段なら俺も気分次第で弁当を持参するが、生憎と利き腕が使えないので料理は無理だ。コンビ二に寄ってパンでも買おうと思っていたが、片瀬はそのことを予想し弁当を作ってきてくれたのだ。このような、いかにも女の子らしいことをしてくれる娘は今まで一人たりともいなかったため、正直嬉しかった、のだが・・・。

しかし、困った。

真剣に味を聞いてくるのは片瀬お手製の証拠。そして指に巻いてある無数の絆創膏……。深窓の令嬢である片瀬のことだ。きつと料理など数えるほどしかしてないのだろう。それでもしたたかにキッチンに立つ片瀬の後ろ姿を想像すると、その健気さに涙したくなる。

さあ、なんて答えればいいんだ。やはりここは美味しいと答えるべきなのだろうか。しかし、弁当箱に詰めてあるのは片瀬も同じもの。嘘をつけばたちどころにばれてしまう。かといって正直に感想を言っ正しいのだろうか。それはそれで自分が丹精込めて作った料理が否定されたみたいで傷つくものだ。

「霧宮君・・・しょーじきに答えてください」

一種の緊張感が包み込む。迷う。迷うが、俺は意を決して口を開いた。

「う・・・」

片瀬の期待と不安が入り混じった瞳が俺を見つめる。

「50点」

途端、片瀬ががつくりとうな垂れた。

これでもかなりまけたほうだ。明日香さんの手料理を毎日食べる俺の舌が肥えているのかもしれないが、一人暮らし歴2年になる俺のほうが一流シェフ付きのお嬢様より料理慣れしているのは、火を見るより明らかだ。

「でも」

俺の言葉に、片瀬は俯いた顔から少しだけ瞳を覗かせる。俺は目の前でしょぼくれている片瀬に向かって励ましの言葉をかけた。

「俺のためにわざわざ頑張ってくれたんだろ？その気持ちだけでも嬉しいよ。料理はこれからうまくなっていけばいいって」

そう言うってからアスパラ卷きを口に放り込んで、にいと微笑む。片瀬の顔がぱあっと明るくなった。

「そうですね。私、頑張ってお料理上手になります」

小さくガッツポーズをする片瀬の顔はとても晴れやかだ。

それを見て、憂鬱だった気持ちが少しだけ晴れたような気がした。

考え事は後に回そう。

今は、滅多にすることができない楽しい昼食に専念しようと思えた。

フォークに刺した、足が黒いタコさんウインナーをしげしげと見つめる。

料理だけなら瑞穂のほうが上か。

なんだかそれがおかしくて、声を上げずに笑った。

21日目『憂鬱と弁当』（後書き）

今日のよき日、旅立つ者は数知れず。でも、自分は果たして卒業できるのか。そんなことを思ってしまう。

さて、書き方がだんだんとゴテゴテしくなっている今日この頃。
1
日目とのスタイルの違いに愕然としました。

22日目『バッティング』

「あの、のど渴きませんか？」

事の発端はそんな些細な台詞だった。

燦々（さんさん）というよりじりじりといった表現のほうが正しい日差しが容赦なく降り注ぐ中、俺と片瀬は肩を並べて帰路についている。

世界に名を轟かせているコンツェルンの御令嬢の身の安全は、俺のひ弱な双肩にかかっているのだが、やはり役不足は否めない。あの老獪な執事が何を考えているのか疑わずにはいられない俺の心境も、自ずと察することができるというものだ。

しかし、狩谷は狡猾であり伶俐^{れいり}であることを忘れてはいけな。やはり年端もいかない一介の学生などに主人の命を預けはしないだろう。

もしかすると、黒服に身を包んだいかにも屈強そうな本物のBGが辺りに潜んでいるのかもしれない。

本当にあり得そうで、夏だというのに一瞬寒気を催した。

小さく首を振り、気持ちを切り替えて会話に集中する。

「俺もどこかで涼みたいな」

ワイシャツの胸元をパタパタとさせ風を送る。

「じゃあ、あそこによって行きましょう」

夏の日差しにも劣らぬ眩しい笑顔だ。少々誇張のし過ぎかもしれないが、それでも普段の彼女よりも意気揚々とした様が見受けられる。

片瀬が指差した先は某全国チェーンのファミリーレストラン。

狩谷の言っていたことを思い出し、笑顔でそれに頷いた。

俺の大義名分は、片瀬に学生らしい青春を謳歌してもらうつことなのだ。

「いらっしやいませー」

景気の良い声が明るい店内に響く。

俺は冷たい空気を胸いっぱい吸い込んだ。灼熱地獄から解放された気分だ。片瀬もほっと溜息をついている。

何組かの客はいるようだが、中はガランとしていて空席が目立っていた。昼時を過ぎた時間帯なのでちょうど客足も一息ついた頃合なのだろう。

「二名様でよろしいですか」

「はい」と俺。

「ではこちらへどうぞ」

商売用の笑顔を貼り付けたウエイトレスに案内されたのは、道路に面したテーブル席。ガラス越しに見慣れた街並みが見渡せた。

俺たちは向かい合って席に着いた。

ここに入ろうと提案したあの彼女は、なんだか先ほどから落ち着きがない。きよろきよろと店内を見回し、まるで子供のような振る舞いだ。

「片瀬さんはやっぱりファミレスとかは来ない？」

「そうですね。あまり来たことはありません」

話しかけられたことで自分の行動に気がついたらしく、恥ずかしそうに笑った。

「へえ、じゃあ外食はいつもどこで？」

「外食にはあまり行かないんですけど・・・ええっと、ホテルのレストランとか料亭とかで食事会をすることはあります」

「へー・・・・・・・・・・」

聞かなければ良かったと後悔した。

明日香さんの料理が一番だ、と虚勢は張つても、たまには自分もそういう豪華絢爛な食事を楽しみたい。目の前で小首をかしげる少女を素直に羨ましいと思った。

先ほどのウエイトレスがお冷を持って来た。ひと息に飲み干し、外で失った水分を補給する。

「はいこれ」

「あ、ありがとうございます」

テーブルの隅に立て掛けてあるメニュー表のうち一つを片瀬に渡した。

「さーで、なんにすつかないと・・・」

もう一つを広げ、さっと目を通す。

ハラへってねえし、コーラでいつか。

早々に注文する品を決め終える。片瀬はもう少しかかりそうなので、暇つぶしにパラパラと捲った。

フロート、チョコサンデー、あんみつ、ミニ白玉パフェ・・・。

見るだけでげっぷが出そうだが、どれもこれもあいつなら喜びそうなスイーツばかりだ。

あいつが口元にアイスをつけて、それでも至福の笑みでスプーン

を握る。絶対に俺にはくれない。横取りしようものなら大惨事だ。見る見るうちにスイーツは減ってゆき、あっという間に完食。そして俺は、空になった器を見て盛大に溜息をつくのだろう。

そんな光景を思い浮かべて、くつくつと笑った。

笑ってしまってから気持ち悪がられていないかと思い、片瀬を盗み見る。

しかしそれも杞憂に過ぎず、彼女の顔は肉汁滴るハンバーグの写真の奥に隠れていた。思わずほっと胸を撫で下ろす。

時折唸り声うながするので、注文する品がまだ決まらないのだろう。

俺は頬杖を突く。

はたと“あいつ”とは誰のことかと思った。

言うまでもない、むしろ口に出すのも憚はばられる暴君のことだ。

そのエゴイストとはつい最近、また喧嘩をした。なんのことはない。いつもの低レベルな喧嘩だ。

しかし、今回はいつにも増して腑に落ちない点があったのも確かだ。

それに……………。

「君。霧宮君！」

「へ？・・・ああ、ごめん。決まった？」

さらなる思考の渦中かちゅうに引きずり込まれようとしたそのとき、片瀬の声で我に返った。

「はい。あの、どうしたんですか？ぼーっとしてたみたいですけど」

「いや、なんでもない。考え事」

なんで俺、瑞穂の事なんか考えていたんだ。今更になって思った。

「心配事でもあるんですか？」

「別にたいしたことじゃないよ」

神妙な顔つきになる片瀬に笑いかけ、妙な空気を払拭するために店員を呼びつけた。

「俺、コーラ」

「はい、コーラがお一つ」

「えっと、デラックスチョコジャンボパフェお願いします」

なんだその凶悪な名前は。

「はい、デラックスチョコジャンボパフェがお一つ」

だからなんだその凶悪な名前は。

「以上でよろしいですか？」

「はい」

店員は一礼し去って行く。俺は不安に駆られ、メニュー表に目を通した。

あった。デカい。なんだこれは。

いよいよ不安も危惧の念へと移ろい始め、片瀬に尋ねた。

「なあ、さっき頼んだの全部食えるの？」

「やっぱり、無謀すぎましたかね」

無謀だ。きつぱりとそう言った。

「あう……」

「とにかく、俺は助けないからな」

「はい……」

飼い主に叱られた子犬のようにしゅんとなる。その様に胸打たれるものがあつたが、ぐっと堪えた。もしや誰かのように、片瀬もぺろりと完食するかもしれない。そうなったら、片瀬というか弱い少女に対する見方を再検討しなければならないが。

「トイレ行ってくる」

俺はそう言つて席を立つ。

そして座つた。

「どうしたんですか？」

片瀬が不思議そうに小首を傾げる。

「別に？」

自分でも分かるほどのぎこちない笑みを浮かべた。

「だって霧宮君、今トイレって」

「いや、なんでもないんだ。忘れて」

「そうですか……。あの、すごい汗ですよ？どこか具合でも悪いんじゃない？」

片瀬の台詞の後半のほうは、ほとんど耳に届かなかった。いや、右から左へ脳を通らずに突き抜けていったのかもしれない。とにかく、今の俺はそれほどまでに動揺していた。

席を立つた際、見てはならないものを見てしまったのだ。思わず目を疑った。

それは、妻の浮気現場でも幼児誘拐現場でもない。ごく普通の、他人から見たらなんの変哲もない日常風景の一部。

そんな風景に混じって“あいつ”がいた。

22日目『バッティング』（後書き）

祝 50万アクセス突破！！

これを書きたいがために夜中の2時までかかって仕上げました。なんとわかりやすい性格なんでしょう。自分でも溜息をつきたくなります。

はい、そんなこんなで私目の小説も大台に乗りました。ありがとうございます。ございます。

今後もなにとぞ、なにとぞご贖に。

23日目『企みと笑みと』

少し茶色がかった長い髪が時折揺らめく。その都度、俺の心臓も跳ね上がった。

振り向くな。

そう願うことしかでず、焦燥だけが募った。

俺をこんなにも動揺させるあいつ、つまり瑞穂は、彼女の親友の有紗先輩とここからかなり離れた席に座っている。幸いにも瑞穂はこちらに背を向けていて、俺と片瀬の存在に気付いていない。俺も立って初めて二人の存在に気付いたのだから、そうそう見つかるものでもない。有紗先輩もおそらく気付いていないだろう。

なぜこうも運悪くバッティングしてしまったのか、そんなことはどうでもよかった。ただ、この危機的状況を打開する一手を考えなければならぬ。

もし見つかってしまったらどうなるのだろう。

………少なくとも気まずくなる。

あの夜から何だかんだいって顔を合わせていない。俺は先般の教訓を活かし綾崎家で夕食をとっているが、示し合わせたかのように決まって瑞穂の姿はなかった。明日香さんは「困った子たちね」と笑って流してくれたが、この状況が続くのはいささか芳しく^{かんば}ない。

俺は頭を抱えた。

今、瑞穂には会いたくない。

喧嘩しているからとか、気まずいからとか、そういうことではない。ただ純粹に、片瀬と一緒にいるところを見られなくなかった。

そんな感情がなぜ生まれるのか自分でもよくわからない。

しかし、瑞穂を邪魔者扱いしていると思われたくないのだと、勝手に結論付けた。

ふと、頭の前からからいぶかしむ声がかけられた。

「霧宮君やつぱりおかしいです」

抱えている頭を上げ、難しい顔をした片瀬を上目遣いで見る。

「そう？」

片瀬は力強く頷く。

「はい。だってさっきは物憂げな顔で考え事をしていましたし、今だって頭を抱えていますし。本当はなにか、大切な用事があったんじゃないですか？」

俺は慌てて首を横に振った。

「ないよ、ないない。今日は帰ってから暇だって。それに私用があつたらちゃんと言っから」

嘘は言っていない。事実、帰宅すれば暇を持て余すだけなのだから。

「本当ですか？」

「本当本当。日本人ウソつかない」

片瀬はまだ俺の言葉を信じ切れていないというような表情で見つめている。

片瀬が俺の身の上を案じてくれるのは嬉しいが、少々憂慮に過ぎるようだ。そのことに彼女は気付いていないし、心配性が悪いことでもないの、もちろん指摘するつもりはない。

それに可愛い子に心配されることが男冥利に尽きるのはどうしたって否めないだろう。自分だけを心配してくれるわけではないだろうが、それでも嬉しいものは嬉しい。

自然と口元がほころぶ。

しかし、喜悦が先行していた感情に暗雲が垂れ込め、やがて陰鬱な雨が心に水溜りを形作るのには大して時間がかからなかった。

片瀬が肩を落とし、口を開く。

「それになんだか、今日の霧宮君全然楽しそうじゃないです」

「えっ」

思わず言葉に詰まってしまった。

まさか片瀬からそんなことを言われるとは思っていなかったからだ。いや、それが図星だったからかもしれない。しかし、この切羽詰った状況を愉しめる者などいるのだろうか。いるとしたらそれは肝っ玉の据わった大物で、俺は大物ではない。

このように自分に対して言い訳してみるが、全く意味の無いことだった。

図らずとも閉口してしまった口を何度か開くが、いかんせん言葉が出てこない。

片瀬も俯いたまま口を噤んでいる。

すぐにでも否定したかったが、果たしてその言葉を信じてもらえるかどうかは疑わしい。かといって本音を言うわけにもいなかった。そもそも片瀬は、俺と瑞穂が喧嘩していることを知らない。もしかしたら不仲であることにも気付いていないかもしれない。そんな人に瑞穂がいるから楽しめるものも楽しめないと言ったら混乱してしまうだろう。

まさしく八方塞がりだった。

そんなとき、

「やーやー君たち、奇遇だねえ」

聞いたことがある軽い調子の声が沈黙を破った。

振り向くとそこには片手を上げてニヤつく有紗先輩と、その後ろに顔を背けて立っている瑞穂がいた。

軽く泣きたくなった。

「ほんと奇遇ですね。ところで先輩たちはなんでここに？」

上手く苦笑を隠せたかは甚だ疑問である。

「いや、健全な女子高生だもん。寄り道は当然じゃない？秋人っちたちもその例に漏れないでしょ」

正面からの白々しい台詞。

「まあそうですね……。でもわざわざ席を移動することもないでしょうに」

「あれ？秋人っちは私たちがあつちの席に座ってたこと知ってたんだ？」

しまったと思うが後の祭りだ。有紗先輩はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている。

俺はより猜疑心さぎしんを募らせ、顔をしかめた。

二人の登場により席順が変わり、俺は窓際、俺の隣に片瀬が移り、俺の正面に有紗先輩、その隣に瑞穂が座っている。片瀬は見知らぬ先輩の介入で戸惑いの表情を露にし、瑞穂はさっきから俯いて彼女らしからぬ行動をとっている。

異様に喉が渴いて、先ほど届いたコーラに口をつけた。

「で、そっちで縮こまってる彼女さんの紹介はまだ？」

軽く咽る。^{むせ}鼻に少し入り炭酸がつんと沁みた。

「げほっ、えほっ……と、友達の片瀬さんです。先輩わかってて言ってるでしょ」

軽くねめつけるが、全く意に介する様子もない。

有紗先輩は片瀬に向き直り自己紹介をした。終わりに「よろしくね」と言われたところで片瀬も慌てて、「片瀬緋那です。よろしくお願いします」とやや堅めに返事をした。

俺は有紗先輩の真意を確かめるためさっきの質問の答えを促した。

「で、俺たちに何か用事でもあるんですか？」

「用事がなくちゃダメ？それとも」

ちらりと片瀬に視線を移す。

「お邪魔だったかな？」

「そんなことはないですけど」

いいように弄もてあそばれているのはどう見ても明らかだ。何なんだこの先輩は。瑞穂以上に扱いに困る。

俺が腕を組んであからさまに仏頂面をすると、さすがの有紗先輩も悪びれたのか、はたまた揶揄やゆすることに飽きたのか笑いながらこう話し出した。

「あつはつはつは、ごめんごめん。実はね、恋愛相談に乗ってもらおうかと思ってね」

「れんあい、そうだん・・・・・・・・・・？」

「そう、恋愛相談」

「誰が誰に」

「私が秋人うちに。瑞穂じゃ頼りにならなくて」

瑞穂に視線を移すと、お冷をぼんやりと傾けていた。片瀬も所在無げにしている。

この妙な空気を機敏に汲み取った俺は片瀬に話を振った。

「でも、こういう話は女子同士のほうが……。片瀬さんだってそうだろう？」

「えっ！？あ、あああの、えと、どうなんでしょう・・・・・・・・・・」

まさか自分に話が振られるとは思っていなかったらしく、あやふやな答えを返された。

「まあまあ、ちょっとだけ聞いてやってよ。きっと秋人っちのためにもなるからさあ」

俺は有紗先輩の言葉に頷くしかなかった。

「じゃあ、注文が揃ったら真剣に聞いてね」

有紗先輩はしたり顔でうんうんと頷いていた。

やがてウエイトレスが注文の品を運んできた。手には異彩際立つ様相を呈しているスーツが二つ。

「ふたつ？」

思わず呟いた後、机に置かれたそれを見て妙に納得した。

「なによ」

余程顔に顕著に現れていたのだろうか、目が合った瑞穂が頬を膨らませて俺を睨んできた。

「別に」

実に久しく聞いていなかった彼女の声は驚くほどニヒルで、でもいつものあいつの声で、なんとなくそれがおかしくて笑ってしまった。

その顔が瑞穂の目にどう映ったのかはわからないが、彼女はふんと顔を逸らした。

23日目『企みと笑みと』（後書き）

意気揚々と雪山に出かけていったはいいがボードのやり過ぎで全身筋肉痛の昨今。

遊びにかまけ、揚句の果て布団の中で腰痛と戦う私のようにならないよう日々精進しよう。

24日目『氷解』

打ち明けるんじゃないかった。

肘を突き、その上に顎を乗せている上機嫌の友人を見てそう思った。

正面に座る彼女とは対照的に、陰鬱な面持ちで嘆息する。

そもそも後を付けるとのたまった時点で断るべきだったのだ。否、断ったのだが「大丈夫よ。それに瑞穂だってライバルの動向は気になるんじゃないの？あの娘、かわいい顔して秋人っちの貞操食べちゃつかもよ」なんて有紗の煽り文句にまんまと乗せられてしまったのだった。

自分でも馬鹿だと思う。嘆かわし過ぎて救えない阿呆だ。しかしこればかりはどうしたって抗える衝動ではない。

有紗の視線の先にはどんな表情で向かい合う二人がいるのだろう。

困った顔をしているのか。笑いあっているのか。それとも照れているのだろうか。

振り向きたい欲求を抑え、机の下で拳をぎゅっと握った。

数日前の教室で有紗の口車にうまくこと乗せられた自分の愚かさを、今になって痛感する。こんなことになるなら打ち明けず、一人で悶々と過ごしていたほうがマシだった。

「ねえ、いつまでこんなストーカーまがいのことしなくちゃいけないのよ」

私はこの釈然としない気持ちを声音に乗せて有紗をきつと睨みつける。

「んー？知らない」

私の憤りを知ってか知らずか、有紗は無責任な態度でアイスコーヒーをすすった。

私はどんと机を叩く。

「ちょっと！ふざけてるんなら帰るわよ！」

有紗はストローから口を離し、にこりと笑う。

「まあ待ちなさいって。これから合流するんだから」

「合流って・・・まさか、秋人と！？」

「そうに決まってるじゃない。なに当たり前のこと言ってるのよ」

それを聞いた私は顔面蒼白になり、有紗がくすくすと笑う。

「瑞穂は何も心配しなくていいの。ただ黙々とパフェを食べててね」

有紗に言われてさつき特大のパフェを頼んだことを思い出す。あちらに移るということはそれも二人の前に運ばれると同義だ。秋人の前だけならともかく、緋那ちゃんの前で食い意地を張るのは羞恥

心が許さなかった。

「ぜつつつたい、いや！！私ここから動かないからね」

腕を組み、ふんつとそっぽを向いて不動の構えを見せる。

ここで引いたら今度こそ有紗にレッテルを貼られてしまう。「扱いやすい女」と書かれたレッテルを。そのような不名誉極まりない授与式は何としても避けねばならない。

動かざること山の如し、当面の間私は見ざる聞かざる言わざるを貫く心意気である。

「あ、すみません。これからあつちの席に移っても……はいい……はい」

ぎよつとして目を開くと、有紗は店員と交渉し終えたところだった。

店員が去っていく。

その後姿が遠ざかるにつれて景色も灰色に変わっていく。

私は母親に置いていかれた赤子の気持ちがわかったような気がした。

たぶんこんな気持ちだ。

「あ……ああ……」

「ほらっ、なに呆けてんの。早く行くわよ」

有紗は飲みかけのアイスコーヒーを片手に立ち上がる。無情にも告げられたその言葉には幾ばくの譲歩も含まれていない。

軽く泣きたくなった。

十数分後。

私は上機嫌の一步手前くらいには機嫌が良くなっていた。

「別に」

そう言った彼の顔は笑っていた。私はついいつもの癖で顔を背けてしまう。惚れた弱みなのかもしれないが、秋人の笑顔にきゅっと胸が締め付けられるのだ。

それと同時にほっとしてもいた。

秋人は怒ってない。

こんなことなら変に逃げ隠れせずに夕食を共にしていればよかったと思う。

いつの間にか有紗への怒りは感謝の念に変わっているのだが、彼

女には黙っていよう。また着け込まれること必至だ。

「あの、綾崎先輩？」

緋那ちゃんが控えめに声をかけてきた。そういえば挨拶もまだだつた気がする。

「なに？」

「先輩も同じものを頼んでいたんですね」

緋那ちゃんは口元に手を当てて笑っている。

私は机の上に並んだ二つのパフエを一瞥してから、

「ほんと偶然ね。それにしても、緋那ちゃんは食べきれなの？」

緋那ちゃんも頼んでいたとは……。心底意外だ。

「それ、霧宮君にも言われました。実物見て失敗したなって思ってます」

てへへと恥ずかしそうに笑う緋那ちゃんは思わず抱きしめたくなるほど可愛い。女の私でさえそう思うのだから、秋人がどう思っているのかなんて声に出さずとも明らかだ。

さり気なく息をつく。

「ま、残しても問題ないから」

横合いから秋人が口を挟んだ。

「あれ？でもさっき俺は助けないって……………」

「事情が変わった。というか」

秋人はちらりと私を一瞥し、

「早く食べないとなくなるよ、それ」

秋人の言わんとしていることがわからない緋那ちゃんは首を傾げている。

私は秋人を睨みつけた。が、当の本人はそ知らぬ顔でグラスを煽っている。

緋那ちゃんはますます首を傾げる。

「まあまあ。緋那ちゃん、この子たちなりのコミュニケーションなのよ。あんまり気にしないで流していいから。瑞穂も秋人っちも仲がいいのはわかったから、とりあえず私の話を聞いて」

呆れた表情で有紗が仲裁に入った。さり気なく話を切り替える辺りは流石だ。当然いたずら心も忘れない。

私は反抗しようとして藪蛇になることを悟り、寸でのところで口を閉ざした。秋人も言い返そうとしないあたり、有紗に対する接し方を学んだらしい。

「有紗先輩、相談のほうは？」

秋人が話を促し、有紗は多少高揚した口調で話し始めた。

「うん。相手はね、すっごい鈍感な奴でさあ、いつまで経っても私の気持ちに気付いてくれないの。ねえ、どうしたらいい？」

「どうしたらって・・・。えっと、さっぱりわかりませんが、もつとアピールすればいいんじゃない？」

「これでもかってくらいしてるって。それに、私ってうぶでしょ？思い切った行動とかできないし」

「うぶ・・・・・・・・」

「何か言った？」

「いえ、何も」

有紗の笑顔に秋人も引きつった笑顔を返す。

「とにかく、男子の気を引くためにはどうしたらいいか、男の子である秋人っちにご教授願いたいのよ」

「気を引くって言うても、どんな人だか知らないし」

「あはは、確かにそうね。趣味は・・・・・・・・」

秋人は有紗の話を相も変わらず真面目に聞いているが、聞けば聞くほど怪しく思えてきた。と同時に、段々と嫌な汗が吹き出てくるのを感じた。正直気が気でない。

私はパフェをつつきながら有紗を横目で観察する。

いつもの憎たらしい顔だ。

「俺ですか？俺はまあ、構ってくれないよりは構ってくれるほうがいいですけど」

これは有紗の「男子ってほっといてほしいのかな？秋人っちはどう？」という質問に対しての秋人の答えだ。

「でしょでしょ！やっぱり積極的なほうがいいわよね！」

有紗は興奮したように身を乗り出す。

まず口調からおかしかった。普段通りなのだが、所々妙に演技がかった声音で秋人の反応を見ながら話している。

それに話の内容に何か陰謀めいたものを感じるのだ。どこことなく私と秋人の関係と、私に対する秋人の気持ちを探っているように聞こえてしまい、有紗が何か言ったびにひやとする。このろくでもない友人はいつたい何を考えているのだろう。

有紗の胡散臭い話に対して、秋人は要領を得ないながらも真剣に受け答えしている。緋那ちゃんも時々「そういうのすごく分かります」などと追従（ししゅう）を交えて話しに加わっていた。

三人が微妙に盛り上がっているようにも見えなくもない。

自分だけがそわそわとしているのが、なんだかおもしろくなくかつ

た。

そのまま半時ほど男子の思考パターンや、それに順ずる行動、秋人が友人とどんな恋愛話をするかなど、とりとめもない雑話を繰り広げた。

不意に会話が止み、話を振られた秋人が腕を組みしばらく沈黙考する。

「そうだな．．．．．、やっぱり気持ちはちゃんと言葉にしないと、相手には伝わりません。だから、遠回りするよりも．．．えっと、なんだろ．．．．．」

上手く言いたいことが言えないでいる秋人が、困ったようにポリポリと頭をかく。

有紗の肩がわずかに震えている。

「ずばっと！．．．ずばっと？つまり、ええと．．．．．俺の言いたい事、解ります？」

有紗はとうとう堪え切れなくなって吹き出した。

「あっははははは、はぁー．．．もうダメえ、秋人っちかわいすぎい．．．．．」

ひいひいと息を漏らしながら苦しそうにお腹を押さえている。

当然、私を含めた一同が何事かと豆鉄砲をくらう。

狂った？

私は狂気の友人に恐る恐る手を伸ばした。

「ちょっと有紗、あんた大丈夫？」

「大丈夫よお。もう訊きたいことも聞けたし、帰りましょ」

私の手を払い除けると、有紗は秋人に向き直った。

「秋人っちの言いたいことはちゃんと伝わったから。今日はありがとう。そろそろ出よ」

「はあ、まあ先輩がいいならそれで。片瀬さん、帰ろうか」

未だに秋人は怪訝な顔つきをしているが、あえて有紗を問いただす気はないらしい。気持ちは言葉にしないと伝わらないと言った秋人を有紗はさり気なく皮肉っているのだが、本人は有紗の質問攻めから抜け出せた開放感で気付いていない。知らぬが仏、という言葉が頭に浮かんだ。

緋那ちゃんも秋人と同じく首を傾げてはいるが、素直に秋人に頷いた。

私たちはそれぞれ違った感情を抱きながら席を離れる。

もちろん、二つのパフェは私が空にした。

緋那ちゃんを送り届ける秋人と別れたあと、私は隣で鼻歌を歌っている有紗に詰め寄った。

「ねえ、恋愛相談って嘘でしょ」

「まあねー」

しれっと答える有紗からはどこことなくうずうずしているような、そんな普段とは違う印象を受けた。いぶかしみつつも、それよりも先に言っておかなければならないことがある。

「秋人の気持ち探ってた」

私はこれ見よがしに不満を呟く。

あれは大きなお世話だった。いくら有紗とはいえ、していいことと悪いことの分別は守ってもらいたい。そういうのは心の準備を整えてから知るべきなのだ。

「は？あんた何か勘違いしてない？確かに恋愛相談は嘘だけど、私は純粹に男の子のもろもろの事情について訊いてたのよ。だから瑞穂は黙ってパフェ食べてなさいって言ったんじゃない」

有紗は鞆を後ろ手に持ち替えると、ややはにかみながら続けた。

「愚弟とのスキンシップのためにね」

「ああ・・・そうか」

私は彼女のその言葉で完全に毒気を抜かれてしまった。また、これまでの全てのことにについて合点がいった。

私に相談しない理由も、相談相手が秋人ということも、

「有紗、楽しそうね・・・」

彼女のテンションが高い訳も。

今日は有紗に付き合わされたただだったのか。彼女にいやらしい作為がなかったことに安心しつつも、秋人と私の仲直りなど二の次だったことに不満を感じる。

しかし、この友人のことだ。きっと私たちのこともちゃんと視野に入れてくれていたに違いない。違ってはいけない。

結果として色々と好転してくれたのだから、これまでの有紗の私に対する酷い仕打ちは不問にしようと思うのだった。

「ふふっ、わかる？」

身体だけが大きくなってしまった小学生の瞳を爛々と輝かせて微笑む有紗。

これから弄もてあそばれるだろう弟君おにいさまに私は大いに同情して、強く生きろと心の中で呟いた。

24日目『氷解』（後書き）

まず、一ヶ月もほったらかしにしていたことを御詫びすると共に、これからも更新が滞るだるうことも御詫びさせていただきます。本格的に勉強をしないと留ね…考えたくありません。

はい！話は変わりますが、毎回出だしの文句に悩みます。すごく。そこで、先般の有名な一説をお借りすることにしました。

瑞穂は激怒した。

妙に合うのはなぜでしょう。

25日目『バケーションは夏の島』

変わらない世界などあるはずもなく、俺を取り巻く状況も日々刻々と変化していく。

それは空を漂う雲よりも、道を行きかう雑踏よりも早くて、目まぐるしい変化に自分が追いつけないほどだ。

そんな中ふと足を止めてみると、何気ない所作の中にも大切な意味が込められていることに気付くことがある。

けれども、たいていの人間は足早に通り過ぎ、その自らが歩んできた道程を振り返るときにはつと気付くのだ。

まさしく今がその時だと思った。

後悔しているかと訊かれたら、たぶんそうではない。

蒸し暑い体育館に詰め込まれて校長のありがたいお話を聞いたのが数日前。ありがたすぎて欠伸が止まらなかったことだけは覚えている。

それよりもこれから始まる夏の長期休暇で頭がいっぱいで、俺はどうずればいかに邪魔されず夏休みを怠惰に楽しめるだろうかと構

想を練っていた。

終業式の帰り道、片瀬はそんな俺にある提案をした。

「あの、夏休みなんですけど、みんなで旅行にいきませんか？」

なんでもそれは片瀬の執事である狩谷の企画で、普段お世話になっているお礼にとぜひとも招待したいらしい。

招待してくれるのは片瀬家の私有する無人島。詳しくは知らないが暖かい海に浮かぶ島で、それでも一応国内であるらしい。期間は三泊四日。費用は全てあちらが負担するようで、身の回りのものを持参するだけだとか。プラン及びレクリエーションについては、有意義な旅行にするため狩谷に任せてほしいということだった。

俺は二つ返事で了承した。

多少申し訳ない気持ちはあるもののせつかくの夏休み、楽しまなければ損だという自分の欲望にも勝る断らなければならない理由はこれといって見つからなかったからだ。

「みんな」というからには当然瑞穂や有紗先輩も招待するらしく、それだけでなく誘いたい人がいれば気軽に誘ってくれていいそうだ。

俺はその夜、さっそく司に電話した。

「もしもし司か？あのさ」

「嫌だ」

一言目に来るべきではない単語が電話口から聞こえた。まるで俺がこれから何を言うか知っているような対応で多少面食らったものの、根気強く誘うとしぶしぶながらも一緒に行くことになった。

なんだかんだといって結局他人に流される友人は、どことなく俺と同じ匂いがする。決していい意味でないことだけは確かだ。

旅行当日の早朝、俺たちは片瀬邸宅に集合した。

集まったメンバーは代わり映えのないメンツで、俺と司と有紗先輩と瑞穂。それに片瀬と狩谷を加えた5人での旅路となる。

俺を含めた3人は浮き足立つのを隠せず、ボストンバックを持つ手にも力が入っている。

しかし、司だけは陰のある瞳を隠さず機嫌が悪いようだ。

「やっぱり無理に誘ったか？」

俺がさり気なく尋ねると、「ああ」と婉曲もない言葉が返ってきた。強引に誘ってしまったと思っただけだが、ここまで不機嫌だとさすがに罪悪感を覚える。

片瀬と狩谷が邸から出てきて俺たちは二人に挨拶すると、さつそく片瀬家の愛用するリムジンへと乗り込んだ。運転手はもちろん狩谷である。

片瀬は終始にこにことしていて口数も多く、本当にこの旅行を楽しみにしていたようだ。

狩谷はというと、いつもの執事服に身を包み、柔和でいて食えない笑みを湛えていた。

しばらく車に揺られ片瀬家専用の滑走路に辿り着くと、今度はそこにある自家用セスナに搭乗して無人島のある県まで向った。

そこからクルーザーに乗り継ぎ、半時ほど海原の中を一路進んで行く。

そんなこんなでVIP待遇な旅路をはしぎまくって終えた俺たちは、昼もだいぶ過ぎてから片瀬家の所有する無人島 緋砂島^{ひすなしま}へと辿り着いた。

緋砂島。そこはまさにアーサー王の物語に出てくる幸福和楽の島アバロンのような場所だった。

だからといって林檎の木が辺り一面に生えているわけではないが、学業という日々の疲れ、また人付き合いの辛さによってできた傷を癒すという意味ではそんな形容も大仰ではないかもしれない。

なんといっても無人島だ。ほとんど手の加えられていない自然を満喫できる、そんな機会など一生に何度あるかわからない。

俺はとりあえず、大きく深呼吸をした。

「すうううう……はああぶっ!!」

背中に衝撃が走り、前につんのめった。

「秋人！なにしてんのよつ、無人島よ無人島っ！キャー」

「瑞穂……お前ももう少しテンションさげぶっ!!」

立ち直りかけたところにまた衝撃が走り、今度は完全に倒れ込んだ。

「秋人っち！なんて顔してんのつ、陰気よ陰気っ！」

「有紗先輩、明らかにワザとでしょ……」

「あ、ばれた？」

有紗先輩は舌をチロリと出すと瑞穂を追いかけていった。

ふざけんな……。

俺は砂浜を走り回っている瑞穂といつもより暴力的な有紗先輩を見て嘆息した。

「あのー、霧宮君大丈夫ですか？」

「うん。ああ、ありがと。……大丈夫じゃないのはあの二人だ。少し注意してくれないか」

上から覗き込んでいる片瀬の手を借りて立ち上がると、俺は二人

を指差した。

「あははは、でもこういうときは楽しまなきゃダメです。霧宮君もあのくらい元気のほうがいいと思いますよ」

俺は笑って茶を濁すと心の中で呟いた。

それは司に言ってくれ。

クーラーザーを振り返り、狩谷と一緒に荷物を下ろしている友人を見て苦笑いした。

司は道中話を振ってもおざなりに答えるだけで、ずっと窓の外を見ていた。何がそんなに面白くないのだろう。つまらないにしても、いつもは他人に合わせるくらいには気を使っていたはずだ。それがまるで子供みたいに不機嫌まるだし。片瀬や狩谷も心配していた。

「よし」

俺はクーラーザーが横付けされている栈橋に向って歩き出した。

「どこ行くんですかー？」

だいぶ進んでから俺がいないことに気付いた片瀬が訊いてきた。

「ちょっとあっち手伝ってくるー。片瀬さんは休んでてー」

後ろからの声に歩きながら応える。

このままではせつかくの旅行が台無しだ。せめて司が不機嫌な理

由だけでも聞こう。

そう思い、荷物を運んでいた司に声をかけた。

「司、ちょっといいか？」

「ん？ああ」

司は肩に下げていた二つのボストンバッグを砂浜に置くと、俺に向き直った。

「あのさ、お前ずっと不機嫌だろ？」

その言葉に司は顔を渋くする。

「そんなに俺たちとの旅行が嫌なのか？せめて訳だけでも教えほしいんだけど」

司は視線を逸らししばらく逡巡した後、

「旅行が嫌なんじゃない。むしろこういうところに来るのは好きだ。ただ……」

べちっ

司の頭に何かが直撃した。横からの衝撃に頭を傾げたようになる。よく見るとそれは星型をしており、だけど星とは似ても似つかない海洋生物のヒトデだった。

司は張り付いたそれを摘むと後ろに放り投げた。

「きゃはははははは！今の見た！？べちっ、だって」

嬌声の上がつたほうを見ると有紗先輩が腹を抱えて笑っていた。その隣で瑞穂は失笑している。

一方司は握りこぶしを作りわなわなと震えている。

俯いていた顔を上げると彼は叫んだ。

「っざっけんな姉貴！！今まで静かだったと思えば……。毎回毎回ガキみたいなことして恥ずかしくねーのかよ！」

「恥ずかしくないもん。恥ずかしいのは毎回毎回こんなことでキル司のほうじゃないの？」

「っ！ノヤロ……」

司はずんずんと歩いていくと有紗先輩に向ってゲンコツを落としたりした。

「あいたっ……女の子に向って何すんのよ！」

「女の子？誰が？こんなデケェ女いるか！」

「ひっど……瑞穂もなんか言っちゃって！」

俺は何がなんだかわからなくて呆然と立ち尽くしていた。瑞穂は顔を手で覆っている。

司の台詞を反芻する。

っざっけんな姉貴!!

「……………」

瞬きを数回。

「姉貴い

!？」

俺の叫び声が一番でかかった。

25日目『バケーションは夏の島』（後書き）

今回は特に感想を頂けると嬉しいです。

有紗先輩と司が姉弟であることは当初からの設定で、伏線は今まで色んな所に散りばめてきました。名字を出したのはまずかったかなと今では思っています（汗）

「はっ、そんなの気付いてたよ馬鹿作者」でもなんでもいいので、コメントしてくださいとありがたいです。

26日目『似たものどうし』

どのくらい驚いたかと思ったら、「驚きのあまり絶句するその遙か上空を上回り、軽く近所迷惑な大声を出してしまうくらい」には驚いた。

まさか無愛想な司といたずら好きの有紗先輩が姉弟だったとは…。

幸いここは無人島で、苦情を言いに来るおばさんはいないものの、この島にいる5人全員は俺に怪訝な眼差しをよこした。

「どうしたいったい」

姉弟喧嘩をやめ、傍に来た司がやや心配混じりの声音で言う。

「お、お前と有紗先輩が姉弟って……」

俺がやつのことでその言葉だけ紡ぎだすと、

「なんだ、知らなかったのか？」

司はぽかんとした表情を浮かべた。

「……」

俺は今度こそ絶句する。

知らなかったさ。知るわけがない。

第一司に姉がいたことすら知らない。今まで有紗先輩の話題を司の前で何度か出しているのだから、さすがにこれはないと思っていた。司のスルースキルも、まさかここまでとは……。

それに俺は有紗先輩の名字を知らなかった。これは単純に俺の失礼さと怠惰が招いた失態だが、例え知っていたとしても、名字が同じという理由だけでこの両極端な二人に血の繋がりを感ずることは、まずなかっただろう。

俺はこの言い知れぬ妙な驚きと、無愛想すぎる友人に対する憤りをどこにぶつけたらいいかわからず、駆け寄ってきた片瀬に勢いのままに訊いた。

「片瀬さん、司と有紗先輩が姉弟だったって知ってた？」

片瀬はぱちぱちと数回瞬きしたあと、首を傾げた。

そうか、片瀬も知らなかったか。いくらか救われた気持ちでそう思ったとき、

「ええっと、はい。瑞穂先輩と有紗先輩から聞いていたので知ってましたけど」

「あ……ああ、そう。そうだな、はは」

どうやら俺だけが仲間はずらしい。

緋砂島はリングをかじって芯だけが残ったような、ちょうど島の東側と西側が窪んだ形をしている。全長としては南北に約1キロ、東西に約0・6キロくらいなので、それほど大きくはない縦長の島だ。

俺たちが上陸したのはその東側にあたる海岸で、純白の石灰岩でできた緋砂島の砂浜が特徴的である。

船着場である木造の棧橋から南に50メートルほど行った所に、今回泊まることになっている片瀬家の別荘が建立（けんりゅう）されており、それよりももっと南側には岩礁がいくつか突き出て見える。

反対に北側を覗いてみると、何もない真っ白な砂地が島の最北端まで続いている。

ホワイトパールの砂浜が終わる内陸部には南国の森林が鬱蒼と茂っており、時折聞き慣れない鳥類の鳴き声が聞こえてくる。

俺たちはまず荷物を整理するため、片瀬家の別荘に荷物を運ぶことにした。

ボストンバッグを片手に振り返ると、棧橋に今乗ってきたばかりのクルーザーが横付けされて、波に合わせて揺らいでいた。

「俺たちだけか」

この島にいるのが5人だけだと思うと少し心細くなって、ついそ

んなことを呟いてしまった。

「なあに秋人？もうホームシック？」

地獄耳なのか、同じく重そうなカバンをひっさげて歩いている瑞穂がにやつと笑う。

「ばつ、違う！」

「何が違うのよ。急に一人で、俺たちだけか、なんて呟いたくせに」

「俺は別にそういうことを考えてたわけじゃないって！いざつとときに5人だと心配だろ。ほら、台風とか来たら島から出られないわけだし」

我が家が恋しいとは思っていないが、心細いと感じたことは事実なので上手く反論できない。思わず声を荒げてしまったことで、瑞穂の猜疑心をより募らせてしまった。

「台風？ないない。こんなに晴れてるのに来ると思う？」

瑞穂は馬鹿にしたように笑ってから雲ひとつない空を仰ぐ。

「それに天気予報だって一週間晴れマークだったじゃない。秋人ってやっぱり心配性っていうか、小心者」

「だまれ……」

「ま、何かあったらこの私が守ってあげるわよっ！」

瑞穂は肩で俺の二の腕辺りにタツクルすると、にひひと無邪気に笑う。

俺は舌打ちをして顔を背けた。

男が女に守ってもらうなんて言語道断。屈辱以外の何者でもない。これではまるで俺が女子に守ってもらわなければ何もできないチキン野郎ではないか。か弱い男子を宣言したわけではないし、人並みの勇気は持ち合わせているつもりなので、正直これはムカツときた。だから、

「誰が誰を守るって？この前私を守ってって言ったのはどこのどいつだ？」

「うつ……」

瑞穂がわずかに仰け反る。俺はにやりと口角を上げ、一気に畳み掛ける。

「守ってってことは心細かったんだよね？おまえだったら通り魔なんてのしちやいそうなのに。チキンハートはどっちだ、おい小心者」

「う、うるさいわね！いちいち揚げ足とんないでよ！私だって女の子なんだから怖いの当たり前じゃない」

「女の子？誰が？こんな傍若無人が女の子って言えるか！」

「ひつど……私だって列記とした女なんだからね！もう！有紗もなんか言ってやって！」

瑞穂は振り向くと、後ろを歩いていた有紗先輩に援軍を求めた。

「おまつ、卑怯だぞ！」

俺も釣られて振り向くと、有紗先輩の横で司が顔を覆っている。

「ん？どうした司」

司は俺と目を合わせないでぼそぼそと呟く。

「いや、俺たちってこういう風に見えてたんだって……ショックだ」

「は？」

司の言っている意味が解らない。俺も瑞穂も毒気を抜かれて顔を見合わせた。

有紗先輩が満面の笑顔で一言。

「私たちってそっくりだね」

しばらくの間を空けてから、俺と瑞穂は豆鉄砲を食らったようハトのように馬鹿面上げてハモる。

「あ」

少し前の姉弟喧嘩を今更ながら思い出した。あれほど幼稚な言い争いだと思っていたのに自分たちも同レベルのことをしていたのか

と思うと、なんだかすごく居た堪れない。

俺たちはとたんに恥はずかしくなり、黙もって砂浜を歩き出した。

26日目『似たものどうし』（後書き）

実に2ヶ月ぶりの更新。小説ほったらかしにするのもいい加減にするよと言いたくなりますが、忙しかったんです。考查、修学旅行、部活始動、e t c . . .

とにかく小説に回す時間がありませんでした。読者の方々にはすごく申し訳なくて、このサイトも開くのが怖かったです…。はい言い訳終了。

これだけ書いてないと、久しぶりに書いたときに違和感ありまくりです。この話、なんだかどことなく変かもしれませんがその寛大な心で許してやってください。

あ、応援してくれる方々、いつもいつもありがとうございます。次の更新……頑張ります。

27日目『キス』

さて、片瀬家の別荘であるが、いささか別荘にしては大きかった。日本の平均的な一軒家と比べると敷地面積だけでも数倍はある。

外観の大部分は清々しい白で統一されてあるが、張り出たウッドデッキはニス塗りだけにとどめてある。それによって、木目が温かい風合いを醸し出していた。そこには円形のテーブルとそれに付属する椅子が数脚置かれている。オープンカフェさながらだ。

それだけではない。内装もやはりすごかった。

玄関から入ると、まず吹き抜けの高い天井が目に残る。埋め込み式の出窓から差し込む光が、健康的な明るさで屋内全体を包み込んでいる。

階段を上るとロフトにつながっていて、そこから奥に行くと、いくつか来客用の部屋があるそう。また、ふとした所にアンティークや調度品がぽつぽつと置かれているのも楽しい。

2階建ての地下付きコテージは新築さながらの外観を保っており、海辺特有の塩害の影響も見受けられない。屋内も塵一つなく、窓ガラスもよく磨き上げられていた。

さしずめ俺たちの旅行のために、狩谷が予めハウスクリーニングにかけていたのだろう。年に一度訪れるかどうかの別荘を所有する金持ちの気持ちはわからないが、このような癒しの空間を提供してくれた片瀬には大いに感謝したい。

俺たちはそれぞれ2階の個室を割り当てられたので、各自自分の部屋で荷物整理をことにした。

別れ際、有紗先輩が高らかと宣言する。

「荷物整理終わったら泳ぐよ！30分後に水着で玄関集合！」

バミューダのポケットに手をつつこんで、背の高い彼女の横顔を片目で見やる。

モノキニという、前から見るとワンピース、後ろから見るとビキニである一見変わった水着をビシッと着こなした有紗先輩。緑と白のボーダー柄は快活な彼女らしい、のだが。

「遅いわね」

階段からつながったロフトを見上げながら、有紗先輩が呟く。腕組をした指先は忙しく振れている。彼女の機嫌は下降気味だ。

予定時刻よりも10分ほど時は進んだが、いつこうに瑞穂は現れない。

「準備に手間取ってるんじゃないでしょうか？」

水着の上に羽織ったパーカの裾をしきりに気にしながら、片瀬は

微笑む。

裾を引っ張るといふ行為が、逆に男子の視線を集めることに彼女が気付いているかは置いといて、俺は緩んだ顔を無理やり強張らせた。

傍らに突っ立っている司も、同じような表情をしていることにくらかほっとする。

「秋人っち！」

「な、なんすかつ!？」

「瑞穂呼んで来て。今すぐに!」

「あ……はい」

有紗先輩が俺のマヌケな顔を指摘しなかったことに胸を撫で下ろしつつ、そそくさと階段を上った。

ノックを2回。

「瑞穂ー?まだかー?」

部屋からは何の返事もない。

「瑞穂ー？」

今度は少し強めにドアを叩いた。

やはり反応はなかった。

不審に思いつつドアノブを捻ると、予想に反してドアはすんなりと俺を招き入れた。

部屋の構造は概ね同じなようだ。あらかじめ予め部屋に組み込まれているクローゼット。品のある化粧台。背の低いテーブルと木で編まれた椅子が2脚。

ベランダに通じる両開きのガラス張りの扉は開け放たれ、吹き込んでくる潮風が白いカーテンをはためかせていた。

壁際にはセミダブルのベッド。その上には……。

散らかった床にある瑞穂の旅行セットを踏みつけないように、そのベッドに近寄る。

「すうー、すうー……」

規則正しい寝息が耳に届いた。

ベッドに身を投げ出している瑞穂のあどけない寝顔を見て、苦笑いと溜息が同時にこみ上げる。

「子供かお前は」

あれやこれやと前日からはしゃいでいたので、本人のわからない間に疲れが溜まっていたんだろう。

むにやむにやと気持ちよさそうに口を動かす瑞穂を見ると、なんだか怒る気にはなかった。

こっちを向いて、ちょうど猫が丸まるように寝ている彼女。

その画だけを見れば、映画のワンシーンのようで、写真に収めておきたいほどだ。

「寝てるときだけは、お前もか……」

言葉を続けようとして、さすがにそれは憚ははかられた。

代わりに、唇に張り付いた茶色がかった髪の毛をすくう。するとそれは逃げるようにさらさらと指の間から滑り落ちた。

鬱陶しそうに瑞穂が寝返りをうつ。彼女の左手がベッドからずり落ちる。

しばし逡巡した後、「ったく」と自分に言い訳するように小さく呟いた。

俺は瑞穂を起こさないようにそっと抱きかかえると、彼女がベッドから落っこちない位置まで運ぶ。

「うつ、ちよっと重いな」

コイツ最近太ったか？と思い彼女の身体に目を走らせて、やめた。ざっくりと開いた胸元から覗く豊満な胸が、その存在を誇張してやまないからだ。

俺が変な気を起こさないうちに、瑞穂を起こさないようにゆっくりと寝かせる。あとは瑞穂の下敷きになっている腕を引き抜けば終わりだ。

「秋人……」

むにゅむにゅと意味のわからない寝言に混じり、瑞穂の口から自分の名前が出てきたような気がした。

「悪い、起こしたか？」

そう言って瑞穂の顔を覗き込む。

その時、瑞穂が腕を伸ばして、がっちりと下から俺を抱きしめた。

「んなっ！？お、おい、瑞穂さん……？」

俺が呼びかけても、瑞穂はうつとりと夢を見るような表情を浮かべている。

というか、夢を見ているのだろう。

覚醒した様子ではないし、どうやら寝ぼけているらしかった。

「瑞穂っ！ちょ、離せってば」

さすがに焦った。必至にもがくが、自分の腕は瑞穂の下敷きで、それに予想外に強い力で首を押さえつけられている状況ではどうにもならなかった。

瑞穂の顔が近づく。

完全にパニックに陥った俺がどうこうする暇いとまもなく……。

二人の唇は重なっていた。

「……っ!!」

目を見開く。真っ白になってフリーズした頭は、何も考えられない。

甘い香りが鼻孔をくすぐり、唇の柔らかい感触が、まるで媚薬のようにとろけた。

27日目『キス』（後書き）

この話もようやくだいが、いや少し、微妙に……ほんのちょっとだけ恋愛小説っぽくなった気がします。

では進展はあるのかと訊かれたら、そうではないです。
まだぐだぐだと続きます。

28日目『星空の下で』

「やっと起きてきたわね。この寝ぼすけ」

私が1階の大広間に顔を出したときには、すでに皆食卓についていた。

「ごめん、私寝ちゃったみたいで……」

目を覚ましたときには、すでに部屋は赤く染まっていた。窓が開けっ放しになっていて、身体に掛けてある薄手のブランケット1枚では、潮風は少し肌寒く感じたのを覚えている。

「そんなことはいいいから早く席に着きなさい。もうお腹が減って死にそうなんだから」

「さっきつまみ食いしてたくせに……」

「なんか言った？」

「別に」

仲がいい？姉弟を傍目に空いた席に腰を下ろす。

大きなテーブルを女性陣と男性陣が挟むようにして皆が席についていた。こちら側は私、有紗、緋那ちゃんの順に、あちら側は狩谷さん、司君、秋人の順に並んでいる。

「さあ、せっかくの料理が冷めてしまいます。腕によりを掛けて作

ったわたくし特製の海鮮フルコースです。どうぞお召し上がりください」

狩谷さんが少し得意げに言った。なるほど目の前にある料理はどれもこれもおいしそうなものばかりだ。彼は料理には少なからず自信があるのだろう。

「いったただつきまーす」

フォークとナイフを握り締め、真っ先に食べ始めたのは有紗。

「うーん、おいしーい」

本当においしそうに食べる有紗を見ると、こっちまで幸せな気分になるのは、たぶん彼女が無邪気だからだろう。

「いっぱい泳いだみたいね」

だからそんなことを言ってみたら、予期せぬ返事が返ってきた。

「今日は海には行かなかったわよ。代わりにこの家の中を探検したりして遊んでた。あ、そうそう、お風呂すごかった！夕食が終わったらさっそく入りに行こ！」

「そっか……ありがとう」

有紗はにこつと笑って私に食べ物を勧めてきた。

皆気をつかって海には行かないでくれたのは、ちょっと心苦しいけどとても嬉しい。

私はシーフードパスタを口に運んで「あ、おいしい」と呟いた。

「そつえば私の部屋に来たのつて有紗？」

女の子3人で大理石の広いお風呂に入りながら、ふと尋ねた。

「違うよ、秋人っち。なんで？」

「え？別にただ誰か気になっただけ」

じゃあ毛布を掛けてくれたのは秋人なのか……。

その嬉しい事実に関を緩める。でもなんだか少し照れくさい。

寝顔、変じゃなかったかな……。

今更だが、気になるものは気になる。後でそれとなく秋人に探り入れとこう。

「綾崎先輩のぼせました？大丈夫ですか？」

緋那ちゃんに言われてはっとする。慌てて大丈夫と言い繕うと、彼女は笑顔を見せた。

「あの、先輩は今日どんな夢を見てたんですか？」

「え？」

「霧宮君が幸せそうな顔で寝てたって言っていたので」

すると横から「バカ面って言うてた」と有紗が小さく訂正した。

「そ、そう。ええっとね……」

言えない。どんな夢だったかなんて。だって……。

「忘れちゃった」

「そうですか、残念です」

緋那ちゃんは少しいたずらな笑みを覗かせる。私は空笑いをしてごまかした。

「私もう上がるね」

夢の内容を思い出したら本当にのぼせてきた。

先にお風呂を出てきた私はウッドデッキに佇む人影を見つけ、外に出た。

「あーきと」

後ろから声をかけると、手すりに体重をかけて夜空を見上げていた秋人が振り向いた。

「ん？どうした？」

「何してるのかなって思って」

「いや、星が綺麗だったからつい外に出てきただけ」

そう言つて秋人はまた夜空を見上げる。私も釣られて見上げると、そこには幾憶もの星たちが瞬いていた。

「す」……」

「俺たちの住んでるとこじゃ、こんなに星見えないもんな」

「うん。でも秋人って夜空見上げて感動するようなロマンチックな人だったっけ？」

にたつとおどけて笑つて見せると、秋人は眉をひそめて嫌そうな顔をする。

「はいはい似合わなくて悪かったな。でも、この星空見たら誰でも感動するんじゃないのか？」

「そうかも」

素直にそこは賛成しておく。

遠くから漣さざなみの音が繰り返し聞こえてくる以外は、何の音もしなくて、辺りは息苦しいくらいに静かだ。

風がまだ乾ききっていない私の髪を揺らす。

後ろに組んだ手を何度かもしもさせた後、思い切って口を開いた。

「私が寝ている間に部屋に入ったでしょ」

思ったよりもぶっきらぼうな言葉が出てしまった。

「ああ。にやけ面で寝てたな」

「えっ……ほんとに？」

「夢でも見てたのか？」

秋人は卑屈な笑みを浮かべる。

「し、知らないっ」

訊かれたくないところをつかれて、思わずどもる。秋人は「ふうん」と意地悪そうに相槌を打った。

「もしかして誰かとキスする夢だったりして」

「な!?!ち、違う!」

「違うつてことは夢みてたんだな」

「っ!!」

動揺した。なんで夢の内容を秋人が知っているのか。

その夢の中では、私と秋人が恋人同士になっていた。それだけじゃなくてキスシーンも含まれているという、自分の願望をそのままにした夢だった。

寝言でまずいこと言ったのかな？

どうしようもなく不安になり、震える唇を開く。

「わ、私、寝言でなんか…言った？」

秋人が私に向って歩いてくる。さっきまでの静けさは嘘のようだ。心臓の音で何も聞こえない。もしかしたら私が秋人のことを好きなのが図らずともばれてしまったかもしれないのだ。しかも寝言で。それだけは絶対に嫌だ。

そして、

「何も言ってなかったけど？俺そろそろ風呂入ってくるわ。皆も上がった頃だろ」

そう言って秋人はそのまますれ違った。

「そうね」

力が抜ける。とりあえずばれてはないのかな？

秋人がいなくなっただけから、私はここを動けずにいたのだった。

28日目『星空の下で』（後書き）

やつつけ感が否めない今回の話。

27日目とただ一緒に投稿したかっただけだということも付記。

更新遅いのろまなカメですが、いつも読んでくださってありがとうございます。
ございます。

更新頑張ります！（注：更新スピードに変化を期待しないでください）

29日目『ビーチパラソルの下で』

天候は晴れ。カラッとした空気は日本の夏というよりむしろ、もっと地球の両極に近い地域の夏を彷彿させる。

波打ち際には女子の嬌声が、後ろの鬱蒼と茂る林からは鳥のさえずりが、島全体を包む漣に運ばれてくる。

宝くじにでも当たらないかぎり一生ご縁のないような贅沢極まりないバカンスを楽しんでいるのに、それにもかかわらず、俺の心は靄もやがかかったようにじめじめとしていた。

ビーチパラソルの下で太陽がわずかに透けた部分を何とはなしに眺める。

ぼやけた光が自分の心のようにだと思った。

なに悩んでんだろ。

何が自分の心につつかえているかなんてわかってる。でも何でつかえているのかわからなかった。

自分でもよくわからないが、昨日のことが頭を離れない。

昨日のことというのは瑞穂との事故のことだ。そう、事故。事故でたまたま唇が触れ合っただけなのに、妙に意識してしまう。

当然といえば当然だが。

自分がああいうことに不慣れなのは隠しようがない事実なのだから。

結局あの後瑞穂は糸が切れたように動かなくなり、俺は動転した頭で、でも変に冷静になって瑞穂は起こさないようにすぐに部屋を出た。それこそ寝込みを襲った不届き者のように。

ドアを閉めて本当の意味で我に返ったとき、自分の身体も息を吹き返したように心拍数が急に上がりだした。瑞穂の腕にからめとられた首の裏にはべつとりと汗をかいていた。その時の俺はドアにどのくらいの間もたれかかっていただろうか。

それからは何もなかったように皆に事情を説明して、談笑して、家の中を見せてもらって、瑞穂が起きてきて飯を食って、普段通りに時間は過ぎていった。

実際何もなかったのだ。

そう思えばいい。瑞穂は何も知らない。俺が口を割らないかぎり、瑞穂とはいつもと変わらずに接することができる。

あとは俺自身の問題なのだが、生憎とすぐに気持ちの整理がつけられるほど大人ではない。

それでも昨夜は瑞穂と普通に違和感を与えることなく話すことができたと思う。事の直後に普段どおりに振舞えたのだからこれから大丈夫だとは思うが、でも……。

ばやけた太陽を掴もうと手を伸ばす。

秋人……。

瑞穂は確かに俺の名前を呼んだ。彼女がどんな夢を見ていたのか、想像がつかないわけではない。

しばらく空中を彷徨った手は掴むところがなく、代わりに太陽の光を遮った。

目を閉じた暗闇の中では望んでもいないのにあのシーンがスクリーンに映し出される。

時々何かの曲が頭でリピート再生されて離れないように、あのシーンもぐるぐると頭によぎって止まなかった。

しかたなく腕をどけ目を開ける。と、

「秋人、泳がないの？」

「うおっ!？」

突然赤、黄色、青とパラソルの単調な色合いに割って入ってきた悩みの種に驚いて、身体をびくつと震わせてしまった。

「……なんだ瑞穂か」

「なんだとはなによ」

海水で濡れた髪を片方の手で押さえ、もう片方の手を膝につきながら、瑞穂はむっとする。

「うるさい。前屈みになるな」

フロントをリボン結びにして留めるタイプの白いビキニを着た彼女は、幼児体形とは程遠い体軀をしている。濡れた肢体が眩しすぎて、俺は視線を逸らしながら早口で言った。

「なんで？」

なんでもくそもあるか！見えるっつーの。思うだけで口には出さないが。

「いや、いい。なんでもない」

ややあつてから諦めたように口にした。

瑞穂は訝しげな表情をするが、機嫌がいいのかすぐに笑顔になる。

「ふーん……。それよりも皆待ってるよ」

「ああ、うん、行く」

波打ち際に目をやると、ビーチボールが楽しげに上がったたり下がりたりを繰り返している。

やっているほうは楽しいだろうが、ビーチボールからすれば毎度毎度叩かれては空中に舞って翻弄され続けるのだから迷惑な話だ。本当に。

迷惑かもう一度頭の中で考えてから、確かめるように小さく頷いた。

いきなり腕を抱えられる。

「ほーらっ、すたんだっぷ！」

ぐん、と身体が上がる。

「いてっ！引っ張んなくても立つって」

本当はそんなに痛くはなかったが、なんとなく八つ当たりの意味も込めて言った。

「うそつき。秋人一人じゃ立てないくせに」

無理やり俺を立たせると、意地の悪い笑顔で気に触ることを言う。

その言葉はまるで誰かがはっぱをかけないと何もできないと言っているようで、それが実際当たっているから悔しくて鼻を鳴らした。

「皆待つてるんだってば」

なかなか動かない俺に焦れたのか、瑞穂は俺の背中をぐいぐい押して日陰から追い出した。

日向に追いやられてわかった。アレほど弱々しかった太陽は、実はこんなにも煌々としていたのかと。

「あちいい……」

日陰がどれほどに涼しいかを改めて実感する。

「親父くさっ」

「暑いものは暑いんです」

「はいはい」

後ろ目で見やると、瑞穂は本当に機嫌がいいようで、天真爛漫な小学生みたいな満面の笑顔を湛えている。

「俺は今、知らぬが仏ってことわざの意味をしみじみと実感している」

「はあ？…うふっ、わけわかんないこと言ってないでさっさと走れ！」

「だから押すなって！」

一人で悩んでいるのが馬鹿らしくなるほど瑞穂は楽しそうなのがむかつく。

言いたくても言えないジレンマを抱えたまま俺は走り出した。

「みんなー！スイカ連れて来たからスイカ割りしよー！」

「は？おまつ、スイカって」

本当に一人で悩んでるのが馬鹿らしくなった。

29日目『ビーチパラソルの下で』（後書き）

また一月おいての更新……。

今頃になって忙殺される日々を送っています。それが楽しいときたもんだからまったく手に負えないもので。

でも忙しいのはいいことですね（更新については…… ^^ ;）

30日目『狩谷の頼みごと』

「ん　ん　ん……はあああ」

大きく伸びをしてから、溜息を盛大について脱力する。

「今日は、少し疲れたな……」

隣で司が心底疲れた表情で眉根を寄せると、熱いお湯を両手ですくって顔を濡らした。

「お前はまだいい。俺の身にもなってみろ。危うく頭力チ割れるとこだったんだぞ。顔面に有紗先輩のボールは食らうし、砂には埋められる。揚句の果てには後片付けを一人で……」

「ちょっと待て。片付けは俺もやった」

「そうだったか」

「そうだ」

「なんでもいいや……」

もう一度オヤジのように溜息をつくとき、綺麗に司とハモった。

広い大浴場で男二人、温泉常連客のゲートボーラーばりに長湯をする。弱冠16歳にして早くも晩年の雰囲気さえ醸し出しているのは、決して俺たちの体力不足のせいではない。

酷かったのだ。誰とは言わないが。

俺は静かに今日あった出来事を思い出していた。

サンクチュアリことビーチパラソルの下から、瑞穂に無理やり炎天下の砂浜に駆りだされたかと思うと、有紗先輩に横になるように指示された。訳を訊く間もないまま砂浜に寝かされると、有紗先輩、瑞穂、なんと片瀬まで束になって俺の身体を大量の砂で埋めにかかってきたのだ。

逃げることは容易たやすかったが、普段あまりはしゃがない片瀬の笑顔にやられた。

「あれがいけなかったなあ……」

思わず口に出す。

「ん？」

司が片目を開けてこっちを見た。

「いや、なんでもない」

再び頭の中に思い浮かべる。

完璧に手も足も動かないように埋めると、有紗先輩は横にスイカを並べてこう言った。

「さあ緋那ちゃん！スイカでも秋人っちの頭でも、好きなほうを割ってちょうだい！」

そこからはもう、本気で焦った。片瀬がばやばやしているのに痺れを切らした瑞穂が木刀をひったくって更に焦った。

まあ、結果的には無事だったわけだが。

「なあ、お前なんでスイカ割りとめてくれなかったんだよ」

非難交じりに唇を突き出す。

「とめたら、俺にとばっちりがくる」

「親友の危機より自己保身か、この薄情者」

「親友？そんなのどこにいるんだ？」

「チッ……死んでしまえ」

突き出していた唇を更に突き出した。

司は風呂から上がると早々に自分の部屋に引っ込んでしまったが、俺は部屋に戻る気にはなれずロビーで一人寛くろいでいた。

ソファアの背もたれに両腕を掛けて首の力を抜く。天井のファンをぼくと眺めながら涼んでいると、後ろから声をかけられた。

「霧宮様」

首をそのまま反って声の主を探すと、執事服に身を包んだ初老の紳士が逆さに映って見えた。

起き上がって振り返る。狩谷は無表情に立っていた。

「狩谷さん、なにかようですか？」

「ええ、緋那お嬢様のことで少しお話がございます。お時間よろしいでしょうか」

片瀬の？

「はい。大丈夫ですけど……」

狩谷の真剣な声音によりつつい神妙な顔つきになり、答えた。

「では、こちらへ」

そう言つと、狩谷は俺に背中を向けて歩き出した。

なんとなく、嫌な予感がした。

通されたのは1階の廊下の最奥にある部屋だった。

俺たちの部屋より大きく、どことなく片瀬邸に似ていた。

ロビーの天井にあるシャンデリアの縮小版みたいな、煌びやかなシャンデリアがあり、聳え立つ本棚には分厚い本がぎっしり詰まっている。校長室にあるような大きな机の上には書類が散乱していた。

「書斎、ですか……？」

「わたくしの部屋でございます」

部屋の中央にある2脚のソファのうち一つに掛けるように促しながら、狩谷は答えた。

腰を下ろして辺りを見回す。

執事といっても片瀬家の中では相当偉い立場にいるに違いない。

「へー、なんか立派ですね」

狩谷はそれには答えず、ソファの前にあるテーブルに予め用意していたのだらうティーポットから、紅色の液体をガラスの丸いコップに入れて差し出した。

「どうも。……ん、うまい」

口をつけるとそれは紅茶だったらしく、冷たい液体が喉を潤した。

狩谷は俺の感想を聞いて少し嬉しそうに目尻を下げた。

「で、話ってなんですか？」

あまり狩谷の部屋に長居したくないので俺の方から訊くことにした。

「はい。霧宮様には明日のことを少々お話しなくてはなりません」

あれ？さっきは緋那お嬢様のことでって言ってたじゃねーか。

「緋那お嬢様についても、そのことでお頼みしたいのです」

俺の考えを読んで、先に狩谷が付け足した。

「はあ、なんでしょう」

もうここまでくると既視感を覚えずにはいられなかった。

狩谷からの頼みごと。

それは俺にとっての厄介ごとでしかない。

たぶん今回もまた俺に片瀬のことを押し付けるんだろう。

俺は悟りを開いた気分で狩谷の次の言葉を待った。

「明日わたくしは、あなた方をここにおいて帰ろうと存じております」

「……はい？」

悟りを開いた俺でも意味がわからなかった。

30日目『狩谷の頼みごと』（後書き）

ついに2ヶ月ほったらかしにしてしまいました。酷いですね。誰とは言いませんが。

読者様からのコメントが胸に痛いです。それでも続きを上げない自分にはきつと「小説家になれない」ってサイトがあっているんだと思います。はい。すみませんほんとダメな子なんです。

さあ！いよいよもって高校卒業までにこの物語を終わらせることができるのか不安になってきました。

そんな初冬の18時9分。

31日目『楽観視』

緋砂島に来て早々、あの一見クールで近づきがたい、一応俺の親友である司と、その姉で、天真爛漫と傍若無人を足して二で割ったような人である有紗先輩。その二人が姉弟であるという事実を知らされた。

またその日のうちに、寝ぼけた瑞穂と図らずして唇を重ねるというアクシデントに見舞われることになる。

俺はなんだか一気に年老いた気がしなくてもない、一言で言うところ濃いい日を過ごしたのだった。

そして昨日、俺はとんでもないことを狩谷から聞かされた。

それはよく言えば、人に頼りきった生活を余儀なくされていて、またそれを甘んじて享受している俺たち現代っ子への経験の場の提供であり、狩谷なりのサプライズで優しさである。が、アンチテーゼは恐ろしいものだ。実際には、育児放棄をした母親ライオンが我が子を崖から突き落として「あとはどうぞ勝手にやってね」と言わんばかりの不条理なことなのだ。

職務怠慢、と言う言葉が正しいかはわからないが、ご主人様の身の安全を仰せ付かった狩谷としては、過失を問われても文句は言えないのではないかと思う。

要するに狩谷は昨日何を言ったのかというと、私はこの島からいなくなりますから後は残った皆様でどうにか生活してください、ということだった。

その話を聞いた俺は一瞬耳を疑ったが取り乱しはしなかった。

よくよく考えてみればこの旅行行程から考えて、一晚を保護者なしで過ごせばいいだけだし、仮に一週間くらい放置されたとしても、この別荘には十分すぎるほどの食料と、生きていく上では必要不可欠な水もあるのだ。

何も心配することはない。ただのちよつとしたレクリエーションだ。

と、内心安心しながらも一応、狩谷の話をぶすくれた風を装って聞いていた俺だが、果たして狩谷という迷惑さでは有紗先輩に引けをとらない老人は、そこまで優しくはなかった。

それを今になって如実に実感し、己の浅はかさを呪った。

旅行三日目。異変は突如起きた。

太陽も真上に差し掛かった頃に、昼食を取るために片瀬の別荘に戻ったときのことだ。

その日は朝からマリンブルーの海へと駆り出し、足元が透けて見えるほど透き通った海水の中ではしゃぎ回っていた。昨日も日が暮れるまで遊んでいたのに、まだそんな体力があるのかと感心するほ

どに。

もちろん、朝早くから文字通り叩き起こされた男子連中は不満たらただった。しかし、そこら辺で拾った貝殻を笑顔で突き出してくる瑞穂を見たら、どうしても憎む気にはなれず、だから俺も司もお互いの緩んだ顔を馬鹿にし合っては、無意味に競泳して汗を流した。俺もなんだかんだ言って浮かれているのかもしれない。

女子も女子でサンゴ礁の欠片を拾っては喜び、足元を縫うようにして泳ぐ小魚を見てはきゃっきゃとはしゃいでいた。

そんなことをやっていたもんだから、正午には皆はらぺこになって戻ってきたのだ。

水着のままの俺たちは髪の毛も身体も湿ったまま。バルコニーの床は滴った雫で濡れている。その水滴の跡が急激に乾いてくのが見てわかるくらい、太陽の熱で熱せられた床は熱くて、皆足踏みしている。裸足で立つには砂浜も床も辛くて、早くも海の中に足を浸けたい衝動に駆られた。

有紗先輩が「今日のご飯はなっにかな」とハミングを交えて上機嫌で玄関のノブを回して、怪訝な顔に変わった。

「ねえー、このドア開かないよー？」

先輩が振り向くと、瑞穂が「私に貸してみなさい」とノブを回してはガチャガチャと引つ張った。

「……ほんとだ開かない。狩谷さんが閉めたのかしら？ねえ緋那ちゃん。ここの鍵持ってない？」

「ごめんなさい。鍵は全て狩谷が管理していて、私は持ってないんです」

片瀬は申し訳なさそうに胸の前で手を組んでいる。

「そう……。じゃあ狩谷さんは何か言っただけだった？」

「いいえ、何も言っただけだったと思います」

「そうよねえ……」

瑞穂が思案顔で腕を組む。

「じゃあめんどくさいけど、鍵が開いてる窓探して入るか狩谷さん呼んでくるしかないね」

有紗先輩が腰に手を当てて溜息混じりに言っただけ、俺、司と視線を巡らした。

俺は次に先輩が何を言うかだいたい予想がついて、司に恨めしい一瞥をくれてやる。司も然り、だった。

「ほら秋人っちに司。何してるの！秋人っちは家の周り一周！司は狩谷さん見つけてくる！ばさばさしてると、ここにいるか弱い少女三名が飢え死にしちゃうんだから」

有紗先輩は胸の前に手首の力を抜いたまま両手を持って来る。日本の幽霊のマネだ。そして目を細めておどろおどろしくこう言うのだ。

「そしたら化けて出てやるぞ？」

俺がなんて反応したらいいのかわからなくて、しばらく固まっていると、

「少なくともお前は少女じゃなくて大女おおんなだろ」

司がバミューダのポケットに手をつつこんだまま、そっぽを向いてぼそぼそと呟いた。

「あゝ？なんか言った？」

「いいえなんにも」

有紗先輩の凄みを尻目に、司は片手を上げ億劫そうに二三回振って、今来た浜辺のほうへと引き返していった。

「秋人つちも早く行く！」

「えー……」

無言で睨まれた。有紗先輩はそれなりに端正な顔つきをしているので、それはそれは怖い顔になっている。

「へ・ん・じ・は？」

「マッハで」

「よろしい」

そう言うてにこりと笑った。

むちゃ言うなよ……

思っても口に出さないのが上手な生き方。昔瑞穂のお父さんが言ってたことを思い出す。うん、無理だ。

「じゃあ先輩方は…… ああ、男子より体格がよくてか弱い先輩方はどうぞ日陰でお休みになっていてください」

たつぷりと嫌みったらしく言って、後ろに罵声を浴びながら俺はその場を離れた。

それにしても、甘く見ていた。別荘があるから大丈夫とか、そんなもんじゃなかったんだ。

してやられた歯がゆさで唇を噛む。

俺だけは、今のこの状況が何を意味しているかわからないわけではない。狩谷が“戸締りを忘れる”なんてミスを犯していることに期待しながら、最初の窓に手をかけた。

31日目『楽観視』（後書き）

いよいよセンター試験まで一年を切ってしまいました…。まずいまずい。

最近是学校行つてバイトしてその金で塾行つて家帰つて寝る、みたいな生活が習慣化してきました。

はい、どうでもいいですね。それよりも小説です。3ヶ月ちよいです。休載期間。ハター×ハター並です。読者の皆様にはもう申し開きの言葉もありません。

次の話できてますが、もうちょっと直してから上げたいと思います。

32日目『泣いたカラス』

今しがた戻ってきた司の言葉を聞いて一同は啞然とした。有紗先輩は司にどういうことよと詰め寄り、片瀬は露台に力をなくしたようにへたり込んでいる。瑞穂でさえも頭痛が酷いときのように頭を手をやっている。

司はやはりこう言った。

クルーザーがない

それは狩谷の計画の始まりであり、俺が端^{はな}から聞かされていたことだった。

しかし予期せぬこともあった。

俺たち五人が片瀬の別荘から締め出されてしまったらしいということだ。

あれは鍵の開いている窓はないかと一つ一つ確認し、ちょうど玄関から反対側に来たときのことだった。几帳面に、まるでわざとセツトしたかのように置かれているある物を、俺は発見した。

そこに申し訳程度に置いてあったのは、俺たち五人分の寝袋と、釣竿二本、鍋、ナイフ、ガスバーナー。

しばらく辺りを探したが、食料や水はどうしても見つけれなかった。

食べるものは自分で確保しろってことなのか、または別のどこかに置いてあるのか……。

それでも一応何とかかなりそうな感じではある。特に火をおこせるのが大きい。ただし飲み水を見つけれなければ、どうしようもない。

俺の考えが甘かった。この別荘があればなんということはないと高を括くっていたが、裏を返せば、別荘がないとどうにもできないということではないか。

狩谷は最初からただいなくなるだけでなく、俺たちを野ざらしにする気だったのだ。

「あ」

そこではたと閃いた。

窓ガラスを割って家の中に侵入できるんじゃない？

今手をかけている窓を見つめる。中はどこかの客間であろう。俺たちの寝泊りしている部屋とはまた違ったモダンな雰囲気の中で、いかにも高級そうな調度品が部屋の端々に見受けられる。

外で寝るより確実に安全で快適だ。

思い立ったら速行動。転がっていた手ごろな石をつかんで、思いっきり窓めがけて投げつけた。

しかし鈍い音がただだけでガラスが割れる気配はない。

もう一度投げたが結果は同じだった。

防弾ガラス。

こうなるともう狩谷の思惑通りに動くしかない。俺は辟易する他なかった。

今後どうするか、こうなることを狩谷が予め俺に話していたというのを皆に打ち明けようか、そんなことを考えながら玄関前に戻ったのが、司が戻ってくる数分前。

結局、か弱い女の子三人には窓はどこも開いていなかったとだけ説明した。

「おい、これはどういうことだ？」

司が俺に耳打ちする。沈黙考する俺の姿に、司は何か不自然な様子を感じ取ったのか、やや詰め寄るような口調だった。

俺はそれに答えずに、ただ首を横に振った。

「……あのさ、」

ぼつりと、口を衝いて出た。

しばらく言うのを躊躇ったが、黙っててもしょうがないと踏ん切りをつけて、俺は裏で見つけた物のことを皆に打ち開けた。

瑞穂がずいと顔を近づける。

「はあ！？それって」

「俺たちはこの無人島に取り残されて、かつこの別荘からも締め出されたってことだな。寝袋が人数分きっかり置いてあるということ、狩谷さんは少なくとも今日には戻らないし、しかも外で寝ろってことなんだと思う」

「っ！！」

瑞穂は俺に詰め寄った状態で固まった。たぶん頭の中は混乱してぐるぐると回っているに違いない。

「さすがの私もこりや意味わかんないや……」

あの有紗先輩も眉間を押さえている。

足元からずずと洩をすすする音が聞こえた。

「っ！きり……くんっ……わたしっ……どうすれば……」

座り込んでいる片瀬がこれまで俯いていた顔を上げると、いつのまにか彼女の顔は涙と鼻水でグチャグチャになっていた。

「わわっ、片瀬さんなに泣いてんのっ」

慌てて俺は片瀬の肩に手をかける。手をかけてからどうすればいいかわからず、とりあえず背中をさすった。

「だって、狩谷がっ……どこかつ、いつ……ちゃって……」

「落ち着いて片瀬さん。大丈夫だから」

狩谷が俺にだけ自分がいなくなることを話していた訳がわかる気がする。

自分が消えたことに残された俺たちが気付いたとき、当然パニックになる。でも、そうならないように誰かが心を支えてあげなければならぬ。言うなれば、皆の「まとめ役」に俺が抜擢されたということだ。

なぜ俺なのかは、普段俺が一番片瀬のそばにいるからなのだろう。もつと言えば、片瀬の警護役として俺にいろんな経験を積ませるため。もしくは……。

片瀬はさっきから子供のようにはげを漏らしながら泣いている。

もしかしたら片瀬に一人前になってほしいから、わざと俺だけに言ったのかもしれない。短い付き合いだが、これまでを思い返してみると、片瀬は全幅の信頼を狩谷に置いている。それは言い換えれば、まだまだ狩谷に頼りつきりということだ。

それではこの先、片瀬にとってよくないと狩谷は思ったんだろう。なんとなくなだが、親心にも似た狩谷の気持ちが読み取れるような気がする。

そんなふうに俺は狩谷の思惑を捉えた。

どうも俺は狩谷になにかと買われているようだ。じゃあ俺はそれに応えられるよう頑張るしかない。

俺は一つ咳払いをして、皆を見回す。そしてもう一度片瀬を見た。

「とにかく、狩谷さんが俺たちを見捨てるわけないし、殺す気もないことは確かだろ？釣竿とかその他諸々のアウトドア用品を置いていったのが証拠だ」

「じゃあなんで狩谷さんは私たちを置いてどこかに行ったの？」

瑞穂がいまいち納得していない顔で尋ねてくる。

「それはわからない。けど、狩谷さんは俺たちをおとし陥れようとしているわけじゃない。なにか理由があるはずだ。もしかしたら、というかたぶんこれも狩谷さんの旅行プランの内なんじゃないのかな」

皆黙って俺の拙い演説に耳を傾けてくれている。

「だったら俺たちはこれをただのキャンプだと思えばいい。な？ポジティブに考えよう。楽しもう。何の心配もいらない。……あ、食料と水の心配以外に。と、とりあえずどうにかなるって」

俺は皆を、特に片瀬を安心させるように言って聞かせた。

司は初めからたいして動揺してなかったからどうでもいいが、有紗先輩曰くか弱い少女の三人には効果があつたようだった。瑞穂も有紗先輩もようやく落ち着きを取り戻したらしい。「確かに狩谷さんだもんね。それにしてもキャンプか……それはそれで……」と、瑞穂もしきりに頷いてはブツブツと呟いている。

俺は不安そうに顔を歪めている片瀬の顔を覗き込む。さっきまで

飼い主に見捨てられた子犬のように生気を無くしていた片瀬の目には、涙の代わりに強い意志の籠った瞳があった。

「よくよく考えてみれば、狩谷さんが片瀬さんを見捨てるわけがないよ。それに、ここにいる人たちは頼れる人たちばかりだ。俺は……まあ少し頼りないけど、でもたよってくれて全然構わないから。だから片瀬さんももう泣かないで」

小さい子をあやすように頭を撫でる。安心させるようにできるだけ優しい笑顔を作って微笑むと、片瀬は思いきったように俺の名前を呼んで抱きついてきた。肩膝立ちだった俺は、耐え切れずに尻餅をつく。

「うわっ！ か、片瀬さん！？」

条件反射で離れようとすると思えば片瀬は逆に強い力で抱きしめてくる。

有紗先輩が「ひゅうー」と口で言う。口笛じゃないのがワザとらしい。

「霧宮君、私頑張ります。頑張って生き延びてみせます！」

「う、うん、そうだね」

なんか違う気がする……。

でも、片瀬が気を取り直してくれたので、ほっと胸を撫で下ろした。俺はなんとなくそのまま片瀬の頭を撫でていた。

そうしているうちに気が気でなくなってきたのは、色々と当たる

感触だった。

俺は水着で片瀬も水着で、つまり俺は上半身裸で片瀬もほとんど裸で。いかんせん肌の触れ合う部分が多すぎるというか、胸の柔らかい感触が直にくるというか。

不潔だと頭ではわかっていても、どうしても思考はそっちに流され、下半身が反応するのもこれ以上抑えられない。

気が緩んだ瞬間これが……。

今も渾身の力で抱きすくめられたままの俺は、情けないやら気恥ずかしいやらで、自分に対して笑った。

「あきとお……なにニヤけてんのよ」

しまった、こいつがいたんだと思ったときにはすでに遅く、口からはさつきとは明らかに種類の違う乾いた笑いが漏れる。

「片瀬さん、とりあえず離れたほうがいいよ」

「えと、もう少し……」

「はあ!？」

極寒の地の湖面が割れる音を聞いた気がする。そればかりではなく寒気までしてきた。

男としてぐつとくるこの状況に瑞穂がいなかったら、と何度思ったかわからない。

「……少し男らしいと思ったたら抱きつかれてニヤけて、あまつさえ離そうともしないなんて……あ、秋人なんか今すぐ死んじゃええええー！」

「お前それぜんぜん意味わかな、痛っ！ちよっ！やつ！やめてっ！マッ、マジっ、あ、舌嚙んだ……！」

後頭部を何度もゲシゲシと蹴られ続ける。

「ははっん、嫉妬ね」

「嫉妬だな」

傍観を決め込んだ倉本姉弟が離れたところで腕を組んでいる。司め……。

「ちよっと、緋那ちゃんのこといいかげん離しなさいよっ！」

「いい、かげん、蹴るの、やめろっ！」

今度は俺が片瀬を抱きすくめる形になっている。瑞穂の蹴りが次々と飛んでくるので離すにも離せない。というか、ぶっちゃけ離すには少々惜しい気もする。

ふと、俺の腕の中からくすくすと笑い声が聞こえてきた。

残念ながら片瀬の表情を覗き見ることは叶わないが、それでもどんな表情をしているかは容易に想像できた。

俺も蹴られながらニッシシと笑った。嬉しかったのだ。

泣いたカラスがもう笑っていたから。

32日目『泣いたカラス』（後書き）

書き始めてみると1話書くだけでもかなり時間がかかってしまうのは俺だけなんだろう。

ということ、になるはずだった連続投稿32日目です。ここからやっとバカンス編のサビ(?)の部分です。長かった…。

なんせ企画したのは一昨年の夏なんですから。

いつも(私が全然更新していない間も)感想くださってありがとうございます。応援されるスポーツ選手の気持ちかわかるようです。

更新は、たぶん3月中にできると…いやします。

33日目『水、水、みず』

「ねえー！秋人どこー？」

鬱蒼と茂る亜熱帯降雨林の中に瑞穂の声が響く。

「こっちこっち」

俺は立ち止まり、やや後ろからついてくる瑞穂にわかるように大きく手を振った。

椎^{しい}や樟^{くすのき}と見られる背の高い木々に混じって、シダ植物やコケがあらち^ちらこちらに群生しているのが見て取れる。

「ちょっとおいてかないでよ！ケータイもないのにはぐれたらどうすんのよ」

「悪かったって。急ぎ足になってたな。気をつける」

現代っ子の必需品である携帯電話は別荘の中。今の唯一の連絡手段は大声で叫ぶことぐらいなものである。なんとも原始的であるが仕方がない。

「それにしても案外ないものですね」

隣にいる片瀬が残念そうに呟く。

「うーん、確かに。映画ではこういつときたくさん^なの果物がそこらじゅうに生^なってんのにな」

俺は今、瑞穂と片瀬と三人で森林の中を散策している。ただの散策ではない。これが、海で遊ぶのに飽きて暇だからちよつと森の中でもお散歩しようぜ、的ななんとも若者らしく健全な暇つぶしなら良かったのだが、違う。

あえてもう一度言おう。これがただの散策ではないと。

これは、命を懸けた散策なのだ。

俺たち五人のうら若き学生諸君は、狩谷の陰謀により無人島に置き去りにされ、家から追い出されてしまった。さながら無人島に漂着した難破船の乗客のようだ。

ゆえに食料調達をせねばならず、かつ、こちらはもつと迅速に、水の確保をしなければならない。

倉本姉弟は釣竿二本を携えての別行動だ。二人には今夜の主食となる魚を釣ってもらっている。この暑い中大変だと思いが仕方がない。

なぜこの組み合わせになったのかというと、たいした理由もないのだが、まず釣り経験者が倉本姉弟のみであつて、万一に備えて男共は別々に行動したほうが良いとなると、選択肢はかなり絞られてくる。

さらに俺は昨夜、狩谷に片瀬のことを頼まれていた。一方的に、私がない間、緋那お嬢様の身の安全は霧宮様にお託し申し上げます、と。

そんな理由からこの二組に分かれての別行動と相成ったわけだ。

別れ際、有紗先輩が妙にニタニタしていたのが気に食わないが。

俺はナップサックからペットボトルを取り出し、清涼飲料水で少しだけ口内を濡らした。

このスポーツドリンクは、今朝海に出たときに各自一つずつ持っていたものだ。また、この水は狩谷から与えられたまっこと貴重な聖水であり、ペットボトルは俺の活動限界を知らせるガソリントンクである。だから大切に飲まなくては簡単に行き倒れてしまう。

幸いなことに、ボトルの中にはまだ半分以上残っている。しかしこれもいつまでもつか……。一刻も早く水源を見つけなくては。

ペットボトルをしまおうとナップザックを開ける。中にはもう二つペットボトルが入っていた。瑞穂と片瀬の分だ。しかし中身はとうに無くなっている。つまりは俺の持っているこのペットボトル分しか俺たちに残された水はない。なかなか危機的な状況である。

「あの、霧宮君。申し訳ないですが、私にも、ほんの少しもらえませんか？すぐ喉が渴いちゃって……」

そう頼み込んでいる片瀬は見るからに辛そうだ。額には大粒の汗がびっしり並んでいる。

全然気づかなかった。彼女が人より身体が弱いということはもう十分知っていたのに。そのことを差し引いても、彼女はお嬢様でこういうロードワークには慣れていないのは明らかだ。次からは片瀬の様子をもっと気にかけて行動しなくては。

「ごめん片瀬さん。辛そうなのに気づかなくて。はい、いくらでも飲んでいいから」

そう言っぺペットボトルを渡す。

「ありがとう。……ごめんなさい、霧宮君のなのに」

本当に申し訳なさそうに受け取っぺから、片瀬はキャップを開けた。

と、そこで彼女は開けたペットボトルの口を見つめたまま固まった。

「ん？どうしたの？遠慮しなくていいよ」

「あ、はい……。えっと……じゃあ、い、いただきます」

そう答えるものの、一向に飲む気配がない。

そこではたと気がついた。間接キスになることを片瀬は先ほどから気にしているのだ。

「あー、ごめん。毒ではないから。その、我慢していただけると……」

すると片瀬は慌てたように手を振り、

「い、いえっ！違うんです。嫌とか、そういうんじゃないですから！はっ……、」

「は？」

「恥ずかしいだけで……」

彼女はこれ以上ないくらいに顔を沸騰させたかと思うと、ペットボトルを抱えたまま俯いてしまった。

そういうことを気にされるとこっちまで恥ずかしくなるんですが……。

苦笑いで困ったと瑞穂に同意を求めようと瑞穂を見ると、なんだか慌てたようにいて苦虫を噛み潰してしまったようで、とにかく変な顔をしていた。

なんだアイツ？

と、瑞穂は片瀬にそろりと一歩近づいて、

「緋那ちゃんが飲まないんだったら私が先に」

「霧宮君いただきます！」

急に顔を上げると、片瀬は思い切ったように勢いよく飲みだした。

「あっ……」

瑞穂がペットボトルを奪おうと出した手を宙に浮かせたまま固まる。

「くく、くく、くく」

片瀬はなおすごい勢いで飲み干していく。俺は呆気にとられたままその光景を見つめるしかなかった。

「……ん、んく、ぷはあ。はあ、はあ……あ！き、霧宮君ごめんなさい！全部飲んでしまいました……」

なんと片瀬は息もつかずにペットボトルの水を全て飲み干してしまった。そのことに当の片瀬自身が一番驚いていて、あたふたと困惑している。

「み、水……。俺の、みず……」

俺は逆に全身の力が抜けてしまって、空になった俺のエネルギータンクを見つめていた。

瑞穂はなぜだか悔しそうな顔をしていたのだった。

33日目『水、水、みず』（後書き）

センター終わりました。前期終わりました。後期は：知りません。一年ぶりの更新です。長らくお待たせしてしまうことになり申しわけありませんでした。

これから大学まで少し暇ができるのでばちばち再開できたらいいなと思っています。

34日目『滝発見!』

葉と葉のさざめく音に混じり微かに聞こえる。さわさわと、言葉では表現できない、聞いているだけで涼しくなるようなあの音。

「あ、秋人!？」

瑞穂の声を背に俺は走り出した。

無数に林立する熱帯樹を掻き分け、不安定な足場に転びそうになりながらも走った。

間違いない。土の感触。冷やかな空気。期待は着実に確信へと変わっていく。

不意に視界が開けた。と同時に、確信は喜びに変わった。

あった。

人二人分くらいの高さから絶え間なく落ちる水。それが直径十メートルほどの滝つぼに次々と吸い込まれていた。

「滝だ…。水だ…。いよっしゃああ!ー!おい、瑞穂!片瀬さん!」

「ちょっと秋人ったらどこまで行く……え?」

「き、霧宮君置いてかないでくだ……あ」

俺はくるりと二人に向き直って、両腕を腰にかけ胸高々に、

「どーだスゴイだろう偉いだろう。微かに聞こえる滝の音を頼りにここを見つけた俺様の、なんたる偉功。功労。勲労！これを機に瑞穂は俺を見直し、いや違うな……敬い！崇め奉るべし！片瀬さんは……褒めてくれると嬉しいかな」

キまった。この気持ちはなんだろう。この気持ちはなんだろう。ああ、久しぶりに俺カッコいい。

俺がわずかばかりの功績に一人酔いしれていると、腰にかけている両腕が急に圧迫され、重くなった。

「秋人偉い！今回ばかりは素直に見直すっ」

「霧宮君スゴイです！やっぱり頼りになりますっ」

予想外の事態が起きた。二人に両側から抱きつかれている。片瀬さんだけでなく瑞穂さえもがデレた。ここまで反応が素直だと逆に怖い。

「え、え？あの、ここはなんかしらツツコむところじゃ……」

「私もうヘトヘトだったの。喉はカラカラだし。だから秋人には感謝感謝」

「はい。私も実は限界で……。もうちょっとで弱音はいちゃうとこでした」

二人はなおも猫のように擦り寄ったままだ。上にパーカーを羽織

っているとはいえ、その下は水着一枚。もう何も言っまい。

「ああ、両腕が幸せでいっぱい」

漏れた。口から漏れた。

全身からさあつと血の気が引く音がしたかと思うと、二人がバツと身を引いて胸を押さえる。

「「えつち」」

二人はきれいにはもると、じと目で俺を睨んできたのだった。

秋人は水分補給を終えると、そそくさといなくなった。有紗たち
にこの場所を知らせるためだと言っていたが、実際はどうなんだか。
どうせいたたまれなくなつて逃げ出しただけだろう。

残された私と緋那ちゃんはこの周辺の探索と食料調達を任されて
いた。

「不思議ですね」

「え？」

食べられそうな果物がなっていないか木を見上げていると、隣で

同じく見上げていた緋那ちゃんが口を開いた。

「あの滝です」

「滝？」

緋那ちゃんは見上げるのをやめ、それほど高くはない滝を見つめていた。

「滝がどうかしたの？」

「はい。こんな小さな島のどこから水が流れてくるんでしょうか」

「ううん…、私にもわからないなあ。こういう自然の摂理に詳しいわけじゃないし」

それほど高くはない滝のてっぺんは背後にある空の薄い青と混ざり合って、まるで空から水が流れ落ちてきているかのように見えた。

陽光が射す滝つぼも幻想的で、ここだけばかりと開いた空間は、木々が光を遮っている周りの空間のせいもあるが、眩しいくらいの光に満ち満ちていた。

水面に光が反射し、時折水鳥が水面みなもを揺らす。

見ているだけで心が安らぐような、なんとも心地よい空間だった。

「でも、そういうのはわからないけど、自然ってすごいなあってのは見てるだけでわかるかな」

少しはにかみながら緋那ちゃんに視線を向けると、彼女は欲しかったおもちゃを買ってもらった少女のような横顔をしていた。

「私、あの街から出たことってあまり無くて。ましてやこんな風に友達と旅行するなんて経験は今までありませんでした。潮騒も、砂浜も、滝も、いつも病室のテレビの中でしたから。だから」

緋那ちゃんがこちらを向いた。

「今すごく楽しいんです。みんなと、綾崎先輩とここで過ごせて」

そう言う緋那ちゃんの顔はすごく晴れやかで、この子はなぜこんなにも人を幸せにできるのか。

素直で、けなげ健気で、優しくて。

自分とは正反対の女の子がそこにいた。

秋人もきつとこういう子が好きなんだろうな

目の前の彼女が羨ましくて、素直じゃない自分が妬ましかった。

「先輩？」

不思議そうな顔で緋那ちゃんが見つめていた。

「あ、ごめん。なんでもないの。私も緋那ちゃんと来れてとっても楽しい」

自分は今、素直に笑えただろうか。

緋那ちゃんは少し照れたような顔で笑い返してくれた。

「あつ、そうだ。せっかくだから水浴びしない？さっきから汗で体中べとべとだし」

「えっ？でも霧宮君たちに悪いんじゃない……」

「いいのいいの。秋人もちょうどいないんだし今のうちに、ね？」

緋那ちゃんは少し迷っていたようだが決断は早かった。

「はい！」

満面の笑みを乗せた元気のよい返事が返ってきた。

「よし、じゃあせえのでジャンプね！」

「えっ？ちよつと待って心の準備が」

「せえーのー！」

「あつ……」

じゃぼん。

二人分の水音が森の中にこだまする。

水に浸かった足首から、きーんと頭のとっぺんまで冷氣が走った。

「「つめたい」

図らずとも同時に出了その言葉に、二人で笑い合った。

35日目『時よ』

小川が流れる方向とは逆に歩みを進めていく。それもずいぶん早足で。額から流れ落ちる汗が目に染みる。ビーチサンダルの鼻緒が痛い。

俺は焦っていた。早く。速く。

有紗先輩への憤りをぶつけるように地を踏みしめながらも懸命に歩く。

そう。有紗先輩のせいで俺は焦っているのだ。

遡ること十数分前。

瑞穂たちを残し、俺は炎天下の中釣りに勤しむ倉本姉弟に命の水を届けるべく、一人浜辺に向かった。二人分の胸の感触に鼻を伸ばしていたのがばれて、いたたまれなかったことも一因であることも付記したい。

それはともかくとして、滝つぼから流れ出る一本の小川を辿ったわけだが、これが見事、俺たちが昨日遊んでいた浜辺と、片瀬の別荘を挟んだ反対側に通じていた。倉本姉弟はそこからそう遠くない岩場にビーチパラソルを設営して釣りをしていた。

案の定二人のスポーツドリンクは空になっていて、二人とも暑さのためか口数も少なかった。あの元気の塊みたいな有紗先輩のダレた姿など想像だにしていなかったので、珍獣を見に来た動物園の客のような視線を送ったら睨まれた。その顔すらも怖くなかったが。

そんな状態でも、どこからか持ってきた青いバケツの中にはすでに魚が大量に入っていて、これでも少ないほうだというのだからすごいものだ。あの姉弟は何をやらさせても人並み以上なのだろう。

俺は小川を辿った先に滝があることを告げ、持ってきた三本のペットボトルを渡すと、司が一本、有紗先輩が二本、瞬く間に飲み干してしまった。俺の手からボトルを奪うときの目なんかは血に飢えた猛獣のようで、一瞬たじろいでしまった。

そして有紗先輩は空のペットボトル五本を俺につきつけてこう言った。

マッハで汲んできなさい。じゃないと秋人っちの分の魚は無しと。

俺はため息をつきながらナップサックを背負いなおした。空のペットボトルが中で軽い音を立てる。普段なら軽い荷物のほうが嬉しいのだろうが、今はペットボトルの中身が満タンであってほしかった。

「俺だって疲れてるのに。のど渴いてるのに」

有紗先輩の人使いはあんまりにもあんまりだった。司の哀れみの籠った、しかし決して手を差し伸べようとはしない瞳が憎らしい。

「……………めてくださ……………」

水場までもう少しというところで、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「いいでしょお？ほおら、早くしないと秋人戻ってきちゃうよ」

「だ、だからじゃないですかっ！綾崎先輩もはやく来てくださいっ」

瑞穂のヤツ、片瀬と何してんだ？

来てとかどうか、あの二人は俺に黙って何をしているのだろう。

まあ何にせよ、こっちは下男よろしくこき使われてるっていうのに、二人仲良く遊んでいるとは許しがたし。

俺は疲れもあつてか、二人が遊んでいると思うと無性に腹が立って仕方なかった。

俺は眉間にしわを寄せながらさらに足早にずんずんと進んでいく。

「もー、往生際が悪いんだから。えいっ！」

「あつ！ちよっ……」

「お前ら！なに遊んでんだ……よ」

林を抜けてちょうど木の陰から顔を出すと、二人は水の上で組んずほぐれずの攻防戦を繰り広げていた。瑞穂が片瀬を後ろから羽交い絞めにし、片瀬がそこから抜け出そうと必死にもがいている格好だ。

「なっ！秋人！」

「きゃ！」

「……は？」

ただし二人とも裸で。

時が止まった。

実際に止まるはずなどないが、確かにここにいる三人の時は止まったのだ。

動かない。動けない。いや、正確に言うなら動きたくない、か。

瑞穂は文字通り素っ裸で布切れ一つ身に着けておらず、片瀬は胸と腰をわずかに覆うだけのセパレーツ型の女性用海水着　つまりビキニの胸の部分を瑞穂に鷲掴みにされた状態で固まっていた。

「キて」って着衣のほうかよ……

なににせよ俺は目の前の光景から目を逸らせなかったし、この後の展開を考えると、恐ろしくて身動きひとつできなかった。

ああ、できるならこのまま時よ永遠に

「いつ、いつ、いやあああああああつ！！」

「あ、秋人は後ろ向いてっば！」

「はいいいいい！」

片瀬の悲鳴が森にこだまし、瑞穂の怒号が俺を射抜き、俺の狼狽がこの後の結末を静かに暗示していた。

35日目『時よ』（後書き）

緋砂島編も11話目とずいぶん長くなってしまいました。もう少し短くしたかったのですが…。これも筆力の問題ですね（汗

それなのにクライマックスまでもうすこしあります。気長にお付き合いいただければ幸いです。

現在外は大雪。季節感まるでなし！

36日目『身体的ダメージ 心的ダメージ』

俺はパーカーの襟元を掴み上げられながら必死に救援を求めた。眼前には鬼神のごとき眼光を放つ常勝のヒューマン兵器が、そのわななく拳を振り上げている。

この場で唯一彼女を止められる人物を探す。もはや俺は同じく被害者であろう少女に助けを請うしか他に道はなかった。

視界の右端に膝を抱えてうずくまる人影を捕らえた。一縷の望みを賭けて呼びかける。

「片瀬さん！頼むから助けて……！」

「……みやくんに見られた……霧宮君に見られた……霧宮君に見られた……霧宮君に……」

駄目だ。終わった。

片瀬はぶつぶつと何かを呟きながら、人差し指で地面に円を描くことに夢中だった。

万事休す。

「ねえ秋人、どこから殴られたい？頭？顔？おなか？それとも」

鬼婆のような形相が、一転して聖母のように柔和な顔つきに変わった。その後光さえ射して見える彼女の口からは、子供を諭す母親を髣髴とさせる声で、その雰囲気と真逆の恐ろしい呪詛が紡がれる。

「どこももう殴られてるわ！やめろ瑞穂！この暴力マシーン！」

「あれ？何でそんな口の利き方するの？秋人ってMだったけ？」

これだ。本気で怒った瑞穂は優しい口調で猫なで声なのだ。俺の中で往年から積み重ねられてきたこの恐怖は、何物にも代え難いトラウマとして肺腑に植えつけられてきた。

綾崎瑞穂という秀麗な外見に籠絡されている輩は、この声を聞いただけで腰砕けになるだろうが、俺の場合は違った意味で卒倒もんだった。

世界一恐ろしい微笑みを湛えた彼女はなおも攻撃の手を休めない。

「やつ！やめっ！い、痛い！股間は、はんそ……………ッ！」

瑞穂の膝が俺の脚の付け根にクリーンヒットする。その天を突こうかという一撃に、俺の心と同じくらい繊細である器官が耐えようはずもなかった。

俺は男の大事なところを押さえてその場にうずくまった。内臓が無理やり上方に押しやられるような激痛が、脈動とともにどくんどくと襲い掛かってくる。あまりの痛みに額からは脂汗が滲み、口からはよだれが垂れ流しになっている。

ジャンプ、ジャンプしなきゃ……

悶絶する中で、本能があるいは身体に刷り込まれた苦汁がそう告げていた。

しかし全身タコ殴りにされ満身創痕の俺は、立ち上がることはおろか、顔を上げ俺の身体を蹂躪した歴戦の古強者ふるつわものを睨むことすら叶わず、地にひれ伏すのであった。

「ごめんってさっきから謝ってるじゃない」

「ごめんで済むかあああ！危うく俺のが使い物にならなくなるとこだったんだぞ！」

「それは困る、けど……」

「困るのは俺だあああ！何で元凶のお前が困る！」

「それは……」

俺と片瀬の前に立たされた瑞穂は、やや拗ねた感じで居心地悪そうに羽織っているパーカーの裾をもじもじと弄っている。

散々理不尽な暴力を振るわれた俺の虫の居所は悪い。ここぞとばかりに瑞穂を怒鳴りつける。

「だいたいなんだ？俺がせかせか働いてるってのに遊んでやがって。それも全裸で」

「うっ」

「あまつさえ嫌がる片瀬さんを脱がせようとして。それも全裸で」

「うっっ」

「それを偶然目撃した俺はノゾキか？水着をわざわざ脱いで全裸で遊んでる裸族を見た俺は！」

「そんなに全裸全裸言わないでよお……」

瑞穂は羞恥と罪悪感のためか少し涙目になりつつも、反抗の色を隠さない。

「裸を見た俺も悪かったけど、今回ばかりはお前が悪い。ちゃんと反省して」

「まあまあ霧宮君もこのくらいにしましょう。私は……うん、怒ってはいませんし、綾崎先輩も反省しているし。普通裸見られたら女の子は恥ずかしいものですから、瑞穂先輩の気持ちもわかってあげてください」

「緋那ちゃん……」

片瀬が瑞穂のフォローに入ってこの話は終わりにしましょうと調停役を買って出る。しかし瑞穂はこれ幸いと片瀬の言に便乗してきた。

「そうよそうよ。秋人はノゾキの常習犯なんだから、前みたいにノゾかれたって思っても仕方ないじゃない」

「え！？まさか霧宮君、以前にノゾキを働いたことあるんですか…？」

片瀬の軽蔑のこもった冷たい眼差しが俺を貫く。

「違うっ！断じて違う！ノゾいたことなんて一度もない！前回も今回も悪気は全くない」

確かに過去に瑞穂の入っている風呂にそうとは知らずお邪魔したことはあるが、俺の過失は問われるにしてもワザとではない。死地に自ら率先して飛び込むなど、草食動物のすることではないからだ。

「あらどーかしら。あのお風呂場に、秋人裸で突貫してきたじゃない」

「き、霧宮君がそんな人だったなんて……」

「待ってくれ片瀬さん！誤解だ！誤解なんだ！瑞穂もデタラメ言うなよっ！」

「デタラメエ？ついこの前のことも忘れちゃったの？」

「つい……。この前……」

「だあああああああ！！瑞穂！お願いだから勘弁してくれ！」

「かんべん？ってことはノゾキだったって認めるの？」

「霧宮秋人君……」

「ちつがああああう！片瀬さんもフルネームで呼ばないで」

瑞穂の反撃により、片瀬の中での俺の株は急激な下落に陥った。

この後片瀬の誤解を解くのに大変な労力と時間を割いたことは想像に難くないだろう。

瑞穂に切れるカードを握らせすぎたことは自分にとって最大の損失であり、ここにきて再度、彼女を不倶戴天ふぐたいてんの、しかし極力歯向かってはならない敵と認識せざるを得なかった。

36日目『身体的ダメージ 心的ダメージ』（後書き）

33話からこのお話までで一話のようです。
ようですって書いたのは私なのですが（汗

次話から進展します

37日目『逢う魔が時』

「遅いぞおー秋人っち。一時間の遅刻だ」

小川を下り片瀬家別荘付近の海岸線に戻った俺たちに、バケツを持った有紗先輩が憤然と話しかけてきた。無論、バケツの中では大漁と言っても差し支えないほどの魚が窮屈そうに泳いでいる。

俺が無言でナップサックから水の入ったペットボトルを差し出すと、有紗先輩は引っ手繰るようにそれを奪って喉を鳴らしながら飲み始めた。

「…つぷはあ、とにかく秋人っち。君の夕飯は抜きということで異論はないな……って、どうしたのそのほっぺ。また綺麗な手形だ」と

「別になんでもありません。遅れてすみませんでした」

頬を隠すように押さえながら、俺は仏頂面で答える。

有紗先輩は俺と俺の後方にいる二人を交互に何度か見比べた後に、俺の大嫌いなニヤついた笑みを浮かべた。

「ははぁーん、さては秋人っち、また何か面白いことやらかしたな？ほら、なにがあったの？お姉さんに話してみなさい」

「遠慮します」

俺はにべもなく返し、さっきから姉の後ろで釣竿二本抱えて水を

飲みたいと視線で訴えかけてくる弟にペットボトルを渡そうとする
と、有紗先輩がガツチリと肩を組んでそれを阻止した。司の耳がし
ゅんと垂れたような気がした。

有紗先輩は俺の耳元で囁く。

「もし何があつたか話してくれたら夕飯の件はチャラにしてあげよ
う。それにさっきからツンツンしてる御二方のフロアにも回って
あげれるよ？ほら、どーせ後から吐くんだしさ。今吐いたほうが楽
だよ？」

この先輩はただ面白がっているだけだ。その証拠に、新しい玩具
を見つけた時の子供の、とびつきり獰猛な瞳をしている。しかし新
しい玩具をねだる子供の粘着力がすごいものであるように、有紗先
輩はそれにまた拍車をかけて凄い。きっとあの手この手で吐かされ
るであろうことは目に見えていた。

俺はやがて観念したように大きくため息をつく、事の顛末を掻
い摘んで説明した。

話を聞き終わつた有紗先輩は笑顔で一言。

「ふむふむ。それは役得だったね」

ふざけるな災難だ。しかし彼女の言っている通りに思っている自
分もいて、それが悔しかった。

俺は今日何度目かわからない水汲みへと出かけていた。俺以外の四人は、探索班が今日半日かけて収穫した“食べられそう”な果物と、フィッシング班が獲った大量の魚で夕飯の仕度をしている。できれば俺もそちらに混ざりたかったが、そうは問屋が卸さなかった。

まず何をするにも水は必要不可欠で、水汲みをする係りが一人は必要だし、俺には有紗先輩との約束を破った落ち度がある。瑞穂は裸を見られたこともあつてかご機嫌斜めだし、片瀬に至っては目が合うとすぐに逸らされて、常に二メートル以上の間隔を取られる始末だ。司はというとやけに疲れた顔をしていて、この炎天下の中の釣りが堪えたことも一因だろうが……。

いや違う。

俺は手を合わせ一人で呟く。

きつと有紗先輩に体力を根こそぎ持っていかれたのだ。有紗先輩はなにかと司にちよっかいを出したがるので、姉のそういうところが苦手な彼としては、あの二人っきりの釣りが想像以上に辛かったものと推察される。

俺は再度手を合わせせめてもと、頑張った戦友に念仏を唱えた。

そんなしがらみ渦巻くこの状況では、どうしたって俺が水汲み人員に駆り出されなければならないのであった。

ため息をつき、空を仰ぐ。

時は夕刻。背の高い木々の間から見える西の空は、微かに白み始めていた。あと半時もしないで空は茜色に輝きだすことだろう。きつと島の西側から見る水平線は絶景なのだろうかと、幻想的な世界になんとなく想いを馳せた。

そうしているうちに滝つぼに辿り着くと、背負^ひっていたナツプサツクから六本のペットボトルを取り出し両手に一本ずつ持って、滝に向かって手を差し伸べた。冷えた水が両腕の体温を奪っていく。

「あー気持ちいい……」

「霧宮様」

すぐ耳の裏側から名前を囁かれ、俺は文字通り飛び退いた。思わず水の中に尻餅を搦き、全身を水浸しにしながらも後ろを振り向いた。さつきまで手に持っていたペットボトルはゆらゆらと水面を漂っている。

はっとする。なぜ、どうして、お前が。

「な、なんで……」

「なんで、と言われましても質問の意味が正確には取れませぬゆえ、推測でお答えすることになるのですが……きつと“なんでここにいる”と仰りたいのでしょうか」

対顔する様相だけはいつちよ前の老紳士は、きれいに整えられた口髭を撫で付けながら、したり顔で片目を瞑った。

そいつは俺からの反応がないと判断すると、続けてこう言った。

「わたくしは片時も、緋那お嬢様の御側を離れてはおりません。お嬢様に万が一のことがあれば、旦那様に申し訳が立ちませんし、なにより」

半ば沈みかけていたペットボトルを拾い上げる。それを何度か横に回転させるように振って中に入っている水を捨てると、また水を汲み始めた。

「なにより、彼女は私にとっても宝物でございます」

白髪の初老は少し恥ずかしそうに笑っているように見えた。

俺はもう一つのペットボトルを拾い上げると、彼に並んで水を汲みなおし始める。

「で、狩谷さんは俺にそんな恥ずかしい台詞を言うために会いに来たんですか？ 大事な大事な片瀬さんから離れてまで」

驚かされたのが少し気に障ったので、嫌味を込めて返してやった。

狩谷は満杯になったボトルにキャップを閉めると、空の容器に手を伸ばした。

「いいえ違います。大事な大事なことを霧宮様にお伝えするために」

彼はゆっくりと、言い聞かせるように言葉を紡いだ。

「わたくしが皆様のため、いえ、緋那お嬢様のためにご用意したこの旅行の最大の目的が、このすぐあとに控えております。霧宮様に

はこの計画に一役買っていたきたいのです」

「また頼みごとですか？正直もううんざりなんですけど」

俺はこれ見よがしに唇を突き出した。

「……でも、片瀬さんのため、なんですよね？」

「その通りにございます」

狩谷は真剣な顔で頷く。

突き出した唇を横に引き伸ばし、にひっと笑った。

「ならしうがないですね。計画って何ですか？」

狩谷は少しほっとしたように頷くと、

「霧宮様のご協力、心から感謝いたします。……おお、そうでした
そうでした」

急に何かを思い出したように手をポンと打った。

「片時も離れなかったと申し上げましたが、お二方の裸身を見たのは霧宮様だけでございますゆえ、どうぞご安心なさってください」

狩谷はやはりどこまでも食えないやつだった。

37日目『逢う魔が時』（後書き）

大学に入ってからというものの予想以上にパソコンを開けません！そもそも自宅に帰ってこれません（汗）

能書きはさておき、実は話がもう2〜3話ずいぶん前からあるのですが、使いどころがわかりません。秋人と瑞穂の出会いとか夢の話とか…。

今後の進展次第で使うかどうか決めたいと思います。
できるだけ早いうちに次話上げたいなあ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4931c/>

彼女と陽だまりの中で

2010年10月9日12時36分発行